第11回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」報告書 2010

A Report of the 11th "International Participation Project"

天理大学地域文化研究センター
International Center for Regional Studies Tenri University

第 11 回「国際参加プロジェクト」報告書　2010

序　報告書刊行に寄せて

第 11 回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて
学長　飯降　政彦 1

第 11 回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて
天理大学後援会　会長　佐坂　量司 2

4 年間のインドネシアでのプロジェクトを終えて
地域文化研究センター長　住原　則也 3

第 11 回「国際参加プロジェクト（ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ・ﾆｱｽ島）」報告書刊行に寄せて
国際学部長　吉川　敏博 4

5 年前に思いをはせ、汗を流せましたか？
体育学部長　近藤　雄二 5

第 11 回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」報告書刊行に寄せて
文学部長　吉井　敏幸 6

第 1 部　プロジェクト・スタッフからの報告

第 11 回「国際参加プロジェクト」雑感
地域文化研究センター准教授　井上　昭洋 8

紙芝居と絵本による教育支援活動を振り返って
地域文化研究センター講師　関本　克良 10

インドネシアプロジェクトを終えて
国際学部教授　山本　春樹 14

「国際参加プロジェクト・インドネシア」を振り返って　～防災教育を中心に～
立教大学アジア地域研究所研究員
地域文化研究センター共同研究員　髙藤　洋子 17

2010 年・ニアス健康管理から
天理高等学校看護師
地域文化研究センター共同研究員　椋野　和子 23

第 2 部　学生による活動報告

目次 26
事前研修 26
宿泊研修 28
結団式 29

在メダン日本国総領事公邸表敬訪問 …… 30
プサントレインでの活動 …… 31
モアウォ小学校での活動報告 …… 33
① はじめに …… 33
② 絵本の読み聞かせ活動報告 …… 33
③ 紙芝居活動報告 …… 34
「防災教育のための紙芝居」 …… 35
【絵本の読み聞かせ活動の写真一覧】 …… 36-37
【紙芝居活動の写真一覧】 …… 38-39
「外国語教育のための紙芝居」 …… 40
④ ホームステイ報告 …… 40
⑤ モアウォ小学校での活動を終えて …… 42
⑥ お別れ会 …… 42
北スマトラ大学との交流 …… 44
帰国 …… 45

第３部　学生によるレポート

1. インドネシアの環境と現実 ～なんでゴミすぐほるん？～
上田　千穂　　国際学部地域文化学科（タイ語）１年生 …… 50
2. 背景を知るということ
栄　春奈　　国際学部地域文化学科（インドネシア語）１年生 …… 52
3. 教育が子供たちを救う
滝　まどか　国際学部地域文化学科（フランス語）１年生 …… 53
4. 私たちは何を残してこれたのか？
吉森　祥平
国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科フランス語コース２年生 …… 55
5. 手紙で始まる国際協力
上田　彩加
国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース３年生 …… 57
6. 腸チフスになって良かったこと悪かったこと　～病床で感じた家族の絆～
上田　裕太郎　　文学部国文学国語学科３年生 …… 58
7. 栄養と料理－ホームステイをとおして
大藤　孝洋　国際文化学部アジア学科韓国・朝鮮語コース３年生 …… 61
8. 紙芝居で防災教育
乙守　真喜
国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科フランス語コース３年生 …… 65

9. ホームステイを上手くすごせる説明書 in Indonesia ニアス島編
苅安　健太郎
国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース３年生 …… 67
10. 現地の言葉で話すということ
三枝　春菜　人間学部宗教学科３年生 …… 69
11. ホームステイ体験記
田中　元恵　人間学部人間関係学科生涯教育専攻３年生 …… 71
12. インドネシアの宗教
安藤　健太　国際文化学部アジア学科中国語コース４年生 …… 74
13. 音楽交流を通して感じたこと
石倉　護
国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース４年生 …… 75
14. たくさんの人に支えられて
逸崎　あずさ
国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース４年生 …… 78
15. 感謝するということ
斉藤　貴子　体育学部体育学科スポーツ学コース４年生 …… 79
16.「絵本・ハルばあちゃんの手」教育者としてどのように読み聞かせするか
阪本　健太郎　文学部歴史文化学科歴史学専攻４年生 …… 81
17. 絵本読み聞かせの工夫点
橋本　郁弥　国際文化学部アジア学科中国語コース４年生 …… 83
18. 日本のこどもたちに伝えたいこと
原田　亜紗美　体育学部体育学科スポーツ学コース４年生 …… 85
19.『変化』と『継続』の国際協力
渡部　京介
国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース４年生 …… 86

第４部　プロジェクト関連資料

モアウォ小学校への寄贈品一覧 …… 90
『天理時報』掲載記事 …… 92

序　報告書刊行に寄せて

第 11 回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて

学長　飯降　政彦

第 11 回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて

天理大学後援会　会長　佐坂　量司

4 年間のインドネシアでのプロジェクトを終えて

地域文化研究センター長　住原　則也

第 11 回「国際参加プロジェクト（ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ・ﾆｱｽ島）」報告書刊行に寄せて

国際学部長　吉川　敏博

5 年前に思いをはせ、汗を流せましたか？

体育学部長　近藤　雄二

第 11 回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」報告書刊行に寄せて

文学部長　吉井　敏幸

第11回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて

学長　飯降　政彦

天理大学には「『陽気ぐらし』の世界建設に寄与する人材育成」という建学の精神があります。教育機関である大学は、どういう人材育成をめざすのか、という点を明確にすることが非常に大事です。本学では建学の理念を柱に、「国際性」と「宗教性」を軸にした教育を一貫して行ってきました。

その国際性と宗教性に基づいた“実行性”を国際的なスケールで推進する教育課程である「国際参加プロジェクト」は、2001年に大震災に見舞われたインド西部地区への災害救援活動として始められ、以後、今回2010年度までに、インドのほか、フィリピン、中華人民共和国、インドネシアなどに活動の舞台を移し実施されてきました。

今回のプロジェクトは、2004年12月より2005年3月にかけて、インドネシア共和国・スマトラ島周辺で発生した大地震と津波により甚大な災害を被った北スマトラ州・ニアス島のモアウォ小学校を支援する第4回目の教育支援活動であり、第11回「国際参加プロジェクト」でありました。

ニアス島での活動は、2006年のモアウォ小学校への校舎建設及び寄贈に始まり、2007年、2008年と防災教育、音楽・スポーツ教育などの支援活動を継続してきました。そして、今回のプロジェクトをもって同島での活動を一応の締め括りとしました。今回の主だった活動内容は、インドネシア語による紙芝居を用いた防災教育、日本語と英語の外国語教育、そして絵本を読み聞かせる情操教育でした。

教育支援活動といえども、言葉や習慣の違う異文化圏での活動を通して、参加した本学学生にとっても、「国際参加」を実体験しながら多くを学ぶ機会となり、正に国際性と宗教性を涵養する絶好の場となっているのであります。

今後も、このような時宜を得たプロジェクトの実施場所を広く世界各地に求め、鋭く世の中の動き、世界の情勢に目を向けながら、また天理教の教えに基づく確固たる信念をもって、本プロジェクトが展開されることを期待します。そして、今よりもさらに多くの学生が参加することで、本学の国際性と宗教性の涵養が一層進められることを願って止みません。

過去11回のプロジェクトを企画し、また参加学生を引率し、現地の方々との橋渡しに努められた教職員と、多大なるご支援ご協力を賜った関係機関各位のご厚情に対しまして、心より敬意を表し、このプロジェクトを高く評価したいと思います。

第11回「国際参加プロジェクト」報告書刊行に寄せて

天理大学後援会長　佐坂　量司

インドネシアでの「国際参加プロジェクト」は、2004年末のスマトラ沖大津波の後、大地震による被害を被ったニアス島を舞台として、今年度で4回目を数える。「国際参加プロジェクト」は、建学の精神に基づく「他者への献身」というメッセージを、学生たちの献身的な行いによって発信してきた。ニアス島の子どもたちの心に、学生たちの献身の心がわずかでも伝わったのであれば何よりだと思う。

今回のプロジェクトでは、インドネシア語による紙芝居と絵本の読み聞かせを行いその内容は、地震と津波、そして日本語・英語を学ぶ外国語学習の二種類があったそうである。いずれにしても、紙芝居という手段は、大きな絵を見せながら紙芝居独特の間合いや声の調子を工夫することで、子どもたちに思いを伝えるには効果的な手段ではないかと想像する。しかし、台本をインドネシア語に翻訳して、発音や読み方を練習する作業は容易ではなかっただろう。同様に絵本の読み聞かせを行うためには、絵本を全てインドネシア語に翻訳し、現地の子どもたちが聞き取れるインドネシア語を練習しなければならない。こうした言語的専門性を活かした活動は、本学が有する長年のインドネシア語教学に関する経験の蓄積があればこそ初めて可能になるだろう。本学の特徴を活かした様々な取り組みが、学生たちによって海外で実践されるのは大変うれしいことだと思う。

参加した学生の視点に立てば、「国際参加プロジェクト」への参加は広い世界へと視野を拡げる貴重な体験ではないだろうか。今回の参加者は、国際学部のみならず、人間学部、文学部、体育学部と様々な学部に所属している。普段からインドネシアに関心をもってきた学生ばかりでなないだろうし、海外経験がない学生がいたかもしれない。また、インドネシアのニアス島は、学生にとって観光旅行などで個人的に訪れる機会がめったにあるものではない。もともと被災地を活動現場にしているのだから、復興途上にある現地の生活環境は、日本などの経済先進国の水準とはかなりの格差が感じられたことだろう。そのような生活環境の中で何を感じ、どう行動してきたのか、この報告書に綴られている文章には、参加した学生の新鮮な驚きや新しい気づきが溢れている。大学生という自由な時間を有意義に過ごし、将来は世界で他者に貢献できる人材に育ってくれることを切に祈念している。

4年間のインドネシアでのプロジェクトを終えて

地域文化研究センター長　住原　則也

思い返せば、2004年12月の大津波、2005年3月の大地震という稀有の天災がインド洋沿岸の国々を襲い、それを受けてインドネシアのニアス島に天理大学が小学校校舎をプレゼントすることになりました。2006年8月、南洋の、青くどこまでもつき抜けてゆくような天空から太陽が眩く熱く照らす中、ニアス島州知事と本学の大橋副学長が臨席、校舎の完成式と引渡し式が賑やかに執り行われたこと、まだ記憶に新しいことです。あれから丸4年が経過し、その間計4回の「国際参加プロジェクト」がニアス島の小学校で実施され、本報告書に記されている2010年8月をもって、全活動を無事終了しました。思えば、計4回の現地活動のすべてに参加したのは、全引率スタッフの中でも私一人であったこと、それだけご縁があったものと思わざるを得ません。また同時に、締めくくりの現場には、2006年の最初の年で出かけた引率スタッフ全員ばかりでなく、被災地ニアス島に思いを寄せてくださったすべての人々とともに居合わせたかったという思いも否めません。僭越ながら多くの方々の真心の代表役をつとめさせていただいたものと、恐縮いたします。

計4回のプロジェクトの参加者は学生70名、引率スタッフ（教員と学内外からのスタッフ）26名、のべ96名がニアス島に足跡を残してきたことになります。それぞれがそれぞれの思いと記憶、目に見えない心の財産を持ち帰りました。

4年という歳月は、ニアス島という島の景色にも目立った変化をもたらしました。2006年に訪問したころは、地震により道路も寸断され、雨が降ると凸凹のぬかるみの道を車が上下に揺れながら走ることが当たり前でした。また、グヌンシトリの町中の多くの家屋、特に鉄骨の少ないコンクリート造りの3～4階建ての建物などが大きく破損、倒壊している無惨な姿が自然に眼に入ってきました。国連その他欧米のＮＧＯなどの急ごしらえの救済本部やその職員も目にすること多くありました。そのような被災の爪あとは年々少なくなり、道路は舗装され家屋や建築物も、新品のものが軒を連ねるほどになりました。今回つまり2010年の訪問で特に驚いたのは、近代的なかなり大きな規模の病院が新築されオープンしていたことでした。つい最近、シンガポールの赤十字からの寄付により完成したものです。また島民の多くが、携帯電話を当たりまえのように使用するようになってきたことも印象的です。「心の復興」ができているかどうかは別にして、島の風景や島民の姿から、丁度良いタイミングに、「国際参加プロジェクト」をこの島で行い、また締めくくれたものと実感する次第です。

振り返ればこのプロジェクトの開始と実行には、本学の山本春樹教授のご尽力無くしては考えられなかったものと、ここにお礼申し上げます。また尽力いただいた方々や機関のすべてをここに列挙することはできませんが、本学橋本武人前学長、飯降政彦現学長をはじめとした本学教職員のご理解ご支援、歴代の後援会長の絶大なる変わらぬご支援の姿勢に特別の謝意をお伝えしたいものと感じています。またインドネシア現地では、メダン市を中心として天理にゆかりのある多くの方々の無償のご支援、さらに、在メダン日本国総領事館の歴代の総領事をはじめとした館員の皆さまには、毎回温かくお迎えいただき、ご助言ご助力賜りましたこと、忘れえぬご厚意として感謝申し上げます。

2001年よりインドで開始された「国際参加プロジェクト」は、さらに次のチャプター（章）に向かいすでに始動しています。この報告書をもって、次の活動地へのバトンの受け渡しがスムーズに行われたものと思っていただければこれ以上の歓びはありません。

第11回「国際参加プロジェクト（ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ・ﾆｱｽ島）」報告書刊行に寄せて

国際学部長　　吉川　敏博

異常な気象により天候被害が世界で起きていますが。今年のインドネシアではどうだったのでしょうか。日本であれば暑い最中でありますが、地域文化研究センターが企画・実施された第 11 回「国際参加プロジェクト」が無事終了したとの報告を受け、この企画に携わってこられた関係者の方々に心より感謝の意を表したいと思います。

参加した学生諸君にとって 8 月 2 日から 13 日までインドネシアのニアス島での活動は誰もが経験できるようなものではなく、また、誰かに強制されたものでもなく自分の意思で参加したからこそ得られた貴重な体験であったと思います。このプロジェクトはご存じの通り、スマトラ沖大津波の後に襲った地震により被害を受けた北スマトラ州・ニアス島のモアウオ小学校教育支援の一環であり、前回に引き続く第 4 回目の活動でした。こうした現地での活動を成功裡に終わらすためには、出発前の事前研修が非常に大切であり、これは 3 ヶ月に亘る準備を毎週火曜日授業が終わる 4 時半から 7 時半まで学生たちが周到に行った結果であると思います。その中には、青年海外協力隊からの説明、健康管理についての講義、インドネシア語講座、プレゼンテーションの資料準備、そして紙芝居や絵本の読み聞かせの練習などきめ細かな準備があってこその成功だったのです。物事の成功には、こうした裏付けがあることを学ぶきっかけになったことも貴重であったと考えます。

今回の参加者リストを見ますと、参加者 19 名のうち、国際学部や国際文化学部から 13 名もの学生がこのプロジェクトに参加しています。専攻する言語もアジア言語に偏ることなく欧米言語を学んでいる学生も数多くいます。これは天理大学の建学の精神である「他者への献身」が学生の心の中に芽生えていることの証であるかも知れません。この遠大な精神は、口で言うは容易く実行しがたいものの一つです。日頃から困っている人に対する真の助け心と愛情がなければ行動に移すことはなかなかできるものではありません。プロジェクト活動から得られたものは一人一人異なるかも知れませんが、参加者には体験から得られた貴重な財産を今後の人生に活かしていただきたいと願っています。

このプロジェクトは今回の第 11 回目でもって終了となりますが、来年度から支援活動の場をインドネシアからカンボジアに移し、そこでの「国際参加プロジェクト」が新たにスタートします。場所は変わっても活動の主旨が変わることはなく、天理大学の特徴である「他者の献身」活動が継続されていくことになります。これからもできるだけ多くの学生がこうしたプロジェクトに参加できる機会が得られるように期待と協力をしていきたいと考えています。

5年前に思いをはせ、汗を流せましたか？

体育学部長　近藤　雄二

「国際参加」プロジェクトに当初から関わる機会を得た者が、寄稿することになるとは思わなかった。改めて「国際参加」プロジェクトにエールを送りたいと思います。

インドネシアを活動地としたプロジェクトは、2001年、インド・グジャラート州で発生した大地震を契機にして、3回にわたるインドでの活動の後、フィリピィン(2004)、中国(2005)を経て、第6回目からの活動拠点として、今回まで実施されてきました。

2004年のプロジェクト以降、単年・単発ではなく、同一地域で3～5年継続して行われるプロジェクトが望ましい、この議論がセンター内でもちあがりました。そういう時、インド大地震と同様、2004年12月26日、インドネシア・スマトラ島沖で大規模地震と津波が発生し、甚大な被害が報道されました。いまふり返ると、プロジェクトがインドネシア学科との協力・連携・共同協力のもと、全学的な事業として、新たな展開の契機になった時期だと思われます。

2005年10月には、教職員学生有志が多くの教員に呼びかけて「ニアス島等復興支援委員会」を発足させ、寄付を募りまた学内外で街頭募金活動を展開しました。その一場面、2005年12月18日が寒い日であったことを覚えています。当時のプロジェクトの担い手、澤山利広准教授を中心に、学生達、国際交流部のスタッフ、奈良JICAのスタッフも駆けつけ、西大寺近鉄デパート前で募金活動を行いました。私も街頭に立ち、終わった後の鍋のうまかったこと、そして今後を熱く語ったことを思い出します。

その時の寄付や募金を含め、2006年8月にインドネシアで初回の活動、第6回「国際参加プロジェクト」が実施された経過があります。小学校に天理大学寄贈の校舎づくりを行う活動でした。ニアス島知事も出席し、本学・副学長も参加して、竣工・寄贈式典が行われました。その活動が第7回、第9回プロジェクトとして継続され、今回が4回目、とり組みから5年が経過しました。

今回は、体育学部生が2名参加しました。体育の学生が参加すると、よく動き、よく働き、現地の子供たちたちとスポーツ、また全体のコミュニケーションの輪づくりに大きく貢献してくれる、このような感想を毎回のように聞きます。体育の学生に限らず参加した学生達は、インドネシアという国を訪ねることができた、この満足感だけでなく、事前研修から報告書作成までの一連活動のなかで、「私もできる、私も変わることができる」、この自己変容の力を実感し、その自信も培われたものと期待します。これがプロジェクトの目標だと思います。本稿を執筆するため、事前にいただいた学生達の活動報告記録に目を通しました。大地震発生による被害がこのプロジェクトの出発点、その後、5年後の今回が私たちの活動なのだ、という理解と自覚にもとづいた活動の位置づけを読みとれなかったのが残念ですが、完成した本書にその思いが綴られていることを探したいと思います。

プロジェクトを提唱し、推進してきた前センター長、井上昭夫教授は、このプロジェクトを「体験知」をもとにした実践的な「活学」と表現されています。プロジェクトの目的であり、新しい教育方法論の試みでもあります。知ることよりも感じること、感じれば知りたい欲求がもたげ、自分の手と足で歩きまわって知るために情報を集める。そして、それは活きた知識として、自分のまわりで起こっている諸現象を社会の問題として認識する力に変容します。この変容が社会を変える力になり得ます。こうした変容を促す活動として、プロジェクトが今後も発展していくことを支援したい。こう思っています。

第11回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」報告書刊行に寄せて

文学部長　吉井　敏幸

今年度（平成22年）の本学「国際参加プロジェクト」に、文学部から2人の学生が参加し、これにより文学部長としてこの報告書に挨拶文を書かせていただくことになりました。今年度のニアス島での「国際参加プロジェクト」が無事終了したこと、また2006年から続けられてきた天理大学のニアス島小学校建設とそれにともなう交流活動もこれによりめでたく終了した事をお喜び申し上げます。

近年、世界を揺るがす自然災害が多数発生しています。思い出すだけでも、2005年のアメリカ南部の巨大ハリケーンカトリーヌによる被害、2007年中国四川省の四川大地震で8万人以上の死者、2010年ハイチ大地震で30万人以上の死者など、など大規模な災害が連続しておこり、その度に多くの死者や行方不明者が出ています。そのなかでも2004年12月のスマトラ沖地震の被害は、地震の後に起こった大津波で死者だけでも20万人以上という空前の大災害でした。このような自然災害は、昔から繰り返し起こってきましたが、近年の特徴は通信が発達し、情報が一瞬のうちに世界中を駆け巡り、それによって国家間では、相互援助するのが世界の常識になりつつあります。しかし個人レベルでは外の世界のことであり、実際は義捐金を送る程度で、直接にはなかなか援助できないものです。天理大学がスマトラ沖大地震救援の企画に参加していることは、世界の流れに参画していることであり、まさに国際化の名にふさわしい活動といえます。

天理大学は、早くから国際化の進んだ大学です。国際学部はもとより、人間学部や体育学部でも、国際交流が当たり前になっています。しかしそのなかで文学部は、学問の性格もあって一人取り残されている感があり、国際交流といえば、あまり関係の無い分野、と言う印象がありました。しかしいつまでもそういうわけには行きません。その意味で、今回の「国際参加プロジェクト」で文学部の学生が2人も参加していることに、大いに励まされ、新しい息吹を感じることができました。本当は、日本の文化をより深く理解するためには、外国の事情をよく知っていなければなりません。その意味でこれからもこのような国際プロジェクトに文学部の学生が積極的に参加することを期待します。

学生個人にとっても、このような活動は、恐らく一生忘れることが出来ない貴重な体験になるでしょう。インドネシアの人でもあまり行ったことのないニアス島で、地元の民家でホームステイし、子供達と紙芝居や絵本で接するような機会はなかなかないものです。この経験と味わった精神を忘れずに、長い人生を歩んでほしいと思います。その意味でこのプロジェクトを企画し、学生に貴重な体験を与えてくださった天理大学地域文化センターの先生方に心からお礼を申し上げます。

第１部　プロジェクト・スタッフからの報告

第 11 回「国際参加プロジェクト」雑感

地域文化研究センター准教授　井上　昭洋

紙芝居と絵本による教育支援活動を振り返って

地域文化研究センター講師　　関本　克良

インドネシアプロジェクトを終えて

国際学部教授　　山本　春樹

「国際参加プロジェクト・インドネシア」を振り返って

～　防災教育を中心に　～

立教大学アジア地域研究所 研究員
地域文化研究センター共同研究員
髙藤　洋子

2010 年・ニアス健康管理から

天理高等学校看護師
地域文化研究センター共同研究員
椋野 和子

第11回「国際参加プロジェクト」雑感

地域文化研究センター准教授　井上　昭洋

事前研修の流れ

2006年にスタートしたインドネシア、ニアス島での支援活動は4回目を数え、今年で一区切りつけることになる。今回の支援活動の柱は2つ。紙芝居を使った地震・防災教育と外国語教育、および絵本の読み聞かせによる情操教育である。事前研修では、学生達は脚本作りから熱心に紙芝居の製作に取り組み、紙芝居の完成後は、紙芝居班と絵本班に分かれて、それぞれのインドネシア語テキストの音読練習に勤しんだ。絵本の選定からインドネシア語への翻訳、音読指導に至るまで、山本春樹先生に担当していただいた。

紙芝居製作に向けて班分けを行ったのが5月18日。紙芝居の脚本作りや絵コンテに取りかかったのが6月8日。6月22日から3週連続して音読の練習を行ったものの、プロジェクト未体験でインドネシア語が全く分からない私でさえも、練習期間が短すぎると感じずにはおれなかった。この程度の準備で子供達を引きつける紙芝居や絵本の読み聞かせができるのだろうか？一所懸命に声を張り上げて読み上げる学生達の前で、眉間にしわを寄せて聞きづらそうにしている子供達の姿が私の脳裏をよぎった。結局、音読のレベルをどこまで上げられるかは、事前研修終了後、プロジェクト本番までの1ヶ月間の個々人の努力に委ねられることになった。事前研修のプラニングについては、担当スタッフの間でしっかり再検討しなければならないと思う。

プサントレン（イスラム寄宿塾）での交流会

今回のプロジェクトの主な目的は、8月4日から10日にかけてモアウォ小学校で行う教育活動であったが、ニアス島に移動する前にメダン市のプサントレン（イスラム寄宿塾）で交流会を催すことになっていた。6月下旬の事前の話し合いで寄宿塾側が2,000人の生徒の参加を予定していることが分かり、プロジェクタを使用して大勢の生徒に紙芝居を見せることが決まっていた。それが果たして「紙芝居」と呼べるものなのかどうかは分からないが、大ホールを埋め尽くす2,000人の生徒の前で紙芝居をすれば、モアウォ小学校での活動に向けて肝も据わろうというものだ。

バスがプサントレンの校門に着くと、生徒達がインドネシアと日本の国旗を振って出迎えてくれた。鼓笛隊の演奏も始まり、バスを降りた私達は、鼓笛隊に先導され、旗を振って熱烈に歓迎する生徒達の間をホールへと向かった。ホールの中に入ると更なる大歓声に迎えられ、学生達は最前列の席に腰を下ろした。開会セレモニーの後、紙芝居班は引き続きホールに止まり紙芝居の上演を、絵本班はホールの隣の建物に移動して絵本の読み聞かせを行った。私は記録撮影のために絵本班に同行した。

絵本班は、小学生を相手に同じ絵本の読み聞かせを教室内の3カ所で同時進行させた。だが、読み手は遠くの生徒にも聞こえるように大声を出さざるを得ず、その声が3カ所から輪唱のように聞こえてくるという、読み聞かせとしては問題のある状況となってしまった（この経験から、モアウォ小学校での絵本班の使用教室を2部屋に増やすことに変更）。しかし、サウナのように蒸し暑く薄暗い教室の中で、学生達は滝のように流れる汗を拭おうともせず一心に絵本の読み聞かせを行った。

天理大学側の紙芝居と絵本の読み聞かせが終わると、プサントレンの生徒によってインドネシアの各民族の舞踊が上演され、最後に壇上で出演者が共に揃って記念写真に収まった。壇から降りた学生達は無数の生徒達から握手攻めに遭うなど、想定外の盛大な歓待を受けたが、この交流会で学生達はモアウォ小学校での活動に向けて、一気にスイッチが入ったと思われる。

ニアス島での教育活動と異文化体験

ニアス島滞在中、モアウォ小学校での教育活動は４日間であった。午前中の授業時間を使って、天理大学の寄付金で立てられた校舎の教室で、紙芝居班と絵本班がそれぞれ活動を展開した。学生達は、活動の合間などを利用してミーティングを開き、自分達の活動をより良いものにしようと積極的に取り組んでいたと思う。事実、１日目よりも２日目、２日目よりも３日目と、目に見えて紙芝居も絵本の読み聞かせも良くなっていくのが分かった。例えば、導入での生徒達への語りかけ、場面場面での問いかけ、読み手と聞き手の距離の取り方など、紙芝居や絵本の読み聞かせが一方通行にならないような工夫が回を重ねる毎に加えられていき、完成度が増していったのである。また、同時通訳として同行した北スマトラ大学日本語学科の学生達のサポートが、学生と生徒の円滑なコミュニケーションをはかる上で、必要不可欠であった点も忘れてはならない。

期間中、学生達は小学校関係者の家庭にホームステイをした。午前は小学校での活動に当てられ、午後はホストファミリーや近所の人たちと過ごすことでニアス島の文化を体験することに当てられた。小学校の活動では、紙芝居班と絵本班に分かれているものの、学生達はほぼ同じ体験を共有することができる。だが、ホームステイ先では、学生一人一人が異なる条件でニアス島の人々と交わるので、全く違った体験をすることになる。ホストファミリーがイスラム教徒かキリスト教徒かで、出される食事や日曜日の過ごし方が異なってくるだろうし（ニアス島はインドネシアでは珍しくキリスト教徒が多数派である）、街中の家庭と村の家庭では生活環境が変わってくるだろう。ゲストもホストも生身の人間なので、短い間の付き合いとはいえ、性格的な相性の問題もあったかもしれない。

異文化理解の面から見れば、小学校での教育活動よりもホームステイでの経験の方が、学生達には得るものが多かったと思う。だが、問題は、彼らが「得たもの」に気づくことができるかどうかである。物の値段を聞いて「安っ！」という言葉が口をついて出る時、それは単なる感想ではなく「自分はここでは大金持ちである」という自己表明でもあることに気づくことが重要だ。そうすれば、現地の人から物をせびられた時、残念に受け取ってしまうそのような経験も「安っ！」と思った自分が支払うべき代価であると考えることができるのではないだろうか。

現在、学生達は事後研修で報告書やDVDの作成に取り組んでいる。彼らは、報告書の担当記事を執筆するだけでなく、それぞれがプロジェクト期間中に見つけたテーマについてのレポートを作成することになっている。そのような作業の中で自分達の「得たもの」について今一度振り返ることができれば、彼らのニアス島での異文化体験はより豊かなものになるに違いない。

紙芝居と絵本による教育支援活動を振り返って

地域文化研究センター講師　関本　克良

「国際参加プロジェクト」を初めて担当したことにより、今回のプロジェクトは試行錯誤の連続であったことを弁解させて頂きたい。事前研修は予定した計画以上に多くの時間を要し、インドネシアに出発する直前もなお、充分に準備できていないのではないかと不安を残していた。参加した学生の積極性と柔軟な対応力により助けられることが多かったので、参加学生に恵まれたと感謝している。こうして報告書を刊行する段階を迎え、1年間を振り返って感慨無量の面持ちであるが、担当者として記すべきことを述べたい。

今回のプロジェクトは、インドネシア・ニアス島にあるモアウォ小学校における教育支援活動の第4回目、かつ同小学校での締め括りの活動である。2006年8月に同小学校に「天理校舎」を寄贈したことから今回の活動に繋がっている。モアウォ小学校の子どもたちと学校近辺の人々は、日本人を見かけると挨拶を交わすように「ありがとう」と叫んでくれる。それ程、モアウォ小学校の教職員との協働作業により次第に醸成されてきた信頼関係と、現地の人々との間に積み重ねてきた心の絆は大きいのである。「天理大学」と刻まれた「天理校舎」の建設に関わってくださった全ての人々に、先ずは敬意を込めて心から感謝したい。更に、モアウォ小学校と子ども達への並々ならぬ情熱をもって、現地の人々との間に確固たる信頼関係を築かれた山本春樹先生に心から敬意を表し、2006年より続いたインドネシアでの「国際参加プロジェクト」に対する惜しみないご協力にただ感謝するばかりである。

モアウォ小学校の先生方（「天理校舎」の前で）

モアウォ小学校の児童（「天理校舎」の前で）

今回のプロジェクトではインドネシア語での紙芝居による防災教育・外国語教育（日本語・英語）そして、絵本の読み聞かせ活動を行った。それぞれの教育支援活動について報告する。

① 紙芝居による防災教育と外国語教育 ～体験型学習の手法として～

紙芝居と絵本の読み聞かせの活動に決めたのには主に二つの理由があった。1つはモアウォ小学校での支援活動の原点に繋がる防災教育が行えること。2つ目は、活動を終えても現地に形として残せることである。2007年第7回プロジェクトでは劇による防災教育に取り組んだ。紙芝居での防災教育ならば、活動後にそれを寄贈することで、私達が去った後も紙芝居を通して防災教育がなされるかもしれない。本学の教育支援活動が現地に定着して活用されるためには、分かりやすい内容で行いやすい手段が必要である。この意味で紙芝居は、現地に根付く教育支援活動の手法として優れていると考える。

外国語教育はモアウォ小学校の先生方から希望が出されていた。外国語教育を紙芝居で行うという発想は、当初は防災教育の副次的案であったが、むしろ防災教育よりも紙芝居との相性はよい。小学生に対して地震と津波の発生する仕組みを順序良く説明することはそれ自体難しいが、外国語を物語の中に取り入れて学習させることは比較的容易であった。外国語教育の紙芝居を見ながら、日本語・英語を練習する場面は大いに盛り上がったのである。一方、防災教育の紙芝居は、当初は難解な自然現象の仕組みをインドネシア語で伝えることに苦労していたが、表現を工夫し、動きを取り入れたり、子ども達に声をかけたりすることで、問題を乗り越えていった。

紙芝居を子ども達への体験型学習の手法とすることは面白い取り組みであった。考えうる利点を3つ挙げる。1つ目は、紙芝居が日本の文化的教育活動であり、海外に紹介する価値があること。2つ目は、手法が容易であり作成費用も廉価であるため行いやすいこと。3つ目は体験型学習の手段としえ優れた面を有していることである。

3つ目の体験型学習の手段としての紙芝居の可能性について更に述べる。教育の現場において、知識の一方的伝達に限らず、体験的に学習することで理解が深まり、より一層記憶に留まりやすいことが指摘されている。紙芝居は、映像やパワーポイントを用いることと同様、視覚からの情報を有効に使える利点がある。更に、映像教材を用いる場合よりも、紙芝居は話者と聞き手のコミュニケーションが自由自在である。台詞の読み方や間合いの取り方、聞き手に質問して一緒に考えるなど様々な工夫ができる。例えば、防災教育の紙芝居では、赤・青・緑色の服を着た子どもが避難する様子を示して、3択のクイズとして取り入れた。又、紙芝居に特有の話者と聞き手との一体感を利用して、避難訓練のシミュレーションや外国語での自己紹介の練習等の学習を取り入れた。このように、紙芝居の内容を工夫することで様々な体験型学習を行うことができる。

② 絵本の読み聞かせと情操教育の重要性

絵本の読み聞かせは情操教育である。事前研修では、インドネシア語に翻訳した絵本を読み込み、翻訳した台本を絵本に貼り付け、本の補強材でカバーをつける作業に追われた。弁解になるが、担当教員でありながら情操教育について研究する時間的余裕がなかった。子ども達が理解し易いと思われる絵本の読み方を工夫する以外に、より良い情操教育を行うための指導はできなかった。よって、学生達は情操教育の内容と実践上の注意事項について事前研修で学んだ訳ではない。しかし、活動を終えて絵本の読み聞かせを通した情操教育の重要性に対する認識を新たしている。山本春樹先生の話によると、ニアス島にはこれまで絵本の読み聞かせという文化が存在しなかったが、今後はモアウォ小学校で実践するようになるのではないか、とのことである。もしそれが実現されるなら、大いに教育的意義のある変化ではないか。私達にとって当たり前である絵本の読み聞かせであるが、その文化がない人々の目にどれだけ魅力的な活動に映るか知れない。

さて、情操教育とはどのような教育であるか。「情操」とは、喜怒哀楽の単純な感情ではなく、ある国語辞典によると「文化的社会的に価値あるものと見なされる高次の」感情である。それは道徳的、芸術的、宗教的なもの、その他の価値でも構わない。「価値ある感情」を内面に豊かに育むための教育が情操教育といえるのではないだろうか。絵本の読み聞かせは情操教育の手段として以下の3点において優れていると思われる。

1つ目は、絵本は子どもの情操を育むことを目的に構成されている場合が多いことである。日本の民話にしても、外国語から日本語に翻訳された絵本にしても、読み手の豊かな情操を育むことを意図したであろう内容を読み取ることができる。2つ目は、読み聞かせという活動をする者にとって、自らの情操を豊かに育む訓練になることである。担当する絵本が伝えようとしている情操教育上の内容を把握し、子ども達にそれを理解させ、心に感じ取らせるために、様々な工夫をする必要に迫られる。情操教育とはそれを行う者の情操の豊かさが教育上の結果に大きな影響を与える。3つ目には、絵本の読み聞かせを受ける側にとって、絵本の内容から受ける影響に加えて、話者の声や感情、動作や目線、表情を通して、絵本の内容を派生させたより豊かな情操を受け取ることができことである。

絵本の読み聞かせの能力は、読み手の情操の豊かさによって大きく違う。感情表現が得意な人と、苦手な人では読み聞かせの効果に差が出る。豊かな情操を内面に育む上で、絵本を読む側にまずその情操が必要なのである。豊かな感情表現をもって読み聞かせると、聞き手は絵本に引き込まれて夢中になる。モアウォ小学校の子ども達も絵本に引き込まれて真剣に聞いていた様子が印象に残っている。テレビや映画に見慣れた子ども達

を、絵本の動かない絵に惹きつけるには、相当の技術を要する。しかし、テレビや映画とは異なり、生身の人間の感情と声・表情を通したメッセージの伝達である絵本の読み聞かせは、絵本の内容と同時に話者が発する情操も伝えることができる。素晴らしい絵本の読み聞かせは、子どもにとって長らく忘れられない印象深い体験になるだろう。それ程、私は情操教育の手段である絵本の読み聞かせ活動を高く評価している。

③　今後の「国際参加プロジェクト」への継承　～第12回プロジェクトを視野に～

今回初めて採用した紙芝居と絵本の読み聞かせであったが、教育支援活動の手法として予想以上に手応えのある活動であった。双方とも行う側、受ける側に少なからずの内面的成長を促す効果が期待できる。海外に出て、慣れない外国語で紙芝居を行い、絵本を読み聞かせることは決して容易なことではない。しかし、そうした苦労や失敗に直面し、葛藤すること自体が精神的に成長する過程ではないか。学生のレポートにも「他人だけでなく、自分も大きく成長できる」教育支援活動であると報告されている。参加した学生が少しでも自らの成長を感じることができたなら、担当者としてこの上ない喜びである。

「国際参加プロジェクト」は本学建学の精神に基づく「他者への献身」を国際的に実践するプロジェクトである。参加する学生たちは、世界の「他者」のために献身することで、自らの「国際性」と「宗教性」を涵養していく。次回は活動の場を変えて新天地での第12回プロジェクトを準備中である。まだ具体的な内容は検討段階にあるが、紙芝居や絵本の読み聞かせ活動をこれからも積極的に取り入れていきたいと考えている。

インドネシアプロジェクトを終えて

国際学部教授　山本　春樹

さようなら、そして、ありがとう

暮れなずむモアウォ小学校の校庭に１人たたずみ、天理大学寄贈の校舎にさようならを言い、ありがとうと感謝した。過去５年間の天理大学と同小学校およびその周辺地域社会との交流の舞台を勤めてくれた校舎である。

この校舎の建設の経緯については『コスモス』や『アゴラ』の過去号に書いたので、ここでは簡単に触れておきたい。2004年12月のインド洋大津波と翌年３月の大地震で大きな被害を受け、しかし、海外からはもちろんインドネシア国内からもさほど注目されなかったニアス島への復興支援を大学として行うことを決意したのは2005年の秋。以来、学内外の多くの方々のご好意で資金を作り、インドネシア側の数人の方々の献身的なご協力を得て校舎建設を実現し、2006年８月に大橋副学長やニアス県知事の臨席を得て竣工・寄贈式典を行った。ニァス島全域での災害復興活動がようやく軌道に乗り始めたという時期のことであった。

この式典には学生も同行してもらった。これが、ニアスでの「国際参加プロジェクト」の最初である。生徒との交流、式典での挨拶のスピーチや記念品贈呈のほかアトラクションに参加するなどの活動をした外、学生は全員、同校に通う子どもがいる家庭にホームステイさせてもらった。ニアスという僻地離島のさらに片田舎の家々であり、彼らの予想を超えた苦労があったろうにもかかわらず、また、言葉の壁があったにもかかわらず、彼らはその家庭、さらには周辺の地域社会の人々と交流を深め、双方の側に貴重な体験をもたらした。

このことに自信を得て、翌年以降も「国際参加プロジェクト」を同地で実施することにした。プロジェクトを実施するにあたって立てた方針は、単なる親善交流ではなく、子どもたちへの実質的な教育活動を行うということであった。2007年は防災教育に焦点を絞った。学生たちが劇を通して、地震津波のメカニズムと、その発生時に取るべき行動について教育した。この時に学生たちが伝えたことは、子どもたちの間で、さらにはその親たちの間で確実に伝承され、感謝されている。被災後も公的には防災教育というものがほとんど行われていない同地にあっては、学生たちのこの教育は貴重なものである。

2008年の実施にあたっては、先述の基本方針を堅持しつつ、先方の先生方との協議の上で活動内容を決める方針をとった。先方からは理科、社会等の教科教育をという希望も出されたが、言葉の壁を考慮するとこれは無理で、最終的に、音楽と体育を教えることになった。音楽はピアニカを数本持参してその演奏方法を先生方に教え、子どもたちには「幸せなら手をたたこう」と「大きな栗の木の下で」を教

えることにした。はじめは恥ずかしがって声の出なかった子どもたちが、うれしそうに日本語で歌うようになるのを見るのは、楽しい光景であった。体育はドッジボールを教えた。子どもたちには初めてのスポーツである。投球と捕球の基礎からはじめ、ルールを教え、何日か後には、学生と先方の先生が審判をする中で、子どもたちはちゃんとしたドッジボールのゲームができるようになっていた。思いっきり身体を動かすことの楽しさと、ルールを守ってプレイすることの大切さを教えることができたのではないかと思う。それが狙いでもあった。音楽も体育も、教える学生たちの負担は並大抵ではなく、疲労困懲のなかでかれらはがんばり通した。ピアニカ演奏とドッジボール競技については詳しい教則本を作成して、寄贈してきた、この年限りで終わらず後々まで継承されるためにである。

2009 年は諸般の事情により中断したが、本年 2010 年に再開した。今年の活動は、高学年に対しては今度は紙芝居を使って、2007 年の防災教育を行うことになった。2007 年の活動の継続を希望する声が学校と地域社会から出ていたためであり、紙芝居にしたのは、これを残しておけば、あとあとこれを使った防災教育が継承されることを期待してのことである。このほかにも紙芝居を使って高学年の子ども達を外国語の学習へといざなう試みを行なった。先方の先生方からの英語教育をという要望にこたえたもので、ドラエモンの旅に託したストーリに乗せて英語と日本語の初歩を教えるものであった。低学年に対しては絵本の読み聞かせを行った。日本で出されている絵本数冊をインドネシア語に翻訳し、それを読み聞かせるのである。私には 2 つの不安があった。ひとつは学生がインドネシア語をできないこと。カタカナ表記とインドネシア人留学生が吹き込んでくれた録音を頼りに学生は練習を重ね、見事にこの不安をふっ飛ばしてくれた。実に見事な読み聞かせであった。もうひとつの不安は、読書の経験がほとんどないニァスの子どもたちが、ちゃんと聞いてくれるかどうかという点。この不安も取り越し苦労であった。子どもたちは食い入るように聞いてくれたのである。2 年前、ドッジボールのコートに入り込んで邪魔をしてはてこずらせた、当時は入学前のかわいい腕自坊主が、今年は 1 年生として、一番前に座って楽しそうに聞いている姿を目にしたときは、その成長振りが本当にうれしかった。読み聞かせたのを含めて計 12 冊の絵本を翻訳し、訳文を貼り付けたものを寄贈した。本を読む楽しみが子どもたちの間に広がることを願っている。これについてはうれしいことがあった。ジャカルタのとある出版社が、モアウォ小学校のためにといって 330 冊もの本を寄贈してくれたのである。「読書の楽しみを広めたいという天理大学の活動に感謝し、それに協力したい」ということであった。また、絵本購入にあたっては、なかば私事ながら私の小学校時代の恩師から頂いていた厚志を使わせて貰った。

今年の活動の最終日のお別れ会で子どもたちはピアニカを演奏し「幸せなら手をたたこう」と「大きな栗の木の下で」を歌ってくれた。彼らは今もドッジボールを楽しんでいるようである。2008 年の活動が根をおろし花を開いているのだ。先述のように防災意識は着実に継承されようとしている。読書の喜びも伝えられていくに違いない。外国語への関心も育つかもしれない。これらはすべて小さなことかもしれない。だが、たとえ小さくても、それは、子どもたちとその周辺の地域社会の人々の心の中に根付

き、子どもたちの成長の糧になるものだと信じてよいと思う。

「他者への貢献」を掲げるプロジェクトの活動は与えるだけではない。学生たちは活動を中心とした子どもたちとの交流、ホームステイ先家庭との交流を通して、かけがえのない体験を与えられたに違いない。その体験は、彼らの今後の人生に大きな意味を持つものであろう。学生だけでなく教員スタッフもそうであろう。このように、与え与えられ、それによって皆の心を成長させていく「国際参加プロジェクト」のニアスでの活動に舞台を提供し、それを見守ってくれたのが天理寄贈の校舎なのである。天理校舎よ、ありがとう。モアウォ小学校の子どもたちと先生がた、地域の方々、ありがとう。学生の皆さん、お疲れさまでした。校舎の建設と、その後のプロジェクトの活動に惜しみないご協力を下さった、インドネシアのそして日本の皆様がた、ありがとうございました。

「国際参加プロジェクト・インドネシア」を振り返って
～防災教育を中心に～

立教大学アジア地域研究所 研究員
天理大学地域文化研究センター 共同研究員　髙藤　洋子

1．「国際参加プロジェクト」と私の研究テーマ

一度壊れたもの、失われたものをもと通りにするのは至難の業である。自然災害の被害を受けた人々や地域社会が被った損失の大きさには計り知れないものがある。スマトラ沖地震・インド洋大津波において、インドネシアでは犠牲者が 17 万人以上にも及んだ。

南国の陽光を受けて鮮やかな色を放つ花々、青い空に向かって伸びた椰子の木々。これらの豊かな自然に包まれ、人々の笑顔に接していると、この地を襲った災害のことを忘れてしまうほどだ。しかし、ひと度、海岸線に目を向けると、2004 年 12 月 26 日のスマトラ沖地震・インド洋大津波が呑み込んでいった椰子の根元だけが残っている。石で造られた家屋の基礎部分だけが剥き出しになっており、津波の破壊力の凄まじさを物語っている。それから 6 年近くの月日が流れた今もその爪痕は痛々しい。

モアウォ小学校で開催した教育セミナー
「防災教育における口承文藝の有効性」

私がインドネシアの北スマトラ州ニアス島を訪れたのは天理大学地域文化研究センターの「国際参加プロジェクト」への参加がきっかけであった。「国際参加プロジェクト・インドネシア」の活動は、地震・津波で甚大な被害を受けたニアス島の復興支援を目標として天理大学が寄贈した校舎のあるニアス島モアウォ小学校を拠点に、2006 年からスタートした。現地の児童への防災教育をはじめ、スポーツおよび音楽指導、また英語や日本語指導、折り紙や絵本を用いて日本文化を紹介するなど、さまざまな活動を展開し続けている。現地の一般家庭でのホームステイを通し交流をはかるとともに異文化について考えるプログラムもプロジェクトの大切な柱となっている。

「防災教育における口承文藝の有効性」
に関する調査結果をモアウォ村の村長へ報告

「国際参加プロジェクト・インドネシア」が始動した 2006 年から毎年ニアス島を訪れている私は、活動を進めながらインドネシアの子供たちをはじめ現地の人々と心の通ったコミュニケーションを図ることで、この島の人々の声を聞くことができた。この間、地域住民、とりわけ子供たちがどのようにしたら再び起こるかもしれない災害から身を守ることができるのだろうかと考え続けてきた。ニアス島において犠牲者が多く出た背景には、被災地が震源地に近かったことはもちろんだが、地震や津波についての知識が十分でなかったために避難が遅れたことが指摘されている。

ニアス島で多くの犠牲者が出たのに対し、ニアス島北西に位置するシムル島では大津波が島を襲った

にもかかわらず犠牲者が非常に少なかった。これはシムル島において過去の災害経験が「Smong」という歌となって語り継がれ、住民が避難方法を知っていたためであった。歌はすたれることなく100年もの間、語り継がれていた。先人の知恵が口承文藝として伝えられてきたのだ。

そのことを知った私は、それが一体どんなメロディーなのか、どんな歌詞なのか、なぜ100年もの間ずっと語り継いでいくことができたのか、と様々なことを考えた。また、その謎を解き明かすことが出来れば、津波発生時に多数の犠牲者を出したインドネシアの他の地域にも役立てることができるのではないだろうかなどと考えた。このように次々とわき上がる素朴な問題意識が発端となり、私の研究テーマとなった。

2．研究目的と方法

多くの問題意識を持った私は、甚大な被害のあった北スマトラ州ニアス島と、犠牲者の少なかったナングロ・アチェ・ダルサラム州シムル島を取り上げ、両島において調査を行い、過去に災害を受けた人々や地域社会がどのように災害に対応してきたのかについて比較することとした。先人の経験知、すなわちシムル島に伝わる「Smong」に代表されるような口承文藝をどのように活かせば、今後も起こりうる災害被害を最小限に留めることができるのかを考察したうえで、ニアス島での防災教育モデルの提言を行うことが研究の目的であった。研究の目的に沿った先行研究は極めて少なく、現場での調査が必要であった。

2009年7月31日より一ヶ月間にわたり、ニアス島の住民400人、シムル島の住民250人を対象にアンケート調査を実施し、さらにアンケートを補完するためにインタビューを行った。調査から、防災教育の現状、防災に対する意識、災害に関する言い伝えの有無、防災教育における口承文藝の有効性を明らかにした。

3．口承文藝の特徴

「口承文藝」とは簡単に言うと、文字に書きつけられずに口で伝えられた文学や藝術を指す。口承文藝の中には、ことわざ、なぞなぞ、民謡（含：田植唄、わらべ唄）、伝説、昔話、世間話、笑い話などがある。

口承文藝がいつまでも私達の心の中に残り、語り継がれているのは、口承文藝に共通の特徴（口承文藝の手法）があるからだ。幼いころ耳にした「浦島太郎」や「三匹の子ブタ」の昔話がなぜ何年経った今でも私達の記憶から離れず、ありありとそれらのストーリーを思い出すことができ、他人へ語ることができるのか・・そこには共通の特徴があるのだ。

昔話においては非常に多様な領域にわたる内容が、空間的な奥行きや時間的な前後関係の制約なしに平面的に捉えられる性質がある。例えば「浦島太郎」の話では、「生きた人間が海の中にある竜宮城で何日も暮す」というように、陸上と海中との間に隔たりを感じさせないという特徴がある。また、口承文藝には「三」という数字が好んで使われるという特徴がある。「三匹の子ブタ」は、その代表的な例である。その他にも、聞き手に鮮やかな印象を与えることができる色彩が多く使用されている、同じことを繰り返すなどの特徴があげられる。ものごとを語りやすくするには、先に述べた特徴の他、韻文などでは「音の強弱」や句の語尾に規則性を持たせる「押韻」の特徴もある。なお、口承文藝は文字に書かれた文藝と異なり、聞き手にとっては読み返しがきかないため、聞き手のイメージの中にはっきりとした場面を描き出すことができなければ、文藝としての魅力が弱まってしまう恐れがあることに留意しなければならない。伝えられた者が自分の中でそのイメージを膨らませることにより、伝達事項が初めて記憶として鮮明に残っていくのだ。

日本国内でも調査を行った結果、各地に古くから語り継がれてきた防災話があることがわかった。代表的なものとして和歌山県広村(現広川町)で語られた「稲むらの火」が挙げられる。それは1854年(安政元年)に発生した安政南海地震の際、津波の来襲を察知した庄屋の五兵衛が、収穫したばかりの「稲むら」に火を放って村人達を高台に誘導し、その命を救う話である。その話の中では、津波が繰り返し村を襲う様子が細かく描写されており、そこに口承文藝の特徴が見てとれる。

先で述べたシムル島に伝わる「Smong」の歌にも「押韻」という口承文藝の特徴がある。時代も異なり、地域も文化も異なる2つの文藝が、ともに1世紀以上の長きにわたり、語り継がれ、歌い継がれてきたことは偶然のように思える。しかし、「口承文藝」の手法という切り口でその特徴を抽出すると、両者が長年にわたり語り継がれ歌い継がれてきたことは、偶然でなく必然であった。

4.「国際参加プロジェクト」における教育セミナー

2010年8月には、前年に行った調査の結果報告を現地に伝えるべく再びニアス島とシムル島を訪れた。住民へのフィードバックのひとつとして「国際参加プロジェクト」実施の拠点であるモアウォ小学校にて教育セミナーを開催し、本研究の報告、および住民との意見交換が持てたことは、私にとって大きな喜びであった。また「国際参加プロジェクト」のプログラムの一つとして当該小学校で防災教育を実施している意味においても大変有意義だった。

教育セミナーでは、2009年に実施したニアス島とシムル島でのアンケート調査の結果を報告し、シムル島で語り継がれている「Smong」の唄と日本における防災教育の事例「稲むらの火」を紹介した上で、ニアス島における防災意識の普及のための提言を行った。以下にアンケートの内容とその結果を簡潔にまとめる。

5. アンケート調査の結果

アンケート調査は、2004年12月と2005年3月の大地震において、甚大な被害があったニアス島北部のビナカからグヌンシトリそしてモアウォ地域を中心に、400人のニアス島住民に行った。インドネシア語を用いての記述で回答を得た。返送数は322名（回収率80.5%）であった。その内訳は、教育庁職員（50人)、小学校教職員（22人)、孤児院職員（18人)、教会指導者（51人)、医師・病院職員（12人)、NGO関係者（32人)、漁業従事者（31人)、農業従事者（19人)、商業従事者（25人)、観光事業者（12人)、その他（退職者、主婦、学生等）（50人）となっている。

【アンケート1】2004年の震災前に防災教育はありましたか？

全体の73%にあたる237人が2004年の震災前には防災教育はなかったと回答している。

【アンケート2】防災知識を伝えてゆくのは重要だとお考えですか？

ほぼすべての住民が防災知識を伝えることは「大変重要」または「重要」と回答している。「重要でない」と回答した人は0人であった。防災に対する関心が高いことがわかる。

【アンケート3】防災意識をどのように普及させるのが良いとお考えですか？

「学校を通して」が19%、「NGO・ボランティア団体、教会組織等を通じて」が21%「学校とNGO・ボランティア団体との協働」が52%であった。

【アンケート4】口承文藝を用いた防災意識の普及は有効であるとお考えですか？

全体を通して72%が口承文藝を用いた防災意識の普及は有効であると考えていた。このことから、学校

やボランティア団体が行う防災意識の普及活動においても「言い伝え」、「語り伝え」、「唄い伝え」といった口承文藝の手法を用いることが有効であると確認できた。

【アンケート5】ニアス島において地震・津波に関する言い伝えがあるか知っていますか？
全体の 20%が、「民話」で知っていると回答した。また、一部には 「"Hulo soloya-laya"（ニアス語で『動く島』の意）という『言い伝え』を知っている」と回答した人がいた。
調査により、「Hulo soloya-laya」の言い伝えは、1907 年に発生した大地震に由来しているということがわかった。その内容は、「ニアス島では約 1 週間強い揺れが続き、台所で炊事ができないほどであった」というものであるが、一部の人々の間にしか語り継がれていなかった。

6．調査結果から見えてきたこと

これらの調査結果から、シムル島において 1907 年の地震以来、語り伝えられている唄「Smong」があるのに対し、ニアス島においては地震・津波に関しての語り伝えは、ごく一部の人々の間にしか存在していなかったことがわかった。しかし、「稲むらの火」と「Smong」が、異なる時代、地域、歴史、文化、民族を超えて、共に 1 世紀以上も存続していたことを考えると、その共通項である「口承文藝の特徴」を備えたコンテンツをニアス島で普及させることにより、住民の防災意識を高めることができる。

アンケート調査によれば、ニアス島全体を通して 72%が口承文藝を用いた防災意識の普及は有効であると回答している。そこで私は、口承文藝を用いて住民の防災意識を高め、普及することを考えた。ニアス島には独特の旋律を持つ音楽と、その旋律に合わせて振りつけられている踊りがある。このニアス島独自の旋律を活かして歌を創作し、普及していくことを提案した。歌やダンスなどを主体とした口承文藝であればインパクトもあり、元来、音楽好きなニアス島住民のコミュニティの活性化にもつながる。口承文藝を用いることによって持続可能な防災教育、防災意識の普及に寄与する。

シムル島に伝わる唄「Smong」については「韻を踏む」ことにより聞く人に深い印象を与えるという、口承文藝の手法が盛り込まれている。それに対して、ニアス島において地震・津波に関する「言い伝え」が一部にしか普及しなかったのは、「言い伝え」に口承文藝の手法が用いられていなかったからと考えられる。「言い伝え」が、何らかの形で語り継がれたか否かで後の世に大きな違いとなって現れた。

ニアス島においては予算の面やインフラ整備の状況から見ても、口承文藝を用いた防災意識の普及が適していると考える。ニアス島に適した防災教育、すなわちニアス島独自の継続性のある防災教育を自ら作り出していくことが必要である。さらに重要なことは、「災害の教訓を次世代に語り継ぐ意味」と、「災害発生時に住民ひとりひとりが災害から身を守る意味」を併せて考えていくことだ。

結論として、災害から身を守り生き延びるためにどうしたらよいかについて、先人の経験、すなわち地域や子孫を守るために蓄積してきた知恵や技術を用いて、危機状態における対処法を身につけることを主張した。その中でも特に、口承文藝を用いての防災教育が如何に人々の記憶に残り、代々引き継いでいくことができるかについて、その有効性を強調した。

普及の場所については、情報交換の場として人々の集まりやすい学校や教会で実施することが有効である。さらに、NGO 団体やボランティア団体、また教会や寺院の協働で行うことが効果的だと報告および提案をした。

セミナー終了後、私の提案が今後、地域において自分達の手で実践していくことが可能かどうかについてのアンケートを行った。その結果は可能が 96%、不可能が 4%であった。口承文藝の特徴を活かした防災教育の提案は概して好意的に受け止められている。その背景には自分たちの作った歌や踊りが人々に親しまれつつ後世に語り継がれ、将来起こるかもしれない災害から多くの人命を救えるとの期待感や、

誰にでも簡単にでき、費用もかからないという点から自分達の手によって実施してゆける確信が生まれたためであろう。同島において口承文藝を用いた防災教育の実現の可能性は極めて高い。

7.「国際参加プロジェクト」における口承文藝の手法を用いた防災教育

今回の「国際参加プロジェクト」の活動のひとつとして、天理大学の学生によるモアウォ小学校の児童への防災教育も実施された。児童は天理大学の学生の手になる紙芝居を通して地震・津波発生のしくみと発生時の避難方法を学習した。

ここでは筆者の提案した口承文藝の手法を用いた防災教育が取り入れられた。コンテンツとなった紙芝居に「三人の子ども」が登場するのはその一例である。これは口承文藝によくみられる「三」という数字が好んで使われるという手法である。「赤、青、緑」と児童の記憶に残りやすい色彩を用いて登場人物を印象づけ、登場人物の台詞(セリフ)を通して、地震と津波発生時にすべきこと、すなわち「自分の身を守る」ことの大切さを教えている。学生たちが作成した防災教育の紙芝居では避難時に役立つ事項も「三つ」のポイントにまとめ、語られている。児童は災害発生時の避難の際に、「押すべからず」「走るべからず」「騒ぐべからず」と三つの「べからず」を学習した。災害発生時にはパニックに陥らず落ち着いて行動することが何より大切である。

大学生による「語り」は、視覚に訴える紙芝居によってさらに印象づけられ、児童の心には地震、津波発生時の避難方法がはっきりと鮮明に残った。ニアス島を離れる前日、活動を行った小学校に立ち寄り、児童たちに地震、津波発生時の注意事項は何かと質問したところ、元気に「3 J」(Tiga J / ティガ・ジェイ)と応えがかえってきた。「押すべからず」「走るべからず」「騒ぐべからず」すなわち「Jangan mendesak」「Jangan lari」「Jangan ribut」の三つの注意事項が児童達の間で「3 J」という新しい言葉に生まれ変わっていた。児童達の中に新しく防災意識が芽生えた証である。3本の指を立てながら、「3 J」と嬉々として唱えていた児童の顔が目に浮かぶ。新しい知識を得た児童らは心なしか誇らしげにも見えた。「国際参加プロジェクト」の活動の一つとして実施された口承文藝の手法を活用した防災教育に手応えを感じた瞬間だった。天理大学の学生が実施した防災教育がモアウォ小学校において、また地域において、代々語り継がれてゆくことを切に望む。

8.「国際参加プロジェクト」の活動全体を振り返って

ニアス島での4回に及ぶ「国際参加プロジェクト」の活動は、文化紹介、小学校でのドッジボール指導、およびピアニカを取り入れた合唱の指導、防災教育、読書教育、外国語教育、コンピューター教育と多岐にわたったが、これらの教育は、それぞれの分野の発展に資するばかりでなく人と人との交流の相互理解を促進し、日本とインドネシア二国間の友好関係を築いていくうえで重要な意義を果たした。

「国際参加プロジェクト」の大きな柱の一つとしてホームステイがあげられるが、このホームステイ体験を通して、広い視野を持つこととなり、固定観念がなくなり柔軟な思考力、また主体的に動く意志力および異文化への理解力を深めることができたのではなかろうか。文化には食文化、衣文化、住文化をはじめとする生活文化や、言語、制度、民族、伝統などの社会文化、また宗教や音楽などに代表される精神文化等々多様な文化があるが、生活文化はそれぞれの地域の気温や気候に適応して発達したものと理解している。寝食を共にすることでその国の生活文化につかることになり、またホームステイ先の家族とのコミュニケーションの中からは家族や社会制度の一端に触れることとなる。時にそこには自分の(日本人の)価値観や倫理観では理解できない対応に戸惑うこともあろう。他者の(異国の)価値観や倫理観を理解していくことは自分自身について問い直しをすることではないか。異文化のよさを感得していくにはまず、自文化を知り理解することが大切だ。

「国際参加プロジェクト・インドネシア」が初めて実施された5年前にニアスの地に蒔かれた「絆」

の種は、確かに芽生え、成長し続けている。小さなつぼみが美しい花を咲かせ、しっかりと深く根をおろしていくのが楽しみである。

私にとって「国際参加プロジェクト・インドネシア」において、スマトラ沖地震・インド洋大津波の被災地であるニアス島を訪問したことは、後に私の研究の発端となった。5 年にわたり被災地を視てきて思うのは、①まず現状や現実を知ること。②知ったら行動をすること。③その行動を継続すること。④年月が経過してもそのことを忘れないこと。⑤他の人に伝えること。これらの五つの事項の大切さである。

「国際参加プロジェクト」を通して、多くの現地の人々と交流することができた。住民の中には、大切な家族を失ってしまった人たちもいた。しかし彼等は決して悲嘆に暮れているばかりではなかった。大人も子供も、現実から目を背けることなく精一杯の明るさで様々な困難を乗り越えてきた。遠く日本から訪れた我々を迎えてくれ、温かい心づかいや思いやりのある言葉で勇気づけ励ましてくれた。私もまた、現地の人々の役に立ちたいという思いを強く持った。「誰かの役に立ちたい」という思いは誰しもが持っており、人間の本質に備わっているものではないだろうか。

「国際参加プロジェクト」へ参加したのがきっかけとなり、毎年ニアス島を訪れるようになってから 5 年が経とうとしている。ニアス島には未知なる部分が多く残されている。これからもニアス島において研究活動を重ね、それらの結果をより広くより多くの人々へ発信し続けたい。

2010年・ニアス健康管理から

天理高等学校看護師　地域文化研究センター共同研究員　椋野 和子

「国際参加プロジェクト」に参加するのは今回で4回目になります。過去の報告書には参加に至る経緯を述べたことはありますが、他者の献身を自らの目標としてプロジェクトに参加している真意は記していません。

30代の頃に「生きる」ことを真剣に考えさせられる事態に遭遇しました。誰にでも起こりうる突然の出来事であり、その受容にいたるプロセスは心理学で学んだ通り、自己否定から始まりました。受け入れ難い現実のなかで、「ひと」、「いのち」について問い続け、先の見えない長い道程を通りました。道を開いてくれたのは教祖の教えでした。親のお陰でこの環境におれたことを感謝しています。69億分の1に選ばれて生きている有り難さが感じられたなら、短い一生の間に何かをしないではいられなくなったことが現在の活動に繋がっています。

さて今回の第11回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」のプログラムは教育を強く意識した、インドネシア語での絵本の読み聞かせと、紙芝居の上演が主でした。（健康管理役としては）渡航前に参加学生とのコミュニケーションを取る機会が十分でなかったことに不安を感じていましたが、幸い前回、前々回のプロジェクト参加者が作ってくれたメンバーの自己紹介ノートで、19名の顔と名前を覚えることができました。

事前研修は毎週決まった時間に行われ、作業も順調にいき、研修時間だけでは足りなくなった追い込みの時期に、授業の空き時間を利用してセンターで作業していた学生と顔を合わせ、同じ作業をしている仲間同士の会話や、進行状況の差から来る不安葛藤、（それにかける）思いやりの言葉などから、全体の雰囲気をつかむことができました。

渡航直前の面談では健康チェック、持参薬の確認、その他の相談をうけ、参加者が心をそろえる大切さを意識して助言しました。健康な学生でも何らかの悩みを抱えていることがわかり、傾聴と経験によるアドバイスである程度解消し、持病のある学生には、常用薬の持参を忘れないように、（また事前活動を経験して想像と違っていたと聞いたときには、話す時間を長くとり現地での様子をみることにしました？？？）。参加した学生がプロジェクトを経験して帰国する前に、自己の変化をどのように表現するか、それは「国際参加プロジェクト」で得られる自己実現の効果として着目したいところです。

熱帯地域へ渡航するとき熱中症対策は欠かせません。渡航前、熱中症についての説明と注意を喚起し、電解質配合のスポーツドリンクや塩飴を持参することを勧め、現地では十分な飲料水を用意し、現地で調達した砂糖、塩も配布しました。WHOが推奨する経口補水塩の作り方は事前の熱中症予防の説明時に行いました。

ニアス島に着き、モアウォ小学校を訪問したとき、校門のすぐそばに以前のプロジェクト参加者が手作りした花壇があり、コスモスが咲いていました。前年のプロジェクトで指導した鍵盤ハーモニカに合わせて♪大きな栗の木の下で♪の歌声が聞こえてきたときは私たちを歓迎してくれていることがすぐ

にわかりましたし、校庭でドッジボールの授業が行われているのを見たときは思わず小躍りしたくなりました。モアウォ小学校で前年度実施した音楽・体育指導の効果、すなわち情操教育が根付いたことが確認でき、うれしい瞬間でした。

ニアス島のグヌンシトリの町はスマトラ沖地震によって、建物その他が被害を受け、昨年訪れたときは閉まっていた店が多かった通りも、改築が進み、色とりどりの商品が店先に並び、活気を取り戻していました。また道路もよくなり交通量もかなり増え、10代の若者がヘルメットをかぶらずスピードを出してバイクを運転している姿をよくみかけました。その国の事情もあり、免許を取って運転している若者は少なそうです。公立病院には、救急設備が整っており、学生もお世話になった。腸炎で点滴を受けている学生に付き添っている間、（病院に交通事故で運ばれてきた人は数人にもなり、毎晩）毎日、何人かが交通事故で運ばれてくることを聞き、交通事故については特に学生に注意を喚起しなければならないことが分かりました。

モアウォ小学校では毎朝全員の健康チェックをしました。熱中症による頭痛、発熱者が多く、疲労による体調不良、軽い下痢症などで例年になく体調不良者が続出しました。食べ物についてはインドネシアの食事は特有の香辛料、油っこい料理が多いので、いったん胃、腸の調子を崩すと食事が摂れなくなり胃腸にやさしいお粥が必要になります。ホテルで休養を必要としたのは数人ですが、高熱がつづいて（一日？）入院者が出たのも特筆すべきことです。活動の絵本の読み聞かせでは、それぞれの完成度には差があり、性格的なことも影響して悩んでいる学生には、乗り越えなければならない壁ですが、温かく接することも必要でした。

モアウォ小学校での活動を終え、帰路にスマトラ島へ移動し、メダン市内のホテルでは緊張が解けて疲れが出たのか風邪症状と熱のある学生が数人いたので部屋周りを頻繁に行いました。

薬については朝から少し体調が悪い程度のときは我慢する場合が多く、持っている薬をいつ、何を、どのくらい飲めばいいかなどの助言は必要になります。持参薬はやはり学生だけでなく現場に携行することが必要でした。救急かばんは常に持ち歩いていたのですぐに対応でき、頭痛薬、胃腸薬はかなりの頻度で使いました。特に不足した薬品類はなくマンディ（水浴び）が欠かせない現地では入浴もでき、肌に密着して水を通さない防水フィルムは傷の手当てに欠かせません。デジタル体温計も数秒で測定できるのを2本持参し、病人が数人いるときに有効活用できました。

モアウォ小学校の児童はよく私達に日本語で「ありがとう」と、はにかみながら声をかけてくれます。言葉が通じなくてもコミュニケーションがとれるとよく言われますが、「ありがとう」の力は偉大です。子ども達は私達を和ませてくれるし、こちらもなにか話しかけなければという気持ちになります。今年は別の日本語を流行らせてくれた学生はいたでしょうか？体調を回復したメンバーの一人が「これしかできない」といって私に足つぼマッサージをしてくれたときは驚きましたが、心からのありがとうだったことは良くわかりました。

言語の不安については、現地では英語はほとんど通用しませんのでインドネシア語の学習が事前研修に取り入れられました。インドネシア語は英語ほど皆の中で浸透していないので、メンバー間にさほど差はなく、そのために自己嫌悪に陥ることが少ないのは心理面をカバーする際助かりました。

具合の悪くなったメンバーのシャツをホテルで洗っているとアンモニア臭で目が痛くなるほどでしたが、日本と違いかなりの汗をかき、手絞りでは渇きが悪いこと、体調不良になると洗濯もできず着替えが多めに必要なこと、天候も考えて多めに用意することなど考えると衣類についての説明がもっと必要であったかもしれません。

今回のインドネシアプロジェクトはこれまでとは異なり体調不良者が続出しましたが、与えられたことに責任を持って取り組み、個人の力を結集して全体を作り上げること、周囲にも関心を寄せ、完成度の違いを認め、それを乗り越えて自らの努力で足並みをそろえ、協力することを学んでくれ、プロジェクトは成功裡に終えることができました。

第２部　学生による活動報告

目次

事前研修

宿泊研修

結団式

在メダン日本国総領事公邸表敬訪問

プサントレインでの活動

モアウォ小学校での活動報告

①　はじめに

②　絵本の読み聞かせ活動報告

③　紙芝居活動報告

「防災教育のための紙芝居」

「外国語教育のための紙芝居」

④　ホームステイ報告

⑤　モアウォ小学校での活動を終えて

⑥　お別れ会

北スマトラ大学との交流

帰国

第 11 回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」

活動報告

目次

事前研修
宿泊研修
結団式
在メダン日本国総領事公邸表敬訪問
プサントレインでの活動
モアウォ小学校での活動報告
① はじめに
② 絵本の読み聞かせ活動報告
③ 紙芝居活動報告
「防災教育のための紙芝居」
「外国語教育のための紙芝居」
④ ホームステイ報告
⑤ モアウォ小学校での活動を終えて
⑥ お別れ会
北スマトラ大学との交流
帰国

事前研修

石倉護[1]、大藤孝洋[2]、上田彩加[3]

私たちは 4 月 27 日からインドネシア出発の 8 月 2 日まで毎週火曜日午後 4 時半から 7 時半までの間、天理大学地域文化研究センター共同研究室で事前準備に従事してきました。事前準備の主な内容は、オリエンテーション、青年海外協力隊説明会参加、健康管理についての講義、インドネシア語講座、ビデオカメラ使用についての講習、北スマトラ大学でのプレゼンテーション準備、紙芝居の作成、そして絵本読み聞かせの練習である。

事前研修日程	
4 月 27 日	オリエンテーション
5 月 11 日	青年海外協力隊募集説明会
5 月 18 日	現地での健康管理について
5 月 25 日	インドネシア・ インドネシア語概論 紙芝居の脚本・絵コンテ作成
6 月 1 日	ビデオカメラの講習 紙芝居の脚本・絵コンテ作成
6 月 8 日	紙芝居の脚本・絵コンテ作成
6 月 11・12 日	宿泊研修：紙芝居の絵の完成
6 月 22 日	紙芝居・絵本のインドネシア語での読み込み練習
6 月 29 日	紙芝居・絵本のインドネシア語での読み込み練習
7 月 6 日	北スマトラ大学との交流 リハーサル
7 月 8 日	天理小学校で紙芝居・絵本読み聞かせのリハーサル
7 月 13 日	紙芝居・絵本のインドネシア語での読み込み練習
7 月 27 日	結団式・神殿参拝
7 月 30 日	最終打合せ・荷物整理

[1] 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科
英米語コース 4 年生
[2] 国際文化学部アジア学科
韓国・朝鮮語コース 3 年生
[3] 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科
英米語コース 3 年生

4月27日、メンバーとスタッフの初の顔合わせの後、活動の説明オリエンテーションが行われた。センター長である住原先生のあいさつに始まり、スタッフとメンバーの自己紹介に続いて、活動の概要についてスタッフの方から説明があった。この時、メンバー同士の会話は少なく緊張でいっぱいだったが、皆、期待で満ち溢れた面持ちで先生方を聞いていた。

5月11日には青年海外協力隊の方々から彼らの活動内容について説明を受けた。青年海外協力隊の国際協力活動は世界中のたくさんの発展途上国の発展に貢献しており、彼らの経験談を通してその活動の重要さや意義を知る事ができた。このプロジェクトの根本的な目標は彼らと同じく国際協力活動であるということ再確認する機会となった。

5月18日には現地での健康管理について、特に暑さの激しいインドネシアでの熱中病対策を中心に大森先生の講義を受けた。予防するためには十分の水分補給と睡眠時間を確保する事が大切であり、予防のために冷えピタやスポーツドリンクの粉を現地に持参するように指導された。

5月25日、倉光先生によるインドネシア語講座を受けた。倉光先生はパワーポイントを使って、インドネシアの日常会話で主に使われる言葉や自己紹介する際に必要な表現についての解説であった。メンバーは皆、ノートにメモを取りながら習った言葉を声に出して楽しく覚えようとしていた。授業の終わりには、ニアス島でしか使われないこんにちわの挨拶“ヤホーブ”を教わり皆で練習をした。

6月1日には、ビデオ撮影についての解説を天理大学広報部の井上氏より受けた。講座では主に、撮影方法、機能、機材についての説明であった。撮影の際、基本的には、三脚を使用したほうが良いことや、ズームやパンなどの撮影方法の種類なども教わった。撮影機能には、ホワイトバランスや逆光補正や録画モードなど様々なものがあり、機材は、コンバーターが良いと説明された。たくさんの撮影方法を学ぶ事ができ、インドネシアの現地活動で活用できそうなことを学ぶことができた。

6月15日、北スマトラ大学でのプレゼンテーションについて、4つの班に分かれて、天理大学、天理教、日本の若者文化、若者ファッションのテーマについて話し合いをした。天理大学担当は石倉、橋本、上田ゆ、田中、栄の5名、天理教担当は安藤、坂本、三枝、滝、大藤の5名、若者担当は渡部、苅安、吉森の3名、若者ファッション担当は斉藤、逸崎、原田、上田さ、乙守、上田ちの6名となった。その後、各班で時間を合わせて話し合いをかさね、少しでも北スマトラ大学の学生に喜んでもらえるよう準備をすすめ、4つの班とも素晴らしいプレゼンテーションを完成することができた。7月6日にはプレゼンテーションのリハーサルを行い、天理大学や天理教の詳しい紹介をする班もあれば、工夫して若者文化クイズやダンスのDVDをプレゼンテーションにとりいれている班もあり、笑いも起こり、とても楽しいプレゼンテーションに出来上がった。また、改善点なども見つかりより良いプレゼンテーションを作るための良いリハーサルを行う事ができたと思う。

以上の作業が終り、いよいよ現地での本活動の準備が始まった。まず、地震の紙芝居を作成する班と会話の紙芝居を作成する班に分かれ、リーダーを決めた後、アイデアを出し合い、おおまかな内容やストーリーを決めて、細かい絵やセリフを考えた。子ども達がわかりやすく飽きないようにする、伝えたいことをしっかり表現するなど、個人の意見を全部取り入れようとし、考えれば考えるほど難しくなって試行錯誤を繰り返し、なかなか進まなかった。その後も、絵コンテの作成、色塗りなど、しなければいけないことがたくさんあったので、研修の日だけでなく空いた時間にメンバーで時間を決めて集まって準備をした。

紙芝居が完成すると、紙芝居班(「地震と津波について教える」、「日本語と英語の会話を教える」の2班)と絵本班(「ハルばあちゃんの手」、「どろんこハリー」「まじょのマジョンナさん」「ちいさなくも」の4班)に分かれた。現地のモアウォ小学校での授業をどのように行うか、全体的な流

れを考えて把握しておく必要があったので、各班で時間を計ったり、最初に言う挨拶を考えたり、読むスピードや授業のスケジュールを調整した。インドネシア語での読みの練習が始まり、インドネシアの留学生の音読を録音したＣＤを聴き、各自それぞれ練習した。その後、時間を作って、留学生の方や山本春樹先生がインドネシア語の指導をしてくれた。また、椋野先生が健康状態について個人面談してくれて、事前に健康について気をつけることを知ることができた。

事前活動は、することがいっぱいで大変だったが、毎回研修を終える度に、メンバー同士の距離は縮まり、インドネシアでの活動への意欲は大きくなっていったと思う。たくさん話しあう機会があったので、いろいろな意見を聞き、相手の立場になって考える大切さを改めて感じた。準備を精一杯したからには、現地で成果を発揮したい、活動を良いものにしたい。そんな思いでインドネシアへの準備を進めた。

宿泊研修

上田千穂[4]、栄春奈[5]

6月11日、今日は待ちに待った宿泊研修の日です。午後4時半開始の研修に一足早く1時から晩御飯の買い出しに4人（斉藤、吉森、滝、上田千）で行きました。「お寿司ってこれで足りる？」「30人前用意するんやんなぁ・・・」まだあまり話したことがなく、メンバーの好みもわからないまま

４人であたふたしていました。4時半になり、ＯＢ，ＯＧも集まる中、研修は始りました。まずは倉光先生の持ち物講座、そしてＯＢ、ＯＧによる体験談。笑い声が絶えない食事会となりました。その後、天理教紀陽大教会信者詰所へと歩いて向かいました。詰所でお風呂に入り、パジャマパーティーがスタートしました。改めて自己紹介から始まり、とにかくメンバーの名前を覚えるのに必死、ゲームをしながらメンバーのことを知るのに一生懸命な一日目でした。

2日目、朝食は7時半からでしたが、各自起床時間もバラバラで、中には5時半からの朝づとめに行く人もいました。その後、9時からゆっくり作業へと移っていきました。
紙芝居の作成の作業を、地震・会話班に分かれて行いました。たまに大きな声でセリフの読み上げをしたり、世間話をしたり、和気あいあいと作業も進んでいきました。お昼御飯を食べて12時半から作業を再開しました。
３時ごろに、インドネシアに同行してくださる髙藤さんが今回行く私たちメンバーの様子を見に駆けつけてくださいました。そこでニアス島についての最新情報や、今研究されていることについてお話を聞かせてもらいました。すぐに帰らなくてはいけない髙藤さんに「ニアスでお世話になります」とお別れをして4時半作業終了。みんな家に帰りたかったのか片付け、部屋の掃除、記念撮影をテキパキこなして5時に詰所をあとにしました。

今回の宿泊研修の最大の目的だったメンバ

[4] 国際学部地域文化学科（タイ語）1年生
[5] 国際学部地域文化学科（インドネシア語）1年生

ーが仲良くなることも無事にミッションクリアー。お疲れ様でした！！

宿泊研修１日目（6月11日）	
16:30	地域文化研究センター集合 ①「本番にむけた準備・持ち物について」 （倉光先生、OB・OG） ②ニアス島での体験談＋アドバイス （OB、OG）
18:00	・OB/OGを交えた懇親会
19:30	紀陽詰所に移動
21:00	・講堂で親睦会 （ゲームなどグループワーク）
23：00	就寝

宿泊研修２日目（6月12日）	
7:30	朝食
9:00	・紙芝居作成（下絵、色塗り）
11:30	昼食
12:00	・紙芝居作成（下絵、色塗り） 高藤洋子さんのお話「ニアス島の地震被害と防災教育について」
16:30	作業終了、片付け
17:00	解散

【高藤洋子さん（立教大学アジア地域研究所 研究員）のお話】

毎年インドネシアに行っている。「国際参加プロジェクト（IPP）」に参加してからはインドネシアの防災教育について研究を始めた。IPPの活動のなかった２００９年度にも単身でニアス島を訪れた。2年前のIPPの活動で教えたドッヂボールやリコーダーはモアウォ小学校で浸透している。今回の活動は、私たちの活動の後もモアウォ小学校の先生たちが子供たちに対して防災訓練の授業を行うかにかかっている。

インドネシアの防災協力について…スマトラ島沖地震でニアス島は700名近くの死者を出したのに対し、シムル島ではわずかの６名であった。理由は100年前の地震による災害を目の当たりにしたシムル島の住民たちにより、自分を守る方法を子守唄にして代々受け継いできたこと。その子守唄は韻をふんでいたり、人が覚えやすいとする『３』をうまく活用していたなど身近で親しみやすいものとなっている。

【OB・OGの体験談＆アドバイス】

- 子供に朝５時から走りに行こうと誘われることもある？！
- トイレとマンディは慣れるしかない、　トイレしてからマンディすれば大丈夫？！
- 子供と遊べ（体力には気を付けて）
- 体調を崩したらすぐに対処を（日本食のレトルトは保険で持っていくべき）
- ご飯をいっぱい食べると喜んでくれる
- インドネシアはオカマが多い
- 子供たちとの会話も真面目に（約束を破ったといってすごく怒られた）
- 疲れていたら休むこと
- 毎日昼寝しても大丈夫
- ケロンブランダーというめちゃめちゃおいしいジュースがある

結団式

原田　亜紗美[6]

式次第

1. 飯降学長の挨拶
2. 住原センター長の挨拶
3. 事業説明（プロジェクト担当教員）
4. 学生自己紹介（インドネシア語と日本語）
5. 記念撮影
6. 神殿参拝

2010年7月27日、地域文化研究センターにて、「国際参加プロジェクト」の結団式が行われました。

最初に、飯降学長先生の挨拶がありました。先生は「活動を行うことで、心を培う。心とは、国際性や宗教性であり、それが他者への献身である。『人のために何かをさせていただく。世の中に、

[6] 体育学部体育学科スポーツ学コース４年生

心を培った人材を。』という想いから、「国際参加プロジェクト」が発足した。」と本プロジェクトの意義を述べられ、『誠の心』と書いた色紙をくださいました。「真の誠とは、人を助ける心や人に尽くす心である。」ボランティア活動を行う根底には、『誠の心』が、自分を動かし、人を動かすものだと感じました。

次に、住原センター長の挨拶がありました。「活動は、ＨＯＰ（事前研修）ＳＴＥＰ（現地活動）ＪＵＭＰ（事後研修）である。そして、２つのことを伝えたい。１つは『準備』。心と体の準備をしっかり行い、万全の状態で活動に臨んでほしい。そしてもう１つが、『私たちは天理大学、日本の代表』ということである。ニアスでの最後の活動となる今年、数千人の人たちの想いがニアスに届く。私たちは、その想いを送り届ける役目を担っている。」

現地での大きなＳＴＥＰを踏み出せるよう、準備の重要性を再確認し、活動を行いたいと感じました。

次に、井上先生から、ホームステイ先での注意事項についての説明があり、関本先生から３原則（生水を飲まない・海に入らない・動物に触らない）の話がありました。チームで活動するためには、必ずルールがあり、それを守ることでよりよい活動ができると感じました。

結団式に出席して、改めて活動の本意に触れることができ、私たちの「国際参加プロジェクト」に対する想いが高まりました。たくさんの人々の想いを背負い、天理大学、そして日本の代表として活動したいと決意を新たにしました。

在メダン日本国総領事公邸表敬訪問

安藤健太[7] 斉藤貴子[8]

インドネシアに到着して最初の活動は、メダンの総領事公邸の表敬訪問でした。公邸に到着すると、青山総領事と秘書の方々が私たちのことを迎えてくれました。公邸内は、インドネシアにいることを忘れさせてくれるぐらい日本の空気が流

[7] 国際文化学部アジア学科中国語コース４年生
[8] 体育学部体育学科スポーツ学コース４年生

れていました。広間には私たちのために綺麗にセッティングされた丸い形のテーブルがいくつも並べられていました。それはまるで政治家の方々の食事会に来た気分でした。

私たちが席に着くと、まず青山総領事から挨拶があり、「バリやジャカルタなどの観光地ではできない貴重な体験を是非ニアスでしてきて下さい。」と激励の言葉を頂きました。総領事の挨拶の後、私たちを代表して住原先生が総領事館の皆様のご好意に対する感謝の言葉を述べました。最後に、学生代表としてサブリーダーの石倉護君が「みんなで力を合わせて、プロジェクトを成功させます。」と決意を述べました。

総領事公邸では、私たちのために昼食としてインドネシア料理と日本食を用意してくださいました。インドネシア料理にはそれぞれネームプレートが並べられていて、ささやかな心遣いが感じられました。インドネシアの方が作ったとは思えないほどの本格的な日本職に感動し、学生だけでなく先生方も夢中になって料理をいただきました。デザートは南国なだけあってとても色鮮やかで、ココナッツの甘さも加わり、とても美味しかったです。

昼食を美味しくいただきながら、私たちは各テーブルで談笑を楽しみました。テーブルごとに総領事館の方々が一人ずつ付いてくださったため、色々な話ができました。青山総領事は「スマトラ島の人たちは日本にすごく興味のある人たちばかり。またインドネシア人でもニアス島に行ったことのない人が多い。そのニアス島でホームステイをするのだから驚きだ。」と語っておられました。

はじめは緊張していた私たちですが、美味しい料理と総領事の方々の手厚いおもてなしに、いつの間にかリラックスして楽しい時間を過すことができました。普通ならできない総領事館公邸に伺うことができ、改めてこの「国際参加プロジェクト」に対する責任の重さを実感しました。学生一同、次の日からのニアス島での活動に気持ちを引き締めなおした一日になりました。

プサントレイン活動報告

田中元恵[9] 吉森祥平[10]

インドネシアに到着して2日目の午後。いよいよプロジェクトの最初の活動となるプサントレイン寄宿塾での紙芝居と絵本読み聞かせを披露する時がきた。プサントレイン寄宿塾はイスラム教を厳格に信仰する生徒たちの学校である。小学生は自宅から通っているが、中学生以上は全寮制であり、きちんとした生活リズムで共同生活をしながら学業に励んでいる。

プサントレイン寄宿塾にバスで到着した時から、私たちを待ってくれていたたくさんの生徒たちがインドネシアと日本の国旗を持って花道を作っていて、私たちは音楽隊の誘導によって講堂へ導かれた。講堂にはすでに全校生徒が待機していており、舞台向かって左は男子、右は女子と分けられていた。私たちは想像を超える歓迎ぶりと生徒数に圧倒されながら一番前の席に招かれて、交流会が始まった。

塾長先生の挨拶に始まり、続いて天理大学の住原先生、学生代表が挨拶をした。そのあと高学年対象の紙芝居班は講堂に残り、低学年対象の絵本班は大きめの教室に移動して読み聞かせをすることになった。

生徒の移動に時間は少しかかるようだが、紙芝居班と絵本班に時間差ができては大変だ。すぐに4冊の絵本の読み聞かせが始まった。生徒全員に絵本が見えて声が聞こえる状態にすることは難しい状態であったが、私たちは緊張しながらも彼らに喜んでもらえるようにと全力で絵本を読んだ。

---

[9] 人間学部人間関係学科生涯教育専攻3年生
[10] 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科フランス語コース2年生

おそらく３，４学年ほどの大勢の生徒が次々と教室に入ってきてあわただしかったし、また閉めきった教室の３か所で同時に絵本を読むことは、想定外のことも多く、気温や湿度が高い環境だった。教室自体が薄暗かったこともあり、生徒たちは絵本が少し見にくかっただろう。私たちは、生徒を前にしたインドネシア語での読み聞かせは初めてということもあって緊張し、また想定外の環境にも戸惑ったが、できるだけのことはやった。生徒たちは私たちの聞き取りにくいインドネシア語をどこまで理解してくれたかわからないが、一生懸命見てくれている様子もあった。

講堂ではもう一つの活動である紙芝居を披露していた。練習とは違う広い会場で大衆が見てい

る状況はかなり緊張するものだった。絵本班が終了するまでに時間もあったので、紙芝居の会話の復習や交流をすることもできた。

絵本班が講堂に帰ってきてからは、生徒たちがインドネシアの伝統的な舞踊を披露してくれた。衣装も楽器も見たことのないものばかりで、目が離せなかった。それ以上に、私たちのために練習してくれたことや生徒の代表は選抜であることが私たちとってはとてももったいないものだった。カメラに収めきらないほどの笑顔をもらい、写真をたくさん撮ったり交流をしたり、とても楽しくて寄宿塾の滞在があまりにも短く感じられる交流会であった。

モアウォ小学校での活動報告

① はじめに

上田　裕太郎[11]

ニアス島につきモアウォ小学校での活動が始まりました。まず学校でホームステイ

先の家族や学校の先生、そして多くの子ども達に迎えられました。次の日から本格的な活動が始まりましたが、最初に思ったことは子ども達をどうやって集中させるかということでした。子どもたちは興奮してはしゃいでいるので、とても活動に入ることが出来る状態ではありませんでした。しかし実は私たちも最初は楽しくはしゃいでしまっていたのです。

なんとか静かにさせようと考えました。そこでまず北スマトラ大学の学生たちにお願いして、静かになるように促してもらい、また自分たちでも「静かに」や「座って」等の簡単な単語を覚えることで活動できる状態まで持っていくことが必要でした。そうすることで日本人を見て騒いでいた子どもたちを静かにさせることに成功しました。次に気になったことは他のクラスの生徒たちが窓から入ってこようとしたり、手を振ったりするので絵本や紙芝居の途中で気が散ってしまう原因になりました。そこで他のメンバーが注意を詞にいったり気が散った生徒や集中していない生徒の近くに座り集中するように促しました。こうすることである程度生徒を集中させることが出来ました。また絵本や紙芝居の間の時間で体操や軽いゲームをして子どもたちと身体を動かして遊ぶことでリフレッシュを図ることができました。また活動後もそれぞれの班に分かれて反省会をすることで目線のもっていき方や本のめくり方など反省点を言い合いました。絵本と紙芝居それぞれで工夫することでより良い活動になるように目指していきました。

② 絵本の読み聞かせ活動報告

阪本　健太郎[12]

8月4日から11日までニアス島で活動をした。まず、8月4日の午後にメダン空港を出発し、夕方にニアス島のビナカ空港に到着した。しかし、荷物のトランクが手違いにより空港に一緒に届かないというハプニングもあった。空港から車で

[11] 文学部国文学国語学科3年生

[12] 文学部歴史文化学科歴史学専攻4年生

移動し、モアウォ小学校でホストファミリーとの対面式をした。顔合わせの時に、村長さん、校長先生の挨拶があった。解散後、それぞれのホームステイ先へ移動した。翌日5日から紙芝居と絵本の読み聞かせの現地活動を開始した。朝は7時15分に小学校に集合し、8時5分までその日の流れの説明やミーティング、教室の準備をした。8時5分から9時15分までが1限目で、2限目は9時25分から10時35分までだった。活動内容は、紙芝居班と絵本班の二つに分かれて、三つの教室に分かれて活動を行った。絵本班は、4種類の絵本に、それぞれ3人ずつが担当し、計12人が活動した。

絵本は、「ちいさな雲」、「どろんこハリー」、「となりの魔女のマジョンナさん」、そして、「ハルばあちゃんの手」の4種類である。「ちいさな雲」は、上田千穂(泰1)、栄春奈(印1)、上田裕太郎(国3)が担当し、「どろんこハリー」は、吉森祥平(仏2)、三枝春菜(宗3)、田中元恵(人3)が担当し、「となりの魔女のマジョンナさん」は、滝まどか(仏1)、柳瀬奈美(西2)、橋本郁弥(中4)が担当し、「ハルばあちゃんの手」は、苅安健太郎(英3)、石倉護(英4)、阪本健太郎(歴4)の計12人が担当した。

絵本は日本語のものを山本春樹先生がインドネシア語に訳してくださったものである。絵本の読み聞かせで一番苦労したことは、今まで話したことのないインドネシア語で子どもたちに読み聞かせることだった。

日本語では、感情をこめて読めていたが、インドネシア語では、どこを強調して読むか、どの部分に感情を入れて読むのか、細かい点で苦労した。しかし、数多くの練習を重ね、ニアスの子どもたちの前で実際に読む間に、だんだんと上達していったと思う。ただ絵本を読み聞かせするのではなく、この絵本で子どもたちに何を伝えたいのか、どのような思いが込められているのかなどを念頭に置き、読み聞かせに取り組んだ。そこで「導入、展開、まとめ」という一つの流れを作った。「導入」ではその絵本の興味を湧かせるような簡単な質問を各絵本チーム(種類別)で考え、「展開」で絵本を読み、「まとめ」で子どもたちの心に残すように工夫した。例えば、「小さな雲」や「となりの魔女のマジョンナさん」では、読む時の工夫として「変身」というセリフや呪文の句を子どもたちと一緒に声に出し、子どもたちも参加しているという一体感が出るようにした。活動後にミーティングを重ね、読む際の注意点や、サポートに回った時の子どもたちへの配慮など、非常に細かいところまで、話し合った。読み聞かせが上手くいかない時もあったが、最終日には、メンバー全員がいきいきとした顔で絵本の読み聞かせを終えていた。この活動は、単なる絵本の読み聞かせではなく、子どもたちの心に何かを残す教育の一つだと感じ、意味のある活動であった。

絵本のタイトル			
	タイトル	日本語	対象
情操教育	TANGAN NENEK HARU	『ハルばあちゃんの手』 山中恒作、木下晋絵、福音館書店、2005年。	1～3年生
	HARRY BERLUMPUR	『どろんこハリー』 ジーン・ジオン作、マーガレット・ブロイ・グレアム絵、わたなべしげお訳、福音館書店、1967年。	
	BU MAJONNA, PENYIHIR TETANGGA	『となりのまじょのマジョンナさん』 ノーマン・ブリッドウェル作、長野ヒデ子絵、ながつきるり訳、偕成社、2001年。	
	SI AWAN KECIL	『ちいさなくも』 エリック・カール作・絵、もりひさし訳偕成社、1996年。	

③ 紙芝居活動報告

ニアス島に到着して2日目の8月5日、今回のプロジェクトの目玉である紙芝居活動が始まった。モアウォ小学校では、1日2時間（活動最終日のみ1時間）の活動を4日間、全部で7時間行った。紙芝居活動は、防災教育（地震班）と外国語教育（言語班）を内容にした二部構成のもので、モアウォ小学校の4・5・6年生を対象に行った。

活動初日、子どもたちが紙芝居に集中してくれるか不安な気持ちを抱えながら活動に挑んだ。紙芝居で授業をするにあたって、私たちと子どもたちとの距離がなるべく近くなるように、またすべての子どもたちに紙芝居がよく見えるようにということから、まず教室の机や椅子をすべて教室の端に寄せた。子どもたちは今から何が始まるのだろうという少しワクワクした様子で、すぐに私たちの周りに集まり、その後、北スマトラ大学の学生にこれからする地震班の紙芝居の話の説明をしてもらい、子どもたちはひざを抱えて床に座り紙芝居に注目してくれた。子どもたちの表情や目の動きに気を配りながら、話を進め、途中内容の難しいところでは、北スマトラ大学の学生に説明を入れてもらった。しかし、子どもたちの様子はどこかポカンとしていた。地震が起こる仕組みから実際に地震が起こったときにどのように避難すべきかを内容にした地震班の紙芝居は、子どもたちには少し難しかったようだ。後半の言語班の紙芝居も同様、通訳を介して説明を随時してもらいながら話を進めた。途中、子どもたちと一緒に日本語や英語の発音練習をする場面があったので、そこで場を盛り上げることができた。一日目の活動を終え、放課後各々に活動の反省をした。小学校の先生から指摘をいただいた結果、どうやら私たちが使っていたインドネシア語を、子どもたちは理解できていなかったようだ。子どもたちが日頃使っているニアス語と、公用語であるインドネシア語はかなり違うものだという理由であった。すぐさまその箇所を先生にアドバイスしていただき、原稿にも変更を加え、子どもたちが退屈することなく楽しく、かつ実践的に学べるようさらにいくつかの工夫を加え翌日に挑んだ。前日の反省が活かされて、翌日の活動は見違えるように良くなった。言葉を何回も違う言葉に言い換えて説明したり、地震が起こったときの状況を教室内で再現し、実際に子どもたちに避難訓練を体験してもらったことで、紙芝居に対する子どもたちの反応だけでなく、子どもたち自身の理解も深まった様子だった。二日目の活動を終え、メンバー内で良かった点や改善すべき点など意見を出し合い日に日に活動がより充実したものになっていった。言葉の壁はあったものの、教室にいる全員が一体となって学ぶことができたように感じた。課題はまだ残っているが、実践する度に反省・改善の繰り返しをしてきたことが今回のプロジェクトの成果に繋がったのではないだろうか。このプロジェクトで子どもたちに伝えたことがどのような形であれ、彼らの将来に活かされればと思う。

紙芝居による教育目的とタイトル			
目的	タイトル	日本語	対象
防災教育	GEMPA BUMI DAN TSUNAMI	地震と津波	4～6年生
外国語教育（英語／日本語）	PERJALANAN SI BUDI DALAM PELAJARAN BAHASA ASING	ブディ君の外国語の学びの旅	

1　防災教育のための紙芝居

防災教育のための紙芝居は、まず地震の仕組みを説明するところから始まり、続いて実際に地震が発生したときの避難の方法についてクイズを交えて解説する内容です。

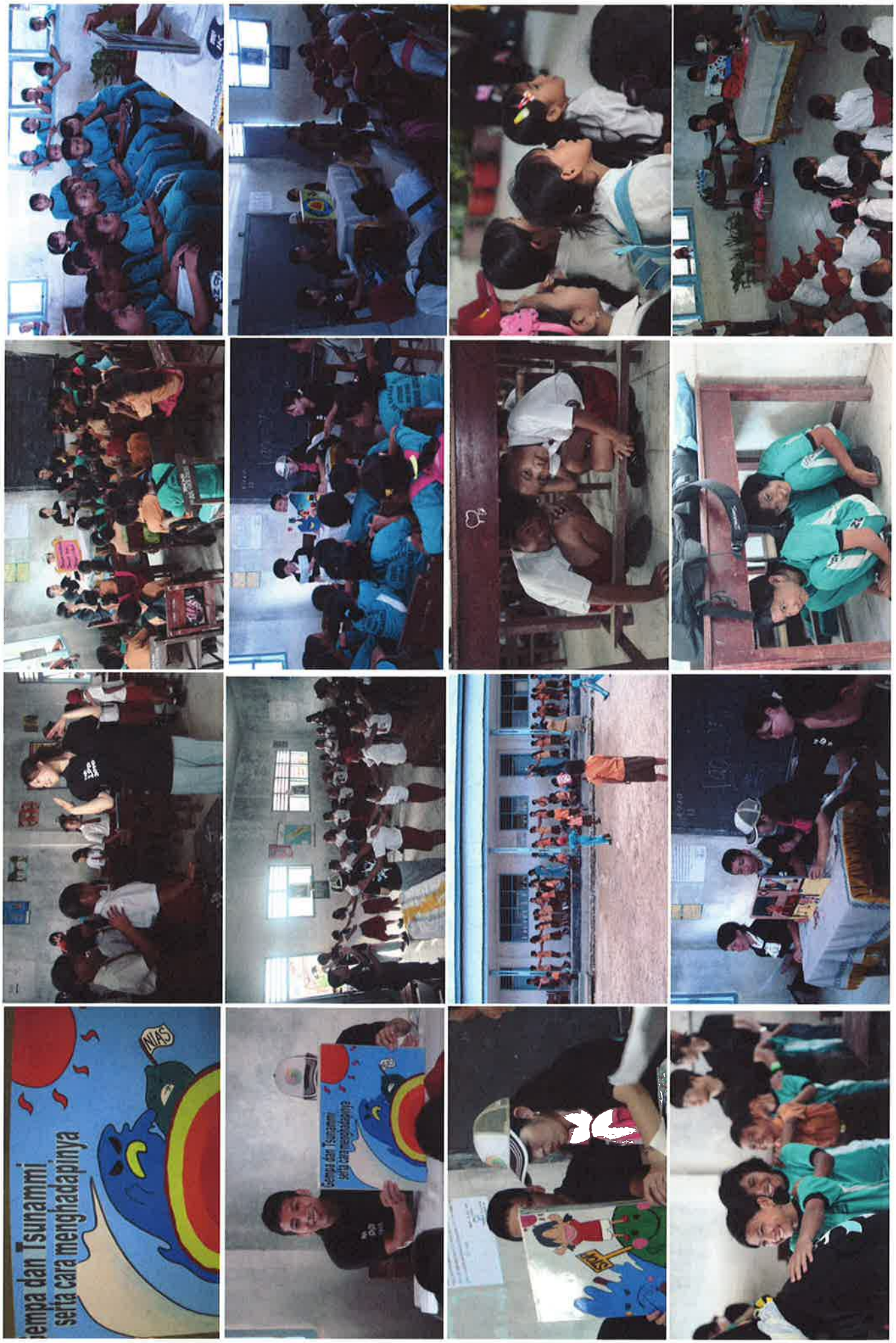
地震の仕組みの説明では、地殻の変動に関する難解な言葉を小学生にうまく伝えるために、卵の殻を地殻に例えて解説したり、地震と津波との関係を効率的に伝えるために絵の一部を可動式にしてみたりと、工夫をしました。

避難する場面では、地震が発生した時、収まった後、そして避難する経路に関する三択クイズを絵で示し、赤・青・黄色の服を着た子どもたちがそれぞれの方法で避難する様子を図示しました。最後に「押さない・走らない・騒がない」という「三つのべからず」をインドネシア語にしてみんなで唱和しました。こうした

【絵本の読み聞かせ活動】

【絵本の読み聞かせ活動】

【紙芝居活動】



【紙芝居活動】

「三」の数字を用いた方法は、子どもたちの記憶に残りやすい手法であると事前研修で学んだものを取り入れたものです。

紙芝居の後は、実際に避難訓練をしてみました。教室の中で、机の下に隠れたり、一列に並んで教室の外に避難したりと訓練を行いました。

2　外国語教育のための紙芝居

外国語教育のための紙芝居は、英語と日本語を勉強するという方針のみがありその他は全くの白紙の段階から台本を考えました。ストーリーの流れをつくり、子どもが興味を持ちやすいようにと工夫した。主人公はインドネシア人の男の子で名前をブディ君とした。ブディ君がインドネシアから日本へ、日本からアメリカへと飛んで行き、日本語と英語を勉強するというストーリーにした。

勉強した単語の内容は基本的な挨拶と食事のときに使える語彙など少ないものだが、物語の流れの中で外国語を勉強する方法は、まず外国語への興味を引くことから始める上で、子どもには効果的ではないかと思う。実際、紙芝居の後には日本語と英語を使って挨拶などの練習を行い。子どもたちも大きな声で、日本語・英語で自己紹介をしてくれていた。

④　ホームステイ報告

渡部京介[13]

ニアス島での活動中、私たちは現地の方の家にホームステイ（HS）させていただいた。ニアス島に到着したその日に、ホストファミリー（HF）との対面式があり、学生一人ひとりの名前が呼ばれHFが紹介されました。熱い抱擁を伴う出迎えに戸惑いつつも、その歓迎に私たちの心も躍りました。

ニアス島で迎える初めての夜は、他の学生メンバーもスタッフの先生方もいないという心細さと、初めて体験するニアス島の生活に対する動揺が相まって、とてつもなく長く感じたのを覚えています。家に着くとまず「マンディー」というインドネシア式の入浴を勧められましたが、日本のお風呂とは違ってシャワーもお湯もなく、水がためられた水槽から手桶で汲んで浴びました。マンディーを終えて食事になると、床に敷いたマットの上にお皿やボウルが並べられ、お祈りが始まりました。お父さんが感謝の言葉を述べ、「アーメン」と言うと、それに続いてみんなも一緒に「アーメン」と言って食べ始めました。スプーンやお箸ではなく手を使って食べるという初めての体験も、想定済みだったので動揺もせず難なく食べられました。ニアスでの初めてのご飯は、お米とほうれん草のような野菜と辛い魚でした。ご飯はすごく美味しくて、「エナッ（おいしい）？」とお母さんに聞かれても「エナッ、エナッ（おいしい）」と予習してきたインドネシア語でサラっと答えられました。食事を終えても寝るにはまだ早かったので、最初の夜はHFと日本やインドネシアについて色々な話をしました。私のHFは、両親はインドネシア語しか話さないのですが、4人の子供たちはみんな英語が話せたので、通訳をしてもらいながらコミュニケーションをとりました。たくさん話しているうちに時間が経って夜も遅くなり、おやすみのお祈りと聖歌を歌って、初日の夜は眠りにつきました。

そんな生活をしていく中で、HF以外にも多くの人たちと関かかわることがありました。午前中はプロジェクトの活動を行い、午後は各自の自由行動だったのですが、ゲームセンターやショッピングセンターがあるわけでもないので、自由時間は基本的に「ジャランジャラン（散歩）」をしました。その途中、多くの人たちが「アリガト」と私に声をかけてくれて、その中の何人かとは仲良くなりました。島の中学生とバスケットボールやサッカーの試合をしたこともありました。サッカー

[13] 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科
英米語コース4年生

の試合を通して知り合った中学校の先生に頼まれて、日本語教室を開くこともありました。他の中学校の先生とも知り合い、「生徒たちは外国人に興味があるから、ぜひ皆に話をしてあげてよ」と頼まれたので、大勢の中学生の前で小さな講演会もしました。そこにいた生徒の一人がギターを持ってきて「日本の歌を唄ってよ」と頼んできたので、私は「なごり雪」を弾き語りました。すると生徒は盛り上がり、先生も大喜びで一緒に歌ってもくれました。話を聞くと、インドネシアでも放送されている日本アニメ「ナルト～疾風伝～」の主題歌でもある「なごり雪」はインドネシアの人達にも人気なんだそうです。ひとたび歌を唄うと、その事を聞いたHFや近所の子どもたちが「キョウスケ！ナゴリユキ！！」とギターを持ってくるようになりました。そして一緒に歌いながら練習をし、最後には日本語の歌詞を口ずさむまでになりました。歌が唄えることが認められると、今度は「明後日の日曜礼拝のステージで歌いなさい」と HF がすすめてきました。夜に教会に集まって練習したりしながら何とか歌を覚えて、礼拝では完璧に歌う事が出来てHFも大喜びでした。

そんな風にして多くのインドネシアの人達と関わり、HF とも少しずつ絆を感じ始めたころに、お別れが来てしまいます。最後のお祈りを家族でする時、お父さんがいつも家族の名前を言うのですが、家族の名前の最後に「キョウスケ」と僕の名前を言ってくれたのが聞こえました。最初の頃は名前をなかなか覚えてもらえず、インドネシア語で “日本人” と呼ばれていたのに、ついに家族の一員になれたような気がしました。そして夜中の3時過ぎまで家族みんなが起きていてくれて、お別れ間際には手紙やインドネシア土産を貰いました。不便さや戸惑いも少なくはなかったですが、最高のホームステイを経験する事が出来ました。

⑤ モアウォ小学校での活動を終えて

滝まどか[14]

四日間に渡るニアスでの活動で、メンバーたちの気持ちが一つになっていったと同時に、メンバー一人ひとりの責任感の向上、子どもに「教える」という自覚が高まった。

活動中の教室は、毎日生徒達の有り余るほどの元気で、教室の窓や、ドアの隙間から興味津々な眼差しで覗き込む子でいっぱいだった。

毎日の活動後のメンバー同士の話し合いで日々活動内容は改善され、工夫を加えた結果、活動初日と比べて最終日の紙芝居と絵本の読み聞かせは比べ物にならないくらい良いものになった。初めの方は、こちらが一方的に読んで、子どもたちが本当に理解してくれたかどうか分らない状態で、不完全燃焼で終わってしまっていた。しかし、だんだん生徒と一体になって一緒に楽しむ方法、子どもたちの視線をこちらへ向ける工夫を見いだし、日を重ねるごとにしっかり活動できている、自分の身になっているという充実感を味わえるようになった。

絵本、紙芝居を読むメンバーの声の大きさや、強弱、表情、表現の仕方なども、子どもたちに伝えたい、楽しんでもらいたいという気持ちが高ぶるにつれ、豊かになっていった。私達が変わると、同じように子どもたちも一緒に楽しんでくれ、真剣な場面では真剣に聞いてくれるようになった。スマトラ大学の学生の方たちが、初めや最後にインドネシア語で子ども達に本のあらすじなどを説明してくれたりと、子どもたちと私たちを繋ぐ懸け橋になってくれたおかげで、今回の活動がスムーズにいったと言ったと思う。私たち自身も活動を通して、スマトラ大学生との交流を深めることができた。

ニアスでの活動は今回で最後。ニアスの子どもたちはとびっきりの笑顔で私達を迎えてくれた。彼らにとっても、私たちにとってもこの四日間は特別で貴重な体験だった。

私達が紙芝居や絵本を通して伝えたことを次の世代へと伝えてもらい、今後の生活に役立つ知識として残してくれることを願う。

⑥ お別れ会

三枝春菜[15]

8月10日、モアウォ小学校校庭にてお別れ会が行なわれた。校長挨拶に始まり、生徒達が伝統的な歌やダンスを披露してくれた。そこでは、第9回プロジェクトで指導した「大きな栗の木の下で」と「幸せなら手をたたこう」も、振りをつけながら元気よく歌ってくれた。歌の伴奏は、生徒が鍵盤ハーモニカを用いて演奏してくれ、「国際参加プロジェクト」の活動が、しっかりと現地に根付いていることを確信することができた。また、女子生徒数名が華やかな赤い衣装に身を包んで登場し、「モヨ」と呼ばれる、歓迎の意が深く籠められた伝統的なダンスを披露してくれたことも印象的であった。

天理大学生からは「世界に一つだけの花」を全員で歌い、生徒の代表がインドネシア語で感謝の

[14] 国際学部地域文化学科（フランス語）1年生

[15] 人間学部宗教学科3年生

【お別れ会の写真（2010 年 8 月 10 日）】

気持ちを伝えた。その後、住原センター長挨拶、記念品贈呈と続いた。挨拶の時には、今回のプロジェクトに同伴して頂いた北スマトラ大学の学生が、日本語・インドネシア語の通訳を勤めてくれた。記念品には、今回の活動で用いられた紙芝居や絵本、「絆」の文字が描かれた千羽鶴や、小学校からの要望でパソコンなどが寄贈された。

今年度の活動で伝えられたことが、今後もニアスの人々と共に生き続けていくだろうという大きな期待に胸を膨らませ、私達はモアウォ小学校での活動を終えた。

北スマトラ大学との交流会

橋本郁弥[16]　苅安健太郎[17]

ニアスでの活動を終えた私たちが残す最後の活動が北スマトラ大学との交流会であった。　同世代のインドネシア人と関わりあう貴重な機会であったので個人的に期待を胸に抱いていた。しかし、ニアスでの活動とは違い自分たちの発表の練習を重ねていなかったことに多少の不安もあった。

住原センター長の挨拶、学生代表挨拶の後に私達のプレゼンテーションが始まった。二部構成になっていたプレゼンテーションは、初めに天理大学・天理教の説明、続いて日本の若者文化紹介となっていた。天理大学・天理教の説明では「国際参加プロジェクト」のテーマでもある「他者への献身」ということに重点を置きながら大学の成り立ち、卒業生紹介、インドネシアとの関わりを紹介し、天理教の歴史、「かしものかりもの」の教理などについての説明をした。そこで多少ではあるが天理スピリットが伝えられたのではないかと感じた。

続く日本の若者文化紹介では女性編と男性編に分割して説明をした。女性編では主にファッションを中心として解説したが、女子学生が多かったので好印象であった。続いて男性編ではファッションや音楽、言葉、アニメなど多岐に渡って紹介し、学生の興味にも合致したようで食い入るように画面と説明者を見ていた。

私たちのプレゼンテーションの後には北スマトラ大学の学生が劇を披露の時間が待っていた。トバ湖の伝説の演劇で、日本の鶴の恩返しに似ている点があり親近感が沸いた。

16 国際文化学部アジア学科中国語コース４年生
17 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科
英米語コース３年生

ラマダンの時期ということで、私たちだけ別室で昼食をとった後に、北スマトラ大学生との交流を深めるために北スマトラ大学生４人と天理大学生２人のグループをつくり、メダン観光をすることになった。私のグループは市場に行くために、乗り合いバスに乗った。この乗り合いバスが日本と違いとても面白い乗り物であった。大きさはハイエースぐらいで、その中に８人以上の人たちが乗り、人と人の距離はとても近く、しゃべらないではおけない状況で、見ず知らずの人と仲良くなれる。市場は日本と同じく会話を交えての商売で、私たち日本人はお金を持っていると考えられているため、北スマトラ大学生に市場では店の人とは話さないでくださいと言われた。しかし、この市場での買い物はとてもエキサイティングでいい買い物ができた。

ベチャと呼ばれるバイクの横に３人分の座席を構えている乗り物で移動をした。天井も低く、座りながら前傾姿勢をとらなければならない空間、エアコンもドアもなく暑さと排気ガスで途中気分が悪くなるが、実に異国情緒溢れたものであった。着いた場所はバザールのような場所で、中は雑然としていて自分がどこを歩いているのか分からなくなった。

バザールを後にし、「お菓子を買いたい」という要望にメダン名物の専門店に案内してもらったが、私たちの欲しかったものはスナック菓子だったため、結局 SOGO 内のスーパーで買い物をしホテルへと帰った。期待していたインドネシア人との交流ができたことに満足し、今でもメールなどで連絡を取り合う友人と出会えたことを嬉しく感じる。

帰国

乙守　真喜[18]

８月 11 日の早朝、私たちはホームステイ先の人達と最後のお別れをして車でニアスの空港へと向かった。約１週間のホームステイが終わった。小学校での紙芝居・絵本の読み聞かせ、ニアスの人たちとの交流、とても大事な時間だったと名残惜しみながらも７時発の飛行機に乗った。日が昇って間もない時間に出発。飛行機に朝日が差し込みとてもきれいだったのを覚えている。そして、１時間でメダンに到着した。メダンに着くと私たちはバスでアセアン・インターナショナルホテルへ行った。午前中は休憩。午後からメダン観光。ホテルで１泊。１２日はスマトラ大学への訪問があり、２０時３５分にはメダンを離れた。

飛行機に乗ってシンガポールへ。２３時にシンガポール到着。そこからシンガポール空港で買い物をしたりして深夜の１時１５分にシンガポールを飛び立った。約６時間飛行機に揺られて１３日の朝８時半に関西空港に到着。日本も暑かった。

[18] 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科
フランス語コース３年生

第３部　学生によるレポート

インドネシアでの活動後には、毎週火曜日の５時間目に事後研修（2010 年９月～2011 年１月）を行った。毎回数名の参加者に発表してもらい、参加者同士で討論した後、以下の通りレポートにまとめた。

1. インドネシアの環境と現実 ～なんでゴミすぐほるん？～

　　上田　千穂　　国際学部地域文化学科（タイ語）１年生

2. 背景を知るということ

　　栄　春奈　　国際学部地域文化学科（インドネシア語）１年生

3. 教育が子供たちを救う

　　滝　まどか　　国際学部地域文化学科（フランス語）１年生

4. 私たちは何を残してこれたのか？

　　吉森　祥平　　国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科フランス語コース２年生

5. 手紙で始まる国際協力

　　上田　彩加　　国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース３年生

6. 腸チフスになって良かったこと悪かったこと　～病床で感じた家族の絆～

　　上田　裕太郎　文学部国文学国語学科３年生

7. 栄養と料理－ホームステイをとおして

　　大藤　孝洋　　国際文化学部アジア学科韓国・朝鮮語コース３年生

8. 紙芝居で防災教育

　　乙守　真喜　　国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科フランス語コース３年生

9. ホームステイを上手くすごせる説明書 in Indonesia 二アス島編

　　苅安　健太郎　国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース３年生

10. 現地の言葉で話すということ

　　三枝　春菜　　人間学部宗教学科３年生

11. ホームステイ体験記

田中　元恵　　人間学部人間関係学科生涯教育専攻３年生

12. インドネシアの宗教

安藤　健太　　国際文化学部アジア学科中国語コース４年生

13. 音楽交流を通して感じたこと

石倉　護　　国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース４年生

14. たくさんの人に支えられて

逸崎　あずさ　国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース４年生

15. 感謝するということ

斉藤　貴子　　体育学部体育学科スポーツ学コース４年生

16.「絵本・ハルばあちゃんの手」教育者としてどのように読み聞かせするか

阪本　健太郎　文学部歴史文化学科歴史学専攻４年生

17. 絵本読み聞かせの工夫点

橋本　郁弥　　国際文化学部アジア学科中国語コース４年生

18. 日本のこどもたちに伝えたいこと

原田　亜紗美　体育学部体育学科スポーツ学コース４年生

19.『変化』と『継続』の国際協力

渡部　京介　　国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科英米語コース４年生

IPP

2010
K-WFG

インドネシアの環境と現実
～なんでゴミすぐほるん？～

上田千穂[19]

「インドネシアではなぜごみを躊躇なく捨てることが出来るのか」この点について考えてみる。

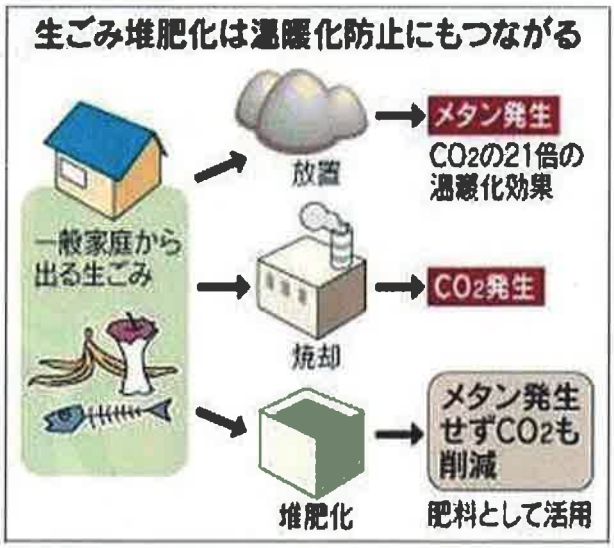
国際問題の１つに「ゴミ問題」がある。今回私はインドネイアへ行き、現地ではゴミをどのように処理しているのかを知った。

まず、インドネシアで見てきたことだが、現地に入る前から「ゴミをどこにでもほる」と聞いていた。だがそれは、バナナの皮、やしの殻などのことだけについて言っているのだと考えていた。現地に行って驚かされた。飴の包み紙などお菓子の袋に止まらず、ペットボトルの容器など、さらには海に向かって遠くまで投げるから見ていてと言わんばかりに捨てていることに現地の子供たちは何も感じてなどいなかった。ホームステイ先の母も「そこらへんに捨てなさい」と外の空地を指した。日本に帰ってから眺めていた写真の中にも、子供たちをとっていた写真の背景にはゴミがあった。また、ニアスではゴミ処理もしていた。だがそれは燃えるゴミもプラスチックも一緒くたに燃やすということ。しかしまだ私は小さな島だからゴミに対する認識が薄いんだと考えていた。違っていた。インドネシアのスマトラ島の大学から通訳のためにニアスに来ていた大学生が平気な顔でペットボトルのキャップをカバーしていたビニールを教室の床に投げ捨てたのだ。

日本に帰ってから、私はこれらのことが気になるようになっていった。そこでインターネットで調べていくと「コンポストの利用」や「ゴミ銀行」が実際インドネシアでされているゴミ対策だと挙げられていた。しかし、それだけではないはずだと思い、今回ニアスへのプロジェクトにも参加された高藤洋子さんとメールをする中で「日本でもできる活動」を知った。それらを順に挙げていこうと思う。

１．コンポストの利用

インドネシアに行き、生ごみの山を見た高倉弘二という人が、コンポストを利用することでそのまま捨てられてきた生ごみを土、肥料に変え、かつて見たごみ山を消したそうだ。では、コンポストの利用で挙げられる利点とは【図１】のように放置するならメタンから来る異臭が、焼却するならCO2（二酸化炭素）の増大につながる。しかし、コンポストを利用することにより、それら害にしかならなかったものが堆肥という植物にもためになるものに変わっていくという点だ。



【図１】コンポストの利点

もちろん、日本とインドネシアでは環境も違うことからコンポスト内に入れる微生物が育つか、また輸入した微生物がインドネシアの生態系にどう影響を与えるかなどが問題として取り上げられた。コンポストの値段についても日本円では

[19] 国際学部地域文化学科（タイ語）１年生

800 円ほどだがインドネシアでは 800 円も高価なもので受けいれられるまで時間がかかった。しかし、今ではスラバヤという地域で 3 万個も普及されている。

２．ゴミ銀行

インドネシアのジョクジャカルタという市で行われている市民のアイディアで、ゴミを『The Jakarta Post』というところへ持っていくと、通帳に持ち込んだゴミの種類、量に比例してお金がたまるというシステムの銀行、いわゆる『ゴミ銀行』が１店舗ある。仲介業者によるゴミの買い取り価格は以下のとおりだ。

新聞紙：1 キロ当たり
800 ルピア（約 8 円）～1000 ルピア（約 10 円）
プラスチック：1 キロ当たり
約 250 ルピア（約 2.5 円）
白色紙：1 キロ当たり
2400 ルピア（約 24 円）
大型のケチャップなどのガラスのビン：
100 ルピア（約 1 円）
小型のビン：　50 ルピア（約 0.5 円）
スナック菓子のビニール袋や洗剤容器：
1 つ当たり　15 ルピア（約 0.15 円）

発泡スチロールは、業者には売らず、ゴミ銀行のボランティアが砂やセメントと混ぜ合わせて、旗竿用の台座の原料として使用する。ボランティアはスナック菓子 の包装や洗剤のプラスチック容器を使って財布やハンドバッグ、ノート型パソコンを入れるためのカバンといった工芸品を作り、1 万ルピア（約 100 円）から 4 万 5000 ルピア（約 450 円）といった価格で販売する。デザインは自分たちで考えているそうだ。

３．日本で出来る活動

『日本におけるゴミ分別のしかたを教えること』これは日本で出来る活動の１つだ。実際にアジアから来日しておられた方で、自国に戻られてからゴミ分別を村に持ち帰ったところ、村のゴミが減り、きれいになったとの報告もあったそうだ。

この活動の始まりは日本に住んでおられるインドネシア人に通訳、生活サポートのボランティアで、地域に住む在外外国人が日本での生活に 困らないよう、また地域の皆さんが外国の方々を受け入れ、お互いが気持ちよく 暮らせるよう、多文化共生社会を築くためのボランティア活動だそうだ。そのひとつにゴミ出しルールの説明会がある。アジアの他の国から来日された方々は、日本の徹底したゴミ出しルールに驚き、感心するとともにその細かさに困る方が多いとのこと。ゴミ出しルール説明会では、その問題を少しでも解決できるよう、ゴミを出す日にごみ箱をひっくり返して分別するのではなく、最初から分けておけばよい、ということや写真のように絵でそれぞれのごみを分別すれば、日本語がまだ分からない方々にも一目瞭然だということを提案しています。（図２）はあらかじめ分別できるよう作られたゴミ箱だ。

以上３つを調べていくうちに、「インドネシアではなぜごみを躊躇なく捨てることが出来るのか」という質問に１つの考えが浮かんだ。それは、これまでのインドネシア人の生活で出てきていたごみは自然に帰るものだったのではないかということだ。それが今ではゴミとして捨てられるものの多くが自然に帰ることのないプラスチックや発泡スチロールといったものに変わっていっている。つまり、早すぎる経済成長に市民がついていけるような対策もなしに輸出してしまった先進国側に問題があったのかもしれない。そして、この問題を現地の人にだけに任せてしまうのも無責任だ。実際に何をすることがもっともよい解

決策となるか、今回挙げた３例をみてもわからない。現地に行って直接生ごみの処理の仕方を指導するのも必要だし、「ごみ銀行」のような地域のアイディアから始まることも魅力的だ。また日本がアジアでゴミ分別収集方法やリサイクルの技術はとても高いレベルにあることから、講習を受けた人の中の１，２人が自国に持ち帰ってそれが成功する、その成功の報告を聞くほど嬉しいこともないだろう。それでも、最終的に気づいて行動しなくてはいけないのも現地に暮らす人たちだ。そして、地域によって、同じやり方でも成功するところもあれば失敗することもあるだろう。だからこそ『地域密着型』のごみ対策を模索する必要がある。

背景を知るということ

栄春奈[20]

はじめに

今回、「国際参加プロジェクト」でインドネシアという国でボランティアをさせていただいたのですが、海外でボランティアをするにあたって、その国のその地域について知らないと自分たちがうまく動けないと思った。また、今回インドネシアという国に行ってみて、インドネシアの人たちにとって「日本」という国の存在の大きさがうかがえた。昔から日本とインドネシアは深い関係にあるといわれているが、私たち日本人はインドネシアについて知らなさすぎるのではないかと思った。

1.　甘い紅茶

ニアス島での活動期間中は、ホームステイをさせていただいたのですが、初めて家に行ったときにすごく甘い紅茶がでてきた。紅茶というよりも砂糖の味しかしなくて、ほとんどの残してしまった。次の日先生に聞いたところ、昔からの風習で砂糖をたくさん入れることが、その家はけちではないということを表すそうだ。もし、それを知っていたなら、ホストファミリーの好意だと思い残さなかったのにと思った。

2.　独立記念日

活動の拠点であったニアス島ではかんじられなかったが、活動期間の数日後がインドネシアが日本から独立した日であり、メダンではインドネシアの国旗がいたるところにかかげてあった。独立記念日間近ということもあり、盛り上がっているような雰囲気もただよっていたが、私たち日本人にも優しく接してくれて、インドネシアの人たちの人柄の良さがうかがえた。

3.　インドネシアと日本の関係

インドネシアに行ってみて、日本製品の多さや、北スマトラ大学と交流会をした時も日本語を学んでいる日本語学科の生徒の多さに、「日本」という国の存在の大きさがうかがえた。また、天理大学にも設立当時からインドネシア語学科があるということは、日本とインドネシアが深い関係にあったということがうかがえる。

（1）　歴史

第二次世界大戦中、燃料の獲得を目的に日本軍

[20] 国際学部地域文化学科（インドネシア語）１年生

はマレー半島に上陸し、大東亜共栄圏としてインドネシアの独立を約束し、タイを除く東南アジア地域一帯を植民地とする。占領中は日本化政策がとられる。現在も残るものとして「隣組」と呼ばれる町内会みたいなものや、インドネシア国軍のはじまりとされる、軍事教練や兵補などである。第二次世界大戦に敗戦後も残留した一部の日本兵は、インドネシア人とともに対オランダ戦争にも参加した。戦後賠償として、賠償という名の下、建物、デパート、橋などを援助した。その時、多くの日本企業が参入した。また、2000年までODAの日本最大の投資国はインドネシアであった。

（2）経済関係

2006年の外務省のデータによると571社の日本企業がインドネシアで活動しており、有名な企業として、トヨタ自動車、ホンダ技研、三菱自工、松下電器産業、日清食品、花王などがあげられる。逆に、インドネシアからの輸入品とし天然ガス、石油、最近では食料品や衣料品も増えてきている。インドネシアは日本にとっての最大のエネルギー供給国である。

（3）インドネシアからみた日本

日本・日本人のイメージとして、先進国、まじめ、礼儀正しい、ワーカーホリック、自由(若者のファッションなど)があげられる。またインドネシアでは、中学校高校の教科書における日本関係の記述がたくさんあり、インドネシア人は一般に日本のことを比較的よく知っており、日本語学習をはじめ日本に対する関心が高い。

（4）これから

最近話題になっている、看護師や介護士の不足を外国の人たちから補う政策で日本はインドネシアと協定を結んでおり、これからも日本とインドネシアは深い関係が続いていくだろう。日本にとってインドネシアという国の力が必要になってくるだろう。

（5）　まとめ・感想

現地のことを知るということは、現地の文化、人々を知り、よりよい活動の手助けになるのではないか、と考える。自分が生活している場所との違いを知り、考え、実際に現地に行ってみて初めて、異文化理解が深まるということを、今回インドネシアに行ってみて改めて実感した。背景を知るということは、海外でのボランティアの基本であり、重要なポイントだと考える。日本に帰ってきて、ニアス島での活動のことやメダンでの交流会のことを思い出すと、もっとうまく活動ができたのではないか、うまく過ごすことができたのではないかと、少しばかり後悔が残っているが、今回うまくできなかったことが次の活動につながることを願っている。異文化を理解することは、相手のことを相手の立場になって考えることもふくまれる。相手のことを受け入れる、受け止める、活動をする場所(今回はインドネシア)の生活に身をまかせてみる。インドネシアと日本の関係の背景をふまえて今回の活動をふりかえってみると、インドネシアの人たちの心の広さに、おおらかな人柄に、太陽のようなまぶしい笑顔にすごく助けられた活動であった。

教育が子供たちを救う

滝まどか[21]

はじめに

私達の泊まったホテルの周りには物乞いをする子どもがいた。インドネシアが貧しい国という印象がなかったので、そのような光景に出くわすとは思っていなかった。今回の活動で私たちがしてきた「情操教育」は、子ども達にどんな効果をもたらすのか、貧困と教育の観点から今後の私なりの国際協力について考えていきたい。

① 物乞いをする子どもとの出会い

メダンのホテルから物乞いをする３人の少年が目に入った。外はもう真っ暗だったのを覚えて

[21] 国際学部地域文化学科（フランス語）１年生

いる。日本では家で、ゆっくりテレビを見ている時間だろう。こんな時間に子どもが外で物乞いをしているなんて信じられなかった。しかもメダンの道路は大量の車とバイクで荒れていてとても危険だった。日本がとても平和だと改めて思った。この子達は一日学校へも行かずに物乞いをして過ごしているのだろう。バスの窓越しに私に向かって手を差し出してきた少年の瞳はとても暗かった。私はどうしてあげたらいいのか分からず、目をそらしてしまった。

② 物乞いをする子どもの背景

私がメダンで見た物乞いは小学生くらいの子どもだった。物乞いの背景には、本当に家が貧しくて止むを得ない場合と、やくざのような親分が取りまとめていて、子ども達を使ってお金を稼いでいる場合があることが調べて分かった。しかも、一日に稼がなくてはいけない額が決まっていて、その額に満たないとひどくお仕置きをされる。どうしても生活に困って物乞いをしている人ばかりではなく、働くよりも収入がいいからといって物乞いにはしる人もいるのだそうだ。家出をしてそのままやくざに捕まってしまった子どももいるのだとか…。日本では児童に対する福祉が充実しているからそのような危険なことから子ども達は守られている。しかし、インドネシアでは、児童に対する福祉がまだ充実されていない。物乞いをして育った子ども達の将来はどうなってしまうのか。

③ 情操教育の大切さ

学校へ行けなくて育った大人は、危険で搾取されやすい、労働条件の悪い仕事に就くことが多い。そこで働き手が負傷してしまえば、家族を養うことがままならなくなり、またその子どもも学校へ行けなくなる。発展途上国ではそのような悪循環が続いてなかなか貧困から抜け出せない。教育をしっかり受けられれば知識や技能がきちんと身に付き、より安全で安定した収入が得られる職に就くことができる。それだけに限らず、学校という場では、「情操教育」を学ぶことができる。「情操教育」とは、「創造的・批判的な心情、積極的・自主的な態度、豊かな感受性と自己表現を育てることを目的とした教育」という意味である。私達は小学校・中学校と、ただ勉強をして知識を身につけてきただけではなく、人として大事なことを知らないうちに身につけていたことに気付かされた。私達がニアスで実際にしてきた絵本の読み聞かせでは、子ども達に想像力を持たせることが出来たかもしれない。あるいは、新しい発想の手助けになったかもしれない。紙芝居では、実際に災害から身を守るための知識を教えてきた。万が一同じ災害が起きたときに、紙芝居で学んだ知識を生かせたら、私たちの活動が命を救ったことになる。学校で教育を受けられないということは、生・死をも左右させるものだと思った。

モアウォ小学校の子ども達の笑顔はとても眩しかった。有り余る程の元気だった。メダンで見た少年のような暗い瞳をした子はいなかった。子どもには学校へ行ってのびのびと遊んで、勉強して、子どもらしく無邪気でいてほしいと思った。

④ 発展途上国の現状

ユネスコの2000年の統計によると、世界では、学校に通えない6歳～11歳の子どもは約1億1300万人もおり、15歳以上の成人で読み書きのできない人は約8億8400万人と言われている。現在では、貧困のサイクルを断ち切るためには教育は重要な鍵であり、全ての人の基本的人権であると世界的に認識されている。しかし、教育は長い目でみないと結果が表れてこないことから、短期的に、成果を求める医療に関しての対策が優先されてしまう。教育の発展なしには政治の進展や、社会経済の開発は期待できないのに、この悪循環からなかなか抜け出せないでいる。アフリカなどの貧困の激しい発展途上国では、例え学校に行けたとしても、学校の設備があまり良い状態ではなく、先生は多すぎる生徒の指導に疲れ、授業を進行させるために厳しい規則や、体罰を与える。授業では、普段使っている言葉とは違う言葉が使われ、質問もできず、暗記ばかりの退屈な授業。勉強に集中することができず、欠席も多くなってしまう。ついには基礎学力をつけることができないまま学校を辞め、安い賃金で働き始める。この子達が成長して家庭を持っても、貧しいまま。自分の子どもに学校に行かせることもできない。こんな悪循環の中に暮らす人もいるのだ。

⑤　ストリートチルドレンへの教育の支援

私が調べたあるNGOでは学校へ行けない子ども達に対して様々な支援を行っている。例えば、施設で寝泊りさせ、そこから通信の学校に通っている子どももいる。それはあくまでも、子ども達の希望が最優先とされ、決して強制されない。NGOの職員は教育に限らず、衛生面や、性感染症、路上生活で伴う危険についても子ども達に教えている。NGOの支援によって将来の目標を見つけ、勉学に励もうと頑張ろうと思っている子どもは増えた。しかし、勉強をする姿勢が身についていなくて集中することができなかったり、路上生活の中で幼い頃からの薬の使用で、頭が柔軟に働かないなどの問題もある。また、通信を卒業して大学に上がっても、周りより劣っていると自分にコンプレックスを持って耐えられずに、また路上にもどってしまうことも少なくない。そのような子ども達の心のケアも必要となってくる。まだまだ解決されない問題がたくさんある。

まとめ

日本のような小さい島国がアメリカと対等に先進国に並べるのは、昔の日本人がとても勤勉だったからだ。勉強することによって新たな発明をし、それが海外でも必要とされたから日本の産業が発展した。そう考えると、教育は豊かな国を作るためにとても重要だということが分かる。あの有名なマザーテレサも「教育は貧困を抜け出す第一歩になる」という言葉を残している。だからといってむやみに教育を導入するのではなく、その地域にあった教育を考えていくべきである。日本では、全ての子どもが教育を受けられる権利がある。家計の厳しい家庭には国が何らかの形で守ってくれる。ストリートチルドレンの将来はどうなるのか、教育を受ける機会を大人から奪われてしまっている。このままずっと社会から排除されて一生を過ごすのか。それはあまりにも無謀である。わたしは今回の活動を通して学校へ行くこと、教育の大切さが分かった。学校へ行けるということが当たり前だけど大切だということに気付くことができた。いつか世界の子ども達がみんな自分達の生活のこと、お金のことを考えずに学校へ行けること、子どもらしく無邪気に笑って過ごす日が来る事を願っている。

私たちは何を残してこれたのか？

吉森　祥平[22]

私が「国際参加プロジェクト」に参加しようと思ったのは、私は将来国際協力関係の仕事に就こうと考えており、今まで国際協力なんて一度もしたことがなかったので、将来の為の第一歩として

[22] 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科
フランス語コース2年生

このプロジェクトに参加してみようと決意し、参加した。

私は絵本班になり絵本の読み聞かせをすることになったのだが、絵本の読み聞かせなど今まで一度もしたことがなかったので、「絵本の読み聞かせなんて誰でもできる」と舐めていた部分があり、インドネシアに行くまでの間あまり練習していなかった。おそらく一番練習していなかったんだと思う。インドネシアに着いたら初海外だということもあり、いろんな事が衝撃的で絵本の読み聞かせをするということ自体イスラムの寄宿所に着くまで忘れていた。イスラムの寄宿所で読み聞かせをすることになり、読み聞かせている時に子供たちの様子を眺めてみると、食べ物を食べていたり、話していたり、横向いていたりと集中して聞いてくれている子供が非常に少ないのが印象的だった。どうすれば、子供たちは周りに気を取られず絵本だけに集中してくれるのだろうか、と考えたが、答えが見るからなまま二アスで絵本の読み聞かせをする日になってしまった。

初日の二アスでの読み聞かせは、イスラムの寄宿所でと比べるとあまり変わらない結果に終わり、活動終了時に反省とこれからどうすればいいのかを話し合い、ようやく自分の中でどうすればよいのか道筋が見えてきた。二日目、三日目と日がたつごとに少しずつ絵本の読み聞かせかたが進歩していき、上手な人と比べればまだまだだが、最終日には初日とは比べられないほど上達し、帰国した。

情操教育の難しさ

帰国後、関本先生から「僕たちがしてきたのは情操教育だよ」、と教えられ、「情操教育？」となったので、情操教育と言う言葉について調べてみようと思い情操教育について調べてみることにした。

情操教育について調べれば調べるほど疑問が浮かんできた。それは、「私たちが二アスでしてきたことは情操教育になるのだろうか？絵本の読み聞かせは成功だったと言えるのか？」である。情操教育は「情操の豊かで健全な育成を目的とする教育」と辞書に載っている。「情操の豊かで健全な育成」をできたかどうかなど、わかりはしない。そこに情操教育の難しさがあると思う。自分は正しいことをしたのかさえわからない。私は絵本の「どろんこハリー」の読み聞かせをした。「どろんこハリー」は、お風呂が大嫌いな犬がお風呂に入れさせられようとするときに逃げ出し、遊んで泥だらけになり、家に帰っても家族が自分のことをハリーとわかってもらえず、わかってもらうため努力するというお話だ。このお話を聞いたからといって何か変わるとも言えないし、変わらないとも言えない。

また、地震と津波についての紙芝居は、いざ地震や津波が起こったときに紙芝居で教えた通り

に行動できれば成功だといえる。が、それ以外の紙芝居や絵本の読み聞かせは成功か失敗かがわからないので、情操教育は成功・失敗の判断も難しいと思う。

活動を振り返りこれから・・・・

この活動全体を振り返り、私自身はうまくできなかったと思う。ホームステイ先の家族とコミュニケーションがとれず泣きそうになったこともあったし、絵本の読み聞かせは反省と後悔の連続だった。しかし、学ばせてもらったことがあまりに多く、うまくできなかったが参加してみて人として成長できたと思う。多くの人の支援があったからこそ活動を無事に終わらせることができたので、支援してくれた人に報いるためにも、今回得たことを、将来、そして今日から生かせていく。

「国際参加プロジェクト」に参加した人、先生たち、影で支えてくれた人、私の知らないところで協力してくれた人、本当にありがとうございました。

手紙で始まる国際協力

上田彩加[23]

私は「国際参加プロジェクト」に参加した際、以前参加したメンバー（2007、2008年の参加者）からニアス島に住むホストファミリー宛の手紙や写真を預かり、渡した。

まず私のホストファミリーに、預かった写真を見せて、彼らを知っているかどうかきいてみた。全員のことを知っていて、近辺に住む人はほとんどお互いが顔見知りだという。村人同士の距離の近さに、ひとつの地域としての意識やインドネシア人の人柄の良さを感じた。どこに住む誰であるかを優しく教えてくれて、配達の際にはホストシスターが同行してくれた。引越ししている家庭などもあり、なかなか順調に手紙配達が出来なかったが、ホストファミリーがその家までバイクで連れて行ってくれたので、無事全ての手紙の配達ができた。

今回、手紙配達を行ったことで、ホストファミリー以外の現地の人々と交流ができ、私の交流範囲は広まったといえる。写真を見せると「○○は元気にしている？今何をしているの？」などインドネシア語で尋ねられ、メンバーの近状を心配している様子だった。手紙を渡すと喜ぶ顔が見ることができて、心が温かくなった。私の手紙配達は、何らかの意味を持っていたと思う。プロジェクトが終わった後であっても、「つながっている」という意識をお互いに持ってほしいと思った。そして自分も現地での活動が終わってから、そう感じたいと思ったからだ。

学校の校庭ではドッジボールで遊ぶ子ども達の姿が見られたことや、モアウォ小学校でのお別れ会で子どもたちが「大きな栗の木の下で」と「幸せなら手をたたこう」を歌ってくれて、以前の活動が継承されているのがよくわかった。また、今回自分たちが行った絵本読み聞かせ、地震・外国語についての知識が今後も子どもたちに継承し

[23] 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科
英米語コース3年生

て、役に立ててほしいと願う。

ただの交流に終わらせない、継続的な協力をしていきたい、というスピリットを持って現地インドネシアでの活動に挑んだ。そして、小学校では紙芝居や絵本を読むことで現地の子ども達に教育を行った。その中で築いた絆は、このような小さな個人レベルのつながりを確立・確認することは、国家間どうしの関係につながるのだろうか。この経験から、私は個人的なレベルから始まる交流について考えた。

自分がスポンサーとなり寄付という形で、支援プログラムを提供している団体を通じ、開発途上国の貧困の中に暮らす子ども達へ手紙を渡すボランティアがある。お互いの存在を確認し、支援を実感することができる。子ども達も温かいつながりを確認することができる。このような手紙を書くボランティアもあることから、手紙をもらって悲しむ人はいないといえるだろう。

私は自分が国際協力や国際交流をしたいと思った際には、国際協力に個人的な意見を持ち、自分からアクションを起こすことが大切であると思う。何かを始めることに意味があり、それらが身近に存在していることを知ってほしいと思う。考えること、続けることが私たちに今できることである。国家と国家、政府と民間の個人と個人の関係が、国際関係の改善につながる。個人的なつながり、個人レベルの信頼関係や交渉が発展するといえる。

身の回りの小さな奉仕が出来る人間になりたいと思う。外交関係修復の手段として、外交政策、戦略など政治的な言葉を聞くが、第一歩は小さな他者へ対する行為、一人一人の他者へ貢献する心、誠実な心であってほしいと思う。

しかし小さなことから始まる、という言葉はうたい文句として、さまざまな分野で聞く言葉であるが、それを国際協力に当てはめるのは違う、という意見もあるかもしれない。小さなものが集まって大きくなる、とイメージだけが選考した甘口の理想論であるかもしれない。しかし、相手はあくまでも「人」であり、技術・設備など、物質的な支援より、「人」として関ることのソフト面の機能の持続が国際協力を理解する上で大切だと思う。「人」同士で関わって築いた絆を大切にしたいと思う。交流とは、向き合うものがあってこそで、現地の人々の家にホームステイという形で家に滞在させていただいたことや、小学校での活動で出会った子供たち、協力しあった先生方、北スマトラ大学の学生など、本当にすべての出会いに感謝している。そして、その出会いを大切にし、関係を何らかの形で続いていけたらと思う。実際にインドネシアに赴き、現地の人々と関わることで、伝統的な価値観や考え方を尊重しあいながら協力していけるのはこの「国際参加プロジェクト」だからできたことだといえる。この参加することができて、本当に良い経験ができた。

インドネシアと日本との国家的なつながりは、政府や民間の個人と個人の関係から生まれる。一人一人の人間関係から始まる。「国際参加プロジェクト」が再度ニアス島で実施されること、または活動の継続を期待したい。また、今回確立した関係やつながりをどう守っていくのかは、個人の意識に委ねられているといえる。個人と個人の関係がつなぐ絆の大切さを知っていきたいと思う。日本へ帰ってから、ニアス島のホストファミリーにインドネシアでの写真を収めたアルバムと手紙を送った。すぐにホストシスターから手紙を受け取ったとメールが来て、そこには手紙の返答と「あなたとの出会いは宝物」という言葉が添えてあった。そんな風に、相手を思ってつながっていくのだと思う。

腸チフスになって良かったこと

悪かったこと

～病床で感じた家族の絆～

上田　裕太郎[24]

8月9日モアウォ小学校での絵本の読み聞かせの最終日、体調の変化を感じて寝込んでしまいそ

[24] 文学部国文学国語学科3年生

こからどんどん体がだるくなって動けなくなりました。そしてホストファミリーに先生を呼んでもらうように頼みました。この時は先生に見てもらって少し寝たら元気になるだろうと思っていたのでしたが、先生が来るまでに熱がでてきて目眩がして立っていられなくなりました。ホストファミリーみんなが僕の部屋に集まってきて心配そうに毛布をかけてくれたり手を握ったりしてくれました。僕はこの時家族にすごい迷惑をかけてしまっていると思い自分が情けなく感じました。すぐに先生が来てとりあえず、ホテルに行くことになりました。この日の夜、現地の兄弟と現地の兄弟とインドネシアの伝統武道のシラットを見に行く約束をしていたのでその約束を破ることになってしまいさらに自分が情けなく感じました。この時に兄弟は「また明日行こう。」と言ってくれたことがその時の僕をとても安心させてくれた一言でした。

そしてホテルについて明日元気になって約束を果たさないと、と思い薬を飲んで、体温をはかると 40 度と表示されていました。自分の体温をみて余計にしんどくなりました。その時にまずインフルエンザだと疑われ病院に行くことになりました、病院につくとすぐにベッドに運んでもらい先生が来て診察してくれるのを待ちました。隣では交通事故で運ばれてきた人が唸りながら寝かされていたので今日は近くで事故があって特に忙しいのかなと思って尋ねてみると毎日交通事故でたくさん人が運ばれてくると言っていたので驚きました。交通のマナーが日本ほど良くなく信号も多く設置されていないのが原因なのかなと感じました。また病院の数も少ないので僕が運ばれた病院は 24 時間あいていてやっぱり日本とは違うと感じました。しかし今考えるとそのおかげで自分も診察してもらえたということに気付きました。診察してもらいすぐにインフルエンザではなくおなかが張っているからおそらくサルモネラだろうと言われました。お腹を触っただけでこう言われたのでなんでそれだけで分かるのかなと半信半疑でした。この日ホテルに帰るとホストファミリーがバナナを届けてくれていて嬉しかったと同時に心配かけて申し訳ないなと思いました。

次の日もう一度病院に行き血液検査を受けることになりました。そしてこの日病名を宣告されました。腸チフスでした。初めて聞いた病気だったのでよくわからないけどとにかくしんどいというのが初めの感想でした。その日はホテルで昼食会が開かれており病院からかえってきて自分のホストファミリーの一番下の男の子が僕に気付いてきてくれたのがとても嬉しかったのを覚えています。しかしとにかくしんどかったので、あまり話も出来ませんでした。特にお腹がとても張っていて息苦しいのと熱と頭痛がひどかったので部屋で寝ることしかできませんでした。その日の夜病院から処方された薬が効いて少し体調が良くなったときにホームステイ先に戻り家族にお別れを言いに行きました。家族が荷物を整理してくれていて片付けもすぐに終わり少し話をしました。この時に現地のお母さんから泣きながら「ごめんね」と言われたことがなんだか申し訳なくて自分の方が心配をかけてしまい「ごめんなさい」と思っていましたがなにも言えませんでし

た。薬が効いていてもやはりいつもより身体はしんどくて、兄弟が泣いてくれているのをみても自分は出なかったことが悔しかったです。もっと言いたいことがあったのにと日本に帰ってきて思いました。

そしてニアスをでてメダンのホテルに戻り北スマトラ大学の交流会なども休ませてもらい休養をもらい日本に帰ってきました。日本に帰ってきてすぐに病院にいき腸チフスは最低二カ月通院しなければならないと言われました。そしてこのときはじめて腸チフスの説明を聞いて意外と大きな病気なのだなと、わかりました。腸チフスは東南アジア等の発展途上国で見られる感染症で汚染された水や食べ物等から感染し約1週間から2週間で発症する病気だと教えてもらいました。このときに日本で感染した疑いもあるといわれていましたが今の日本では国内で感染することの方が難しいと言われおそらくインドネシアでの感染だろうと診断されました。発症は個人で差があり3日〜4日で発症する人もいると言われました。そして一応食べるものには気をつけていたつもりなのですが感染してしまったので、おもいだすと幾つか思い当たることがありましいた。

まず一つに一度ホームステイ先の水をのんでしまったこと、次に現地の子どもからもらった木の実をたべたこと、家の中の衛生状況などが考えられました。私の家はニアスの中でも古い家で台所はかまどの用になっておりハエがとても飛んでいたのでハエを媒介にして感染したということが考えられます。気をつけていたつもりが出来ていなかったなとこの時反省と同時にそんな地域に家族が生活していることを知りとても心配になりました。

そして日本での通院が始まりました。最初のうちは週に一度病院に行き血液検査をしました。日本に帰ってきた時体重が59キロ（行く前は66キロだった）だったので少し血を抜かれるだけ倒れそうになりました。通院中に助かったことは、食べ物の制限がなかったことです。そんなに多くの食材は食べる気に成らなかったのは事実ですが、時間をかけてゆっくり食事をとることで食欲も徐々に回復して行き、10日程経つとほぼなんでも食べられるようになりました、でもさすがに揚げ物はまだのどを通らなかったです。また便の検査も何度か行い、チフス菌が検出されるかが確認され幸いチフス菌が発見されることはありませんでした。しかし菌が発見されなくて完全に治ったとは言えないと言われました最初の1カ月は抗生物質を処方されていましたが、残りの1カ月は薬をぬき、薬を飲まない状態でチフス菌が検出されるかを確認しました。この時もし検出されればまた初めから治療のやり直しになり、そこからまた2カ月通院しなくてはいけないと言われていましたが無事発見されずに済み、最後の通院が終わりました。治療は抗生物質を毎日飲むだけだったので楽に終わりました。

そしてしばらくして日本に家族からの手紙が届きました。内容は僕のからだを気遣ってくれていることや何時ニアスに戻ってくるかということ等が書かれていてほんとうに嬉しかったです。手紙の他にも手作りのネックレスやお守り絵等が入っていて離れていても繋がっていることを感じました。僕はホームステイを始めた当初はとても不安で「今日から家族だよ。」と言われていましたが。正直なところ自分はそうは思っていませんでした。でも日に日に生活するうちに仲良くなり自分が倒れた時に本当に心配してくれて少しずつ本当の家族の絆をかんじていきました。もし自分が病気になっていなかったらこのことには気付けていなかったかもしれません。そして文化や国籍などが違う人たちとも家族になれることを、身を持って感じました。

腸チフスが治った今だから言えることですがこの病気のおかげで色々な人に支えられていることを実感し日本とインドネシアという2つ家族というものができ自分の家族というものの定義が少し変わりました。家族は血のつながりと一緒にいる時間が大切だと思っていましたがそんなことは関係ないことに気付かされました。

栄養と料理
―ホームステイを通して―

大藤孝洋[25]

はじめに

私たち人間は、毎日食べ物を食べて生きている。食べるという事は世界共通の事であるが、食べるものは国によって異なってくる。そこで今回、インドネシアのニアス島でホームステイをさせてもらった間に食べた料理の種類や栄養を調べ、どのような生活を送っていたのかを報告したいと思う。

1．ニアス料理（ホームステイ先）と
　日本料理の特徴や違いを比べる

ニアス
- 毎食ご飯（お米）がでる
- 炭水化物が多い
- スプーンとフォークか素手で食べる
- 飲み物や果物は甘いものが多い
- 少し辛い食べ物が多い

⇕

日本
- ご飯（お米）中心の食事
- 料理のバランスがよい
- おはしを使ってたべるものが多い
- お椀をもって食べる
- 薄味が多い（特に関西）

2．ニアス料理の栄養と特徴について

- 炭水化物が多いため、エネルギーに変え力を出せる。
  → 結果、体力がつきやすいのである。
- 野菜が少ないため、ビタミンB1、B2、ビタミンC、ビタミンE、食物繊維などが不足してしまう。
  → 結果、病気になりやすくなってしまうのである。

【シリコンの葉、アヤムゴレン（チキン）】

【ラーメン】

【焼きそば】

食物繊維は人間の体を健康に保つために必ず必要であるが、野菜料理が少ないニアスでは、ど

[25] 国際文化学部アジア学科
韓国・朝鮮語コース３年生

のように食物繊維を取っていたのか？それは、アボガドジュースなどの栄養価の高い果物で補っていたと思われる。それと、シリコンの葉が頻繁に出たのでそれで食物繊維を取っていたと思われる。

- バナナやアボガドジュースはビタミンが多く含まれていてよい。
  → 結果、疲労回復につながるのである。
  先ほども述べたアボガドは、ギネスブックに載っており、世界で最も栄養価の高い果物と言われている。

３．ホームステイでの仰天ニュース

◆ アボガドジュース事件

私のホームステイ先のお母さんは、表情がとても豊かでテンションが高く、初日はそれについていけなかったが、２日目の小学校で紙芝居を終え家に帰るとアボガドジュースを用意してくれて、それを飲んでいる私にお母さんが「エナ！！」と大きなジェスチャー付きで言ってきたので私も頑張って「エナ！！」と返すと、それが好物と思われ、毎日アボガドジュースが出てきた。

◆ アリバナナ事件

私のホームステイ先では、たまにバナナが食後に出てきて食べていた。悲劇はホームステイ中盤に起きた。その日もいつも通りバナナを食べようと思いバナナの皮をめくると、アリがうじゃうじゃ動いていた。呆然としていた私に、お母さんはスプーンを持ってきて、アリを掃って食べなさいというジェスチャーをだされ、頑張ってアリを取り除き食べると、お母さんはジェスチャーでまたも「エナ！！」と聞いてきて、私も精一杯の「エナ！！」を返した。正直、味は普通のバナナだったが気持ちはすごく悪かった。でも、今思い返せば、こんな経験は現地でしか出来なかっただろうし、良い思い出になったと思う。

おわりに

私がホームステイを通して感じた事は、まず料理はお母さんとお姉さんが交代して作っていた点である。家事全般的に女性がしていた。そして、ご飯を食べる前には必ず神様に感謝をし、「アーメン」とお父さんが言っていた。お父さんが不在のときは息子が変わりに言っていた。ご飯を食べるとき、お父さんのみ素手で他はスプーンとフォークを使って食べていた。魚料理が多く肉料理はめったにでなかった。様々な事を感じることができ、初めてのホームステイを通して、家族の温かさや絆がすごくわかった。ホームステイをさせてもらえて本当に良かった。

【ホームステイ先の献立一覧】

大藤　孝洋

日時		名前	食材	味	コメント
8/4（火）	夜	ラーメン、ごはん	ラーメン・米	普通にうまい！	日本で食べるラーメンと同じ
8/5（木）	朝	焼きそば、ごはん	焼きそば、米	これもうまい！	そばめしを楽しめた
	昼	スープ魚、ごはん、バナナ	スープ、魚、米、バナナ	スープとごはんがあう	家庭の味！
	夜	ごはん、魚、野菜	米、魚、シリコンの葉	シリコンの葉は苦かったけど健康に良さそう	メニューが3品になった
8/6（金）	朝	焼きそば、ごはん	焼きそば、米	うまい！！	朝の定番なのか？
	昼	魚、ごはん、バナナ	魚、米、バナナ	魚がピリ辛でおいしい	昼の定番魚？
	夜	パーティー	チキン、スープ、米	マジうまい！！	たかさん家のファミリーとパーティーをした

8/7（土）	朝	ナシゴレン	ナシゴレン	ナシゴレンうまい～	また食べたいな
	昼	ごはん、スープ	米、スープ	スープがおいしかった	ピリ辛でうまい
	夜	米、アヤムゴレン、シリコンの葉	米、チキン、シリコンの葉、バナナ	チキンうまい	アリバナナだった
8/8（日）	朝	ごはん、タフ	米、とうふ	よかった	日本の豆腐とは硬さが違った
	昼	ラーメン、ごはん	ラーメン、米	しょうゆラーメンがうまかった	ラーメンと米が合う
	夜	魚、ごはん、パン、バナナ	魚、米、パン、バナナ	うまい！！	パン甘かった
8/9（月）	朝	ラーメン、ごはん、バナナ	ラーメン、米、バナナ	おいしい	ラーメンと米最高！
	昼	魚、ごはん	魚、米	アツアツごはんがおいしい	たぶんサンマだった
	夜	魚、ごはん	魚、米	定番の味	魚料理が最近多い
8/10（火）	朝	ごはん、タフ	米、とうふ	ピリ辛豆腐とごはんが合う	おいしかった～
	昼	パーティー	米、チキン、魚、など	うますぎる！！	色んな家族が集結してたのしかった
	夜	魚、ごはん	魚、米	家庭の味を今まで本当にありがとう	ホームステイラストごはん

紙芝居で防災教育

乙守　真喜[26]

私はインドネシアでの活動の一部である紙芝居をした。私が担当した紙芝居の内容は、地震・津波の仕組みとその対処法である。このことをインドネシアの子供たちの心により残るようにしたい。だが、子供はなかなか集中力がすぐに散乱してしまう。そのためには紙芝居のしかたを工夫し、子供たちを惹きつけることが大事である。そこで、回数を重ねるごとに工夫していった点とその結果を述べていこうと思う。

その前に、実際に行った内容を右の図とともに示したいと思う。まずは、地震の仕組みについての説明である。海の下に二つのプレートがありこれがぶつかり、はね上がる事で地震・津波がおこる、ということの説明。次に、地震・津波がおこったときにどうすればいいかを登場人物を用いて内容を進めていった。それが先生と生徒で、紙芝居の中の絵には出でこないのだが、読む人がなりきり会話する。その会話の中で子供たちに質問をし、どの答えが正解であるか答えてもらう。絵には三パターンの子供たちの絵をかいて、どれが正解か考えてもらった。

最後に、避難のしかたを実際に行った。まずは私たちが例を見せてから子供たちに行動してもらった。地震がおき、机の下に隠れ、地震が治まったら一列に並び、前の人の肩に手を置き、三つの合言葉を口にしながら、ドアから出ていく、という動作だ。

内容としてはざっとこんな感じである。

● 紙芝居の内容と進め方

そのなかで少しずつ工夫していった点を種類別にあげていく。

● 工夫した点

内容について

① 会話形式＋クイズ形式

② クイズを三択にする

③ 合言葉

「押さない・走らない・しゃべらない」

子どもたちの理解を促進するために

① 三択で色別に分ける→赤・青・緑で絵に見分けをして分かりやすくする。

② 子供たちの目を見て問いかける。

③ 今絵の中の誰がしゃべっているか指を指す

[26] 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科
フランス語コース３年生

場所

教室の中の黒板の前から隅の方へ移動

行動

一回、自分たちが前に出て例を見せ　　る。「机の下に隠れる」⇒「しゃべらない」⇒「前の人の肩に手を置いて一列に並ぶ」⇒「建物からでるの動作」を一つ一つ確認して進める。

内容点において、①番目は会話形式にクイズ形式も加えたことだ。こうすることで聞いている子供たちも一緒に考え、紙芝居に集中してもらう。

②番目はクイズを三択にすること。これは正解も含め、これはやってはいけないと間違いも理解してもらうためである。

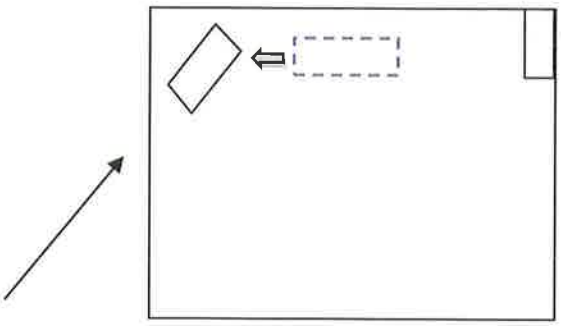
番目は、「押さない・走らない・喋らない」の三つの合言葉を使い、復唱しやすくしたこと。そして実際に避難してもらう時に、繰り返し口にしてもらうことでより頭に残り易くする。実際に子供たちみんな声を揃えて復唱してくれた。

次は内容の他に促進するために工夫した点だ。①番目はクイズを出している時、三択の絵の子供の服の色を赤・青・緑にし、見やすくしたことである。この時に、「どの色の服を着た子が正解かな？」と聞いて返って来る答えが色なのでこちらも分かりやすい。そして、その絵を見た子供たちが各々に赤！や青、緑と口にしていたので考えてくれているのだなと思った。

②番目は子供たちに問いかけてみることである。台本には、「みんな分かったかなー？」と聞くところがある。最初は本当にその部分を読むだけだった。なので、子供たちの反応も返ってこない。次から子供たちの目を見て聞き、なおかつ間を置いてみると返事が返ってきた。

③番目は紙芝居の絵の誰が喋っているか指をさしながら話すということ。このことにより、絵の中の誰が喋っているのかということが分かりやすくなる。そして、私たちの手を動かすことで手に注目がいき、紙芝居に集中させる。実行してみたら、自分が指示すところに子供たちの目が行っていることに気付いた。

次は場所の工夫点である。最初は図の中の真ん中にある黒板の前に台を置き、そこで読んでいたのだが、右のドア、左の窓から違うクラスの子供たちが出入りをして聞いている子供たちの集中の妨げになった。そして場所を左の隅に変えた。そのことにより右のドアから入って来る子供たちが聞いている子供たちには見えないし、左の窓から入って来る子供たちからは紙芝居が見えない。それプラス、集まる形が扇形になり広がらないので紙芝居が見やすくなる。



最後は、紙芝居で習ったことを実際に行動に移してみることだ。体を動かすことでより覚えられるはずだ。私たちが前にでて例を見せ、それから次に子供たちも実行するという形をとった。

そしてその行動が、地震が起きた時の状況を作る。机をガタガタと動かして似た感じを作った。そして机の下に隠れる。子供たちは楽しそうにするのでおしゃべりが多かったが、口の前に人さし指をあてて静かにする動作をしたらみんな黙った。そして一列に並んで前の人の肩に両手を置き、三つの合言葉を口にしながら歩いて部屋から出て行った。一つ一つできているか確認しながらしたので確実なものにすることができたと思う。

最後に

結果としては、良かったのではないかと思う。何回も読み聞かせ、繰り返していくうちに工夫も増え、子供たちを惹きつけられたはずだ。紙芝居を見る目が違ったからだ。しかしこれが本当かどうか勝手に決め付けてはいけない気はするが、私はそう感じられた。この活動が成功した・してない関係なく、少しでも多くの子供たちに地震の内

容が頭に残ればと思う。

今回、私たちが子供たちに教育という形でインドネシアへ行ったが、こっちも学んだことがある。それは紙芝居というものは読むだけではないということ。最初は台本を読むだけだったが、子供たちの目を見て話すことで聞いてくれているのだという事が実感できた。質問の問いかけに対してもみんなそれぞれ口にし、答えてくれて子供たちの素直さを確認できた。その素直さが私にとってとても嬉しいものであった。

ホームステイを上手くすごせる説明書 in Indonesia ニアス島編

苅安健太郎[27]

私が今回このプロジェクトに参加したのは、自分にとって今年が「チャレンジ」の年と決めて参加した。これまでの大学生活は本当に決まったことだけをして何の変化もなく何の感激、悲しみ、刺激もない本当に内容もない生活でした。そんな自分を変えたくて今年を自分にとっての節目であり「チャレンジ」の年と決めたそんなときにこのプロジェクトを意識した。ただ自分を変えたくて、人としてさらに大きくなるために、海外に行きたくて、このような気持ちで参加したプロジェ

クト。初めて踏み入れる新しい土地、確かに不安と希望に満ちていた。しかし、その地インドネシアについた時点でこのプロジェクトは始動していて、ついたその数時間後にはホームステイをしていた。本当に後悔をした初日であった。なぜなら言語も通じない家族は多すぎるなどの多々の問題、不安があった。その不安は一日で吹き飛んだ。なぜなら本当にこの二アス島のファミリーや人々はいい人たちだったからである。

ここで私はプロジェクトメンバーによるアンケートを実施した。アンケート内容にそって説明したいと思う。アンケート内容は以下である。

1　便利でよく使った単語は
2　ホームステイで困ったこと、その解決方法は
3　コミュニケーションのコツ
4　ホームステイで気をつけたことは
5　日本から持っていってよかったもの
6　どのようにして家族に溶け込んだのか
7　ホストファミリーに１番喜んでもらったことは

[27] 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科
英米語コース３年生

８　ホームステイで得られたこと、教訓
９　ホームステイで人としてどのように
　　変化したのか
１０　もし自分がホストファミリーになったら

以上の 10 の質問をしたところなかなかためになる結果となった。

１　便利でよく使った単語は

インドネシア語	日本語	インドネシア語	日本語
エナ	うまい	パナス	暑い
マカン	食べる	ティダ アパアパ	大丈夫
ナンティ	後で	ヤホーヴ	挨拶
ジャラン ジャラン	散歩	トゥリマカシ	ありが とう
ラギ	もう一度		

この表から見てわかるように本当にひとつの単語だけで通じてそして会話ができると感じました。エナという言葉は食事のたびに連呼するとホストマザー（イヴ）はとても喜びそれだけで少しずつですが絆ができていきました。パナスやマカン、ラギ、ナンティなどは日常の会話でとても効果的で本当に頻繁に使える単語です。ジャランジャランは家族以外の人たちとの場にもなるので、毎日のように行けば島民すべての人たちと交流ができます。トゥリマカシはどこでも通じる単語で本当にありがとうという言葉だけで知らない人や知っているすべての人たちとつながることができ幸せになれるとても大切な言葉です。この表の言葉だけでは会話は成り立ちませんが自分が思うに一応これらの単語だけでも生活はできると思います。

２　ホームステイで困ったこと、その解決方法ではメンバーそれぞれの経験が書いてあり驚くべきものも中にあった、食事が体にあわないので「小食です」というと、気の利いたインドネシアの母も食事を少なめにしてくれるそうです。特にこのホームステイで困ったのがやはり言葉という大きな壁であった。メンバー全員がインドネシア語初心者とあり、会話や思っている本当の気持ちが伝わらず多くのメンバーが困ったという。この言語という大きな壁はどこの国にいっても起きるものである。メンバーの解決方法ではやはりジェスチャーを使いとことん会話したら通じるという積極性が大事という答えが多かった。他には先生から支給された「指差し会話帳」が大きく反響をよび、帰る頃には本がボロボロになるというほどであった。そして各々それぞれの解決法があり、見ているだけで勉強になりました。

３　コミュニケーションのコツ、コミュニケーションができるかできないかで現地での時間の過ごし方が変化し、うまくいくと、とても有意義な時間を過ごせます。多くの人がジェスチャー、ボディーランゲージ、笑顔、冗談、変な体の動きなどを使うことにより会話に流れや楽しみができしっかりとしたコミュニケーションができます。そして一番重要なことは会話でわかったフリをしないということである。フリをすることでその場や後々で絆という面でも大きな問題が生じるので、フリをせずわからないのならとことんコミュニケーションをすることを進めます。

４　ホームステイで気をつけたことでは、赤の他人としてではなく本当の家族として接することにより自分も相手も気構えせず本当の家族として過ごせることができます。しかし、しっかりとした節度を持って行動をしなくてはいけません。もし、行き過ぎた行動をするとインドネシアの人たちの持つ日本人というイメージが傷つくので節度があるが、その家族の一員という気持ちでホームステイを行いましょう。

５　日本から持っていってよかったものでは、これは本当に個人差がでるもので体の体調を安定するために必要なものや暑さ対策、自分なりの日本食、そして家族へのお土産である。体の体調を

安定するためにはアクエリアスやポカリの粉や冷えピタ、正露丸や風邪薬などが多かった。自分なりの日本食では日本のお菓子や梅干、味噌汁の素やおかゆなどが上げられる。家族のお土産ではお菓子やおもちゃ折り紙や折り紙の本などがあります。他には写真やティッシュ、ゴミ袋、「指差し会話帳」や変圧器、日本の家族など写真なども大いに活用されたそうです。

６　どのようにして家族に溶け込んだのか、まずは自分自身がホストファミリーに興味を持ち接する事が大事である。積極的にコミュニケーションをとったり、子供と遊んだり、

指差し会話帖でひたすら会話をしたり、歌を一緒に歌ったり、家の手伝いなどを一緒に行うことにより言語の壁もなくなり家族の中に溶け込むことができます。

７　ホストファミリーに１番喜んでもらったことでは、手料理したこと、自分がホームステイをしたことや、私という存在など本当にホストファミリーも生徒のこと喜んでくれるようです。

８　ホームステイで得られたことでは、積極的・自発的に行動することの大切さ、自己主張をはっきりと行う、何事も経験、感謝ということを忘れない、郷に入れば郷に従えなどメンバー全員が１つないしは２つは教訓を得て日本に帰ってこられています。

９　ホームステイのおかげで人としてどのように変化したのか、この質問では多くのメンバーが行く前と後では考え方や感じ方が変化していた。日本では当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかったと気づいたり、視野が広がったり「世界」という枠で物事を考えるようになった。さらに新しい世界に出て、さまざまな人たちと出会いたいなど本当にメンバー全員が人として２倍３倍以上に大きくなり成長したことがわかり、やはり海外に行くことは人というものを大きくするものである。

１０　もし自分がホストファミリーになったら、今回は自分たちがホストとなりどのようにするか今回の経験も踏まえて考えてもらった。自分が不自由だと感じたことを感じさせないように努力する、自分から話しかけ安心させる、日本語を教えてあげたり、日本の文化にどっぷりつからせたりなど、受身ではなくホストファミリーも積極的に行動しようとするのがみうけられた。

少しですがこれらのことを踏まえてインドネシア・ニアス島でのホームステイをすると快適で多くのことを得ることができ人として２・３倍以上になって帰ってくることができる。

現地の言葉で話すということ

三枝　春菜[28]

はじめに

私はモアウォ小学校の１・２年生を対象に『どろんこハリー』という絵本の読み聞かせを担当した。４日間にわたり行われたモアウォ小学校での教育支援活動および現地でのホームステイを通して、私は「現地の言葉で話すということ」にとても魅力を感じた。公用語ではなく、その土地の人々の言葉を用いて接することで、親近感が生まれ、現地の人々と親密な人間関係を築くことができ、より効果的な交流（特にモアウォ小学校においては教育支援活動の実施）に繋がるのである。

１．インドネシア語とニアス語

ここで、まずはインドネシア語とニアス語の成り立ちや特徴を簡単に紹介していく。

インドネシア語（Bahasa Indonesia）〈公用語〉は、インドネシアの島々を渡り歩くマレー商人たちが広めた交易語（リンガフランカ）であったマレー語の一方言を、国家の共通語としたものである。インドネシアは万を超える島々に、２億３千

[28] 人間学部宗教学科３年生

万人もの人々が住み、５８０以上の言葉（地方語）が話されているため、一つの民族の言葉を国語と定めるよりも、リンガフランカのマレー語のスマトラ方言をインドネシア語として定めたのである。

一方、ニアス語（Nias）〈方言〉は、オーストロネシア語族に属する言語で、話者はインドネシアのニアス島、バトゥ諸島に居住する。言語学分類的に北西スマトラ語に属し、話者数は約７７万人（２０００年）である。方言として、北部方言、中央方言、南部方言の３つがあり、私たちが滞在していたグヌンシトリはニアス島北部に位置するため、おそらく北部方言が話されていたであろうと考えられる。

２．ニアス語を使ったコミュニケーション

今回の「国際参加プロジェクト」の事前研修で、私はＯＢ・ＯＧの方々からニアス語である「ヤホーブ」（こんにちは）や「サオハグル」（ありがとう）などの簡単な挨拶を教わっていたため、現地の人々との会話でよく用いていたが、その他のニ

アス語はほとんど知らなかったため、基本的にホストファミリーも公用語であるインドネシア語で会話をしてくれていた。しかし、日が経つにつれてホストファミリーが「これはニアス語では～と言うんだよ」と教えてくれるようになり、私は教わったニアス語を積極的に会話の中に取り入れるようにした。すると、ホストファミリーや現地の人々はとても喜んでくれ、現地の人々と私の心の距離がぐっと縮まっていくのを感じ、とても感動した。このような体験から、「もしかすると私が学校で読み聞かせている絵本をニアス語に訳したら、子供たちも喜んでくれるかもしれない」と思い、ホームステイ先の姉弟に手伝ってもらいながら、絵本の現地語訳に取りかかった。

２．絵本を訳す前と訳した後の子どもたちの反応

私がニアス語に訳した絵本を生徒に読み聞かせることができたのは、モアウォ小学校で行われる活動の最終日に当たる、８月９日の僅か２回の授業のみであったが、公用語での読み聞かせの時とは異なる生徒たちの反応を確認することができた。

公用語での読み聞かせの初日は、子供たちの反応が薄く（私の練習不足が原因の一つであったと考えられるが）、ただじっと見ているという感じで、内容をちゃんと理解してくれたのか分からず、不安な気持ちが残る結果となった。その点は、毎回授業後の反省会で「ああした方がいい、こうした方がいい」と仲間にアドバイスをもらい、様々な工夫をこらすことで、回を重ねるごとにある程度改善することができたと思う。

一方、二アス語に訳した絵本の読み聞かせでは、単語・単語での生徒の反応に若干の違いが見られた。うなずいたり、笑ったり、私に続いてその単語を繰り返し発音するなど、生徒の集中力も高まって、絵本の世界に生徒を引き込めたという手応えを感じた。その中でも「ブルダンサ（インドネシア語でダンスという意味）」の二アス語「ファゾゲゾゲ」は特に反応が良かった。

しかし、結果的に二アス語に訳した絵本の方が良かったのかと言うと、一概にそうとも言えない。というのも、今回私達が絵本の読み聞かせの対象としたのは小学校１・２年生の生徒であったが、モアウォ小学校において、公用語であるインドネシア語の勉強が始まるのは２年生からであり、対象とした生徒達の少なくとも半数は、インドネシア語自体まだしっかりと理解できていないという事実が後に明らかとなったのである。また、二アス語においても分かるものと分からないものがあるようで、例えば「犬」という単語は二アス語では「アス」というのだが、生徒達はインドネシア語での「アンジン」の方が理解している様子であった。（私のホームステイ先にいた３才の女の子も、犬を指さして「アス」ではなく「アンジン」と言っていた。）私が絵本の現地語訳を手伝ってもらったホームステイ先の姉弟は１６歳と１１歳の子だったので、高学年くらいの生徒に読み聞かせをしたら、二アス語訳でも十分理解できたかもしれない。

おわりに

以上のように、二アス語訳の絵本の読み聞かせについては様々な問題を残したまま、活動は終わりを迎えてしまったのだが、異文化理解において「現地の言葉で話すということ」の重要性や魅力、それが生み出す人間関係における効果など、私が学び得た物は大変多く、そのきっかけを与えてくれ、また力を貸してくれたホストファミリーにはとても感謝している。

ホームステイ体験記

田中元恵[29]

2010年夏、インドネシアのニアス島での初めてのホームステイは驚きと涙いっぱいのものであった。何度振り返っても記憶に残る体験記である。

ホストファミリーとの対面、不安

「国際参加プロジェクト」3日目に活動拠点となるニアス島へ到着し、モアウォ小学校でＰＴＡ

[29] 人間学部人間関係学科生涯教育専攻３年生

のホストファミリーの方達との顔合わせがあってからすぐに私達はそれぞれの家へ連れて帰られることになった。何もわからないまま母（イブ）にバイクで自宅まで送ってもらったのだが、まず、あまり英語がわからないイブと私、それからインドネシア語ももちろん会話できるわけもなく、コミュニケーションが困難であった。何より心配になったのはニアスに着いてからからトイレに行きたい時が来ることだった。どうすればよいか先に聞いておく必要があったので、案内してもらうと「ここがトイレだけど壊れていて使えないからここでいいよ」と排水溝をゆびさされてしまった。トイレに行かずに一週間過ごすことはできないので、驚いて泣きそうだった。不安すぎて日本に帰りたくなった。そこで先生に電話をかけたいと頼んで携帯電話を貸してもらったがかけ方か番号が違うのか、かけることができなかった。さらに不安になって涙が出た。晩ごはんを食べるように勧められたが他の家族は誰も一緒には食べようとしないので気まずかった。テレビもラジオも会話もなく家の中はシーンとしていた。私が相当困った顔をしていたのであろう。家族は「寝ていいよ」とベッドへ案内してくれた。そこでまた驚いたのは、フラットなベッドに姉妹と私の３人が寝るということだった。今日初めて会った家族に両隣挟まれて寝ることに驚いた。早く明日になって他のメンバーに会いたかったし様子を知りたかった。

眠れたのかどうか自分でもわからないまま午前五時、朝食の準備を始めた姉（ヤンティ）にマンディＯＫしてもらって汗を流した。水は研修の話より見た目は大丈夫だったので抵抗なかった。朝食を食べて学校へ行く準備をしたものの行き方もわからなかったが、イブが「まだ早い」というからとにかく待って、制服に着替えたイブと家を出た。イブはモアウォ小学校の先生だった。この日は乗り合いのタクシーで登校した。学校でメンバーに会えるとうれしくてほっとして不安からの解放で涙が止まらなかった。この日から本格的なプロジェクトが始まる日で全校児童とメンバーが顔を合わせた。

午前中の活動を終えて、本当はまだ帰りたくなかったけれど一人で帰れる自信ももちろんなかったので、イブとすぐ帰宅した。不安が大きすぎてお腹もあまりすかなかったが昼食をとりあえず食べた。家族は各々が食べたいときに一人ひとりが食べるスタイルであったようで慣れてきた。

午後四時に同い年の大学生（イタ）が大学に連れて行ってくれるというので、それまで小中学生の妹（フェンとエンダン）と家の裏の海辺の散策（ジャランジャラン）につきあってもらって、自己紹介をしたり地震があったときのことなど聞いてみた。広がる海と妹たちのおかげで私は「あせらなくてもいいんだ、できることを精一杯やればいいんだ」と思えて不安や緊張から開放されたような気がした。それからは少し元気になったこともあってお土産のおかしをあげたりしてコミュニケーションも何とかできるようになってきた。

それからイタと歩いて大学へ行った。成績発表か何かの日でたくさん学生達がいてイタの友達や彼氏も紹介してくれてニアスのキャンパスライフが体験できた。イタにイブからの電話があって急いで帰ると先生方とメンバー数人が自宅に様子を見に来て下さったていた。トイレのことを確認してもらうと壊れているのは二つあるトイレのうち片方だけだとわかり安心した。

外の風景と 食生活

しかし三日目の活動中にとうとう倒れてしまった。精神的なものと食事と睡眠も十分でなかったせいであろう。午後から先生のいるホテルで休ませてもらってこの日はホテル泊になった。着替えを取りに一時帰宅すると姉（フィシカ）に［Are you sick？］と言われて一瞬戸惑ったが「寝るだけだから大丈夫だよ」といっておいた。

四日目は一人で寝られたこともあって元気になって活動できた。午後はメンバーで折り鶴の作品の制作もあって帰るのが少し遅くなったが方法がなく初めて歩いて帰宅した。道の路肩でテーブルに直に置かれて売られている魚を見て驚いた。家までもうすぐのところでイブがバイクで来

てくれてシティへ連れて行ってくれて、生のココナッツを食べたり、レストランでミーゴレンやラーメンを食べた。そこでは小中学生の子どもも労働していたのがテレビでしか見たことがなかったので、不思議な光景だった。日本ではほとんど見られないような色や形の果物や魚が多くて、いかに気候や文化違うかを感じた。

シティでは果物を買い、コンビニにも行ってインドネシアで初めてショッピングをした。

五日目は日曜日ということもあり、別の小学校の先生であるフィシカの小学校へイタと三人で行った。日曜礼拝の指導があって子どもたちは教会へ行き私たちは帰宅した。昨日買ったパイナップル（ナナス）に塩をつけて食べたり、庭になっているカカオ（チョコラ）を味見した。チョコレートからは想像できない酸っぱくて予想外の味だった。お昼は姉の友達が、野菜のかき揚げ「バックワン」を作りに来てくれた。これはニアスで食べたもので一番おいしかった。

ホームステイも終わりに近づいて

近くに住むイブの母（ネネ）やおじさんおばさんなど親戚が次々に私に会いに来てくれて、家にもお邪魔した。たくさんのニアスの家族に出会うことができた。とにかく親戚の家が近くて学校帰りでも毎日のように挨拶を交わせるくらいで戸が開けっ放しの家も少なくなかった。

午後からはメンバーの集まりがあって作品の制作に取り組んだ。途中激しいスコールや雷もあって熱帯雨林気候を体感した。

六日目の活動最終日はラマダンの初日であったため学校は休日らしく、子どもたちも早くに帰ってしまったことで、歌の練習などした。

帰宅して私もそろそろ終わりを迎えるニアスでの時間を振り返りながら家族にメッセージカードを作ることにした。エンダンの友達も一緒に遊びながら、ゴミ（サンパ）を一カ所に集めることを教えた。玄関と室内の区別があまりはっきりしない文化には多少慣れるしかなかったが、ゴミを散らかったままにする習慣を少しでも変えたかったからである。

その後は最後にもう一度子どもたちと海に行って空気をいっぱい吸い込んでたくさんのニアスを吸収できたことを嬉しく振り返っていた。

最終日はモアウォ小学校でお別れ会とホテルオトモシでホストファミリーとの昼食会。メンバーそれぞれのファミリーが一堂に会して、思い思いのランチタイムを過ごした。終了後先生が荷物回収に来るというので居間で家族と待っていたが大幅に時間は過ぎて三時間半はそこにいただろう。疲れてしまった私はホームステイ最後の夜にも関わらずすぐに寝てしまった。

ありがとう　ごめんなさい

ニアスをたつ朝、夜中の二時に目覚め、予定時間まで荷造りや身の回りの整理をしていて、準備していた靴下がないことに気づいてあたりを探すと置いたはずのないところへ置かれていて中にはイブからの手紙が入っていた。それを見た瞬間に大泣きし、手紙には「女良（娘）」や[maaf（ごめんなさい）]の文字が見えて、イブに対する私の態度はとてつもなく申し訳なかったという感情があふれてきて謝りたかった。伝わったかどうか分からないままでなかなかコミュニケーションもとれなくて、いつもイブの表情が恐くて面と向かって答えられなかったこと、食事のこと、ベッドやトイレのこと、生活のあらゆることに驚く私を心配してくれていたことを思うと、心からごめんなさいと一週間ありがとう!!という気持ちが涙になってあふれた。

パパもいなくて、五人の子どもたちとの生活を支える体が丈夫でないイブのことを思うと、帰るのがさびしくなってしまった。迎えの車が来てくれるまで家族と何度も何度も別れを惜しんで、最後は笑顔の「サォハグル（ありがとう）」「サンパイジュンパ（さよなら）」であった。

私のホームステイは涙に始まり笑顔に終わった。

インドネシアの宗教

安藤健太[30]

はじめに

最初になぜこの「国際参加プロジェクト」に参加したのか、それはインドネシアという海外に対しての興味はもちろんあったのだが、なによりインドネシアとゆう日本語が通じず、ほとんどなにも知らない土地で自分がどれほど人の役に立てるのか、また自分がどこまで出来るのか試したく応募させていただきました。しかし、実際現地のインドネシアに行って、何が出来たのか、どれほど自分が未熟で不甲斐ないかを学び、また震災があったにも関わらずどれほど力強く生きているかなどホームステイ先や小学校を通じ様々なことを学ばせていただきました。

インドネシアとゆう環境が全く異なった世界での生活は自分を食事や、文化、教育など様々な事に興味を抱くきっかけになり、その中でも特に宗教について一番興味を抱いたのです。それは、現代の日本にはない信仰心の強さ、また普及度に驚いたからなのです。

自分は天理教を信仰しており、周りにも天理の大学ゆえに多くの天理教を信仰する知人がいて、何も信仰していない無宗教の人はそれほど多くはいません。しかし、日本の世間一般を見たら、その観点は180度変わり、ほとんどの人が何も信仰していない無宗教だと、信仰していても熱心にしていなく名前だけの人がほとんどだと思われます。

なぜ同じアジアなのにそれほどまで普及したのか、それらの観点からホームステイ先が信仰していたキリスト教、インドネシアのほとんどが信仰しているイスラム教、２つの宗教を中心に宗教が与えるインドネシアへの影響などを、この活動報告で述べていきたいと思う。

１　土着宗教

インドネシアは世界で４番目に人口が多い国で約２億人を抱える多人口国家で、その総人口の約８７％がイスラム教という、世界でも最多数のイスラム教国とされていて、他にもキリスト教、ヒンドゥー教など、様々な宗教がある国とされているが、それらの宗教がインドネシアの国境を越えてきたように、インドネシアの土着宗教も存在していた。それが、バタック地方による土着宗教である。

バタック地方は、バタック人が住むスマトラ島の北部山岳地帯の真ん中の峻険な斜面によって海岸低地地域から切り離された高原周辺をさし

[30] 国際文化学部アジア学科中国語コース４年生

ており、このような地理的条件、もしくは、バタック人が食人習俗をもっている種族との噂を聞いてか外部の人間の怖れなどがあり、バタック人は外部世界から比較的孤立して暮らしてきた。しかしこのことは、彼らが外部の人間や文化との接触をまったく持たず、完全に自足的で閉鎖的に暮らしてきたことを意味するものではない。インド洋を渡ってインドから直接、またジャワ島から間接的に伝わってきたヒンドゥー文化は、バタック人の言葉、宗教などに大きく影響している。

その宗教的側面からいえばどうであろう、もちろんこのバタックに存在しており、占いや病気を治すなどの土着宗教が成り立っていた、しかしこれらはバタックでも一部のものでしか無かったのだ。たが、バタック全体に影響を与える宗教も存在しており、それがシシガマガラジャ信仰である。シシガマガラジャとは王様の称号であり、政治権力としてバタック地方を支配するものではなく、宗教的権威によって君臨していたとされている。

２　イスラム教・キリスト教との関わり

イスラム教、キリスト教の布教が強くなったのは、１９世紀半ばぐらいといえよう。

南に住むミナンカバウ人の間で行われたイスラム改革運動は、隣接しているバタック地方にも影響を及ぼし、それをきっかけに南部地区を中心としたバタックのイスラム教普及が始まった。

キリスト教はといえば、ちょうど同じ頃に入ってきており、それはイスラム教に対抗するため植民地支配しているオランダの力がこの地を支配していることから与える影響であった。しかし、これまでキリスト教は１８２４年、１８３４年と２度バタック地方における布教活動を失敗していて、１８６１年にバタックの中心のトバ地区でやっと浸透してきたのである。それ以降徐々に信者数が増加していき、現在ではバタック地方の人口の約４０％が新旧教のキリスト教徒であるとされ、トバ地区においては９０％を超えることになった。

まとめ

この度、この活動報告書を通して、インドネシアと宗教の関わり、また歴史について調べたが、やはりインドネシア現地に行って聞いた声には、いまだに引っかかるものがある。もしかしたら、あの時自分の言葉が通じなかったのかもしれない、だからこそ確かめに行きたいと深く思う。

この「国際参加プロジェクト」は、自分にとってかけがえのない大切なものとなった。チョイ悪風で恐いのにバイクは３０キロ台のやさしいお父さん、英語ペラペラ美人なお母さん、首の横からひげが生えて早朝に釣りに行く元気なじいちゃん、しっかりものでふざけるのが好きなジョディ、わがままで泣いてばっかりの可愛いニコ、本当に最高の家族でした。そんな家族の温もり、信仰心の強さを学んだプロジェクトでした。

参考文献

１．山本春樹『バタックの宗教インドネシアにおけるキリスト教と土着宗教の相克』（風響社）2007年
２．インドネシアの宗教
http://www.geocities.jp/interyuell/21/iy231.html

音楽交流を通して感じたこと

石倉護[31]

1.　はじめに

私はインドネシア・ニアス島での一週間のホームステイ生活を通して、音楽がニアス島の人々の生活に深く密接した重要な文化のひとつであること、そして、音楽交流は異文化で人々と交流する上で、ことばや文化の違いを越えて人と人との心の意志疎通を可能にしてくれる大切な役割を果たすということを学んだ。私は以下で、その理由を自分のニアス島での経験とリサーチに基づいてと述べていこうと思う。

[31] 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科
英米語コース４年生

2.　音楽と宗教の関わり

音楽がニアスに住む人々の生活に密接した重要な文化のひとつであると述べるのは、彼らが信仰するキリスト教の日常的なお祈りや日曜日の教会でのミサにおいて、歌を歌う機会がたくさんあるし、彼らは日常的にギターを弾きながら近隣に住む人々と島に古くから伝わる歌や最近流行しているポップスを歌うという楽しく温かい文化があるからである。

インドネシアでは、国民の約 90%弱がイスラム教、10%弱がキリスト教、そしてその他がヒンドゥー教を信仰していると言われている。国民の大半がイスラム教信仰者であるにも関わらず、ニアス島ではキリスト教徒が多数派であるので島民の生活というのはキリスト教の宗教色を帯びている。しかし、もちろんイスラム教徒もいるのでイスラム教色が全くないというわけではない。実際、私がホームステイさせて頂いた家族の方々もキリスト教の教徒であったので、就寝前には毎日必ず聖書に書かれている文をメロディーにのせて歌っていた。父親か母親が一節を歌い終わると子供たちや近隣に住む人々も一緒に声を合わせて歌うという感じだった。また、滞在中一度だけミサという日曜参拝に連れて行ってもらう機会を頂き、そこでたくさんの人びとが約 3 時間ずっと聖歌を楽しそうに歌う姿を拝見した。何人かの島民がギターやキーボードを演奏して、それに合わせて声を張って歌っている陽気な姿を見て私は感銘を受けた。ミサが終わった後の人々の様子はとても満足気だったし、私自身、歌は歌えなかったがその雰囲気に釣られて心地よい気分を味わうことができた。これで、音楽が果たして生活に密接した重要な文化なのかは言うまでもなく、宗教が彼らにとって重要な生活の一部である限り、音楽も彼らの生活から切っても切り離せない大切な文化と言えよう。

3.　日常生活における娯楽としての音楽

宗教的な面から文化としての音楽の重要性を述べたが、彼らのギターを片手に家族、または近所に住む人々と一緒に歌を歌う様子から彼らの日常生活における音楽の重要性が分かる。私がホームステイしていた家族は皆ギターの弾き語りが好きで、毎晩様々な音楽を聞かせてくれた。家族のひとりがギターを弾き始めると、それに釣られて他のみんなも歌を歌い始め、いつの間にか、隣に住む子供たちも集まり 10 人以上で歌を大合唱するということもあった。私の住んでいた家族だけがギターの弾き語りを日常茶飯事にしているのではないかと思うだろうが、しかし、私の近所に住む別の家庭からもギターの弾き語りの音があちらこちらから聞こえ、また、プロジェクトのメンバーのひとりも家庭のギターで日本の曲を歌って聞かせるという事をしているほど、ギターというのはどの家庭にもひとつはある代物であると思われる。それに加え、ギターの練習用譜面があるわけでもないのに、幅広い年齢層の人々、または男女どちらもギターの弾き語りができるのは、親から子へ、兄弟から姉妹へ、または友から友へとギターの弾き方を教え合い、娯楽として共に楽しんでいるからであろう。したがって、音楽は彼らの生活の一部であり、重要な文化のひと

つである。

4.　言語の違いを越えて意志疎通を可能にする音楽

これまでニアス島での音楽と日常生活の密接した関係性とその重要性について述べてきたが、次に音楽交流を通してホームステイ先の家族と言語や文化の違いを越えて家族の方々と心の意志疎通ができたことに関して説明し、異文化での音楽交流の重要性について主張したいと思う。

おそらく、私はプロジェクトに参加したメンバーの中でも音楽を通して最もコミュニケーションを図り、意志疎通を可能にしたひとりだと自負できる。というのも、私は毎晩、ホームステイの家族の方々と一緒に庭先で一緒にインドネシアの歌を歌い、他のメンバーでもそこまでインドネシアの音楽と触れ合った人はいなかったからである。したがって、他のメンバーに比べインドネシアでの音楽交流という観点で言えばより確実で信頼のおける意見を述べる事ができるのではないかと思う。しかし、これはあくまで個人的な意見にすぎない。

私は、異文化や他の言語を話す人々と出会った時、その現地の音楽を一緒に現地の人々と歌ったり、また自国の音楽を紹介して歌うことで、現地の言語を話す事ができなくても、その時の場の雰囲気やその現地の音楽のメロディーによって心を通じ合わせる事ができたり、お互いの文化を知ることができると思った。

モアオ小学校で、ホームステイ先の家族の方に初めて出会った時、私は彼らの話すインドネシア語を全く理解することができなかった。したがってこの先どうコミュニケーションをしていけばいいのか不安であった。しかし、始めての晩御飯の後、庭先で家族の方々や近くに住む従兄弟達がギターを奏でてインドネシアの歌を歌い、私の事を歓迎してくれた。その時も、何を言っているか理解できなかったが、音楽に合わせ踊ったり、歌を真似したりしながら歌う事でコミュニケーションを取ることができ、ほんの一夜で仲良くなれた。この晩、私は『ダヌニハー』というニアスに伝わる歌の歌い方や楽譜をカタカナ表記でノートに記録し、その後お別れ会のパフォーマンスのひとつとして披露する事を提案し、実際歌うことになった。毎晩このようにインドネシア、またはニアスの歌を教えてもらい一緒に歌い、その場の雰囲気を共有し、歌を歌えば歌うほど家族の方や近隣の人々と仲良くなっていくのを感じた。したがって、全く異なる言語を話す人々と、ことばで意志疎通できなくても音楽で心を通じ合わせることができるのだと思った。もちろん、相手の言語を話し、聞いて理解できることに越したことはないが。

5.　異文化理解に繋がる音楽交流の重要性

また、異文化での音楽交流において、相互に音楽を紹介し合うことでお互いの文化を知る事もでき、異文化理解につながる。私はインドネシアの歌を聞いただけでなく、自国の音楽を紹介することもできた。日本でもアジアでも有名な SMAP の『世界に一つだけの花』を歌い、ローマ字表記で歌詞をノートに書いてプレゼントした。それをもらった家族の一人の妹は大変喜び、頻繁に歌っていた。この時、日本の音楽を紹介できたし、それで喜ばす事ができたことに私は音楽の素晴らしさに気づいた。また、家族に教えてもらったインドネシアの歌にクリスマスソングの『ジングルベル』の替え歌バージョン『リノガエ』という歌がある。これは、お母さんが料理を作る手順を説明した歌で、歌詞の最後に『アジノモト』ということばが出てくる。後で調べて分かった事だが、以前インドネシアで味の素を販売した時に、イスラム教では豚を食べることは禁止されているにも関わらず、味の素の成分の中に豚の成分が含まれていることが明らかになり大きな問題となったそうだ。よって、私はこの歌からインドネシアの宗教・文化・歴史などにも興味を持つようになった。そして、これが異文化理解に繋がる大切なことだと気づくことにもなった。

6.　終わりに

以上に述べたように、インドネシア・ニアス島

での活動やホームステイでの音楽交流を通して音楽の持つ人と人の心をつなぐ力、そしてその音楽がニアスに住む人々にとって生活に密接した貴重で素晴らしい文化のひとつである事を学んだ。この異文化間での音楽交流というのを国際協力活動や、また日本の教育や社会活動などの様々な場面で行っていけばより良い国際社会になっていくのではないかと感じた。

たくさんの人に支えられて

逸崎あずさ[32]

はじめに

海外の色んな国の色んなものを自分の目で見て、視野を広げたいという理由からこの「国際参加プロジェクト」に参加した。私は今までに、文化実習やあるボランティアなどを通じて海外に

[32] 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科
英米語コース４年生

出向く機会に度々恵まれ、また渡航先では普通に生活する際に何か不自由だと感じることはほとんどなかった。しかし、普段当たり前だと思っているその当たり前がいかに大切であるか気づかせてくれたのが、このプロジェクトだった。

Ⅰ．辛かった事前研修を乗り越えて

就職活動や教育実習などの私情と並行させながらの約２ヶ月間の事前研修は、本当にあっという間に終わってしまった。現地インドネシアでの活動に向けて事前準備を重ねる内に、当初抱いていた意欲が不安へと変わっていった。就職活動もなかなか思い通りに進まず、そこへ３週間の教育実習が重なり、私にとって本当に辛い時期だった。プロジェクトに参加する前からわかっていたものとはいえ、事前準備を他のメンバーに任せきりで実習に徹するということは容易ではなかった。しかし、実習期間中は実習のことにだけ集中するよう努め、実習を終えプロジェクトに帰ってくると、やらなければいけない準備はすべて終了していた。これだけの準備をするのにどれだけの時間を費やしてくれたのだろう。理由はあったにせよ、肝心な準備も出来ず、このままプロジェクトを続行していいのだろうかと罪悪感に駆られた。しかし、プロジェクトの仲間はそんな内心戸惑っていた私を笑顔で迎えてくれた。「おかえりー！」みんなのその一言に救われた。あらためて今一度、立ち止まってみて自分と向き合った。今自分が置かれた状況から逃げず、このプロジェクトを続けること、たったそれだけのことと思われるかもしれないが、それが今の私に与えられた試練なのか

もしれないと思った。そしてなによりも、ここには支えてくれる仲間がいると感じた。当初抱いていたプロジェクトに対する想いを甦らせ決意を新たにした。

II．いざ、ニアスへ

そして、いよいよ本番の時がやってきた。インドネシアのニアス島という全く見知らぬ土地に降り立ったときはやはり不安で仕方なかった。ニアスに向かう小型機の中からも、一目瞭然だったが、目に入ってくるのは青々と茂る森林だった。本当にここで私たちは生活していくのかと、一瞬疑ってしまうほど、家などの目立った建築物は目に止まらなかった。空港から車で小学校に向かい、そこでモアウォ小学校の先生方やホストファミリーと対面し、挨拶を交わした。その時の私は、おそらく不安でいっぱいの面持ちだっただろう。そんなことにも関わらず、ホストマザーはあたたかく笑顔で迎えてくれた。家に帰るとホストファザーを始め、9 人もの幼い子どもたちが待っていてくれたが、とにかく子どもの多さには驚かされた。その後もその日は驚きの連続だった。今まで海外で困る事と言ったら、もちろん言語が通じないということぐらいだったが、インドネシアという国は、食や生活の文化は私が想像していた以上に違ったからだ。カルチャーショックとはこういうことを言うのかもしれないと思った。食事やお風呂、洗濯など日本でなら難なくこなしていたことも、インドネシアでは何もかもが一苦労だった。私が日本という豊かな環境で生活をしていることが、当たり前ではなく本当にありがたいことなのだということに、身をもって気づくことが出来た。言葉も上手く通じない、生活にも思うように慣れることが出来ないそのような状況で、私が困っていると、家族のみんなは一生懸命理解しようとしてくれた。会話帳を使ったり、紙に書いて説明したり根気強く付き合ってくれたのだ。

プロジェクト最終日、まさかのタイミングで体調を崩してしまった私は、ホテル泊をせざるを得なくなってしまった。その日家族のみんなは、私を送り出すためにご馳走を準備してもてなそうとしてくれていた。今度は自分がみんなを支えるんだと強く決心していた自分が情けなかった。それに覆いかぶさるように、家族のみんなやメンバーのみんなに申し訳ない気持ちでいっぱいだった。私と家族との別れは、みんなより一日早く、急に訪れた。急遽、北スマトラ大学の学生に翻訳を頼み、家族に手紙を渡した。伝えたかったことはいっぱいあったのに悔しかった。そんな状況でも、自分たちのことよりも私のことを気遣ってくれる、そんな家族みんなの温かさがあの時は特に身に沁みて涙が止まらなかった。

このプロジェクトのことは、友人から聞いたことがあったので 1 回生の頃から知っていたが、この大学生活最後の年に参加させてもらえたことを本当にありがたかったと今もなお感じている。このプロジェクトで得たものはと聞かれると、一言ではなかなか言い表せない。実際私は、ニアスの人々のため、メンバーのために本当に有効に力を注げたのかはわからない。しかし、来春からひとりの社会人として社会で働く私にとって、今回のプロジェクトでインドネシアの人たちから教わったこと、インドネシアで見たもの、感じたことがさらに大きな糧になるように、努めていきたい。

最後にこのプロジェクトに参加するにあたってお世話になった先生方、学生スタッフのみんなに感謝しています。ありがとうございました。

感謝するということ

斉藤貴子[33]

今回この「国際参加プロジェクト」に参加させて頂き本学の建学の精神にもとづく「他者への献身」と私の中でのセルフモチベーション「One for all ,All for one」という言葉の意味通り、みんなで互いに助け合い成し遂げる事の素晴らしさ

[33] 体育学部体育学科スポーツ学コース 4 年生

を身につけることが出来た。見て聞いて学んで沢山のことをインドネシアで吸収してきた。大げさかもしれないが、このメンバーでないと私はここまで身も心にも残るものにはなっていなかったと思う。今、考えると何かの縁と縁が結び付きお世話になった先生方や今回のメンバーに出会えてプロジェクトを成し遂げることができた事へ感謝する。

私は大学生活の途中で今まで２１年間続けてきた水泳を辞め、在学している意味があやふやになりながら登校していた。休学していたため同学年の友達たちはみんな卒業し知り合いもほとんどいない状態で、出席日数のため２時間弱かけ通学し、完全に私は大学から心を閉ざしていた。こんなネガティブな自分が嫌だった。

4 年次生になりオリエンテーションでの１枚の紙が私と「国際参加プロジェクト」を引き付けた。ここで私はとてもプラスのパワーを持っている人たちに出会うことができた。名前も顔もほとんど知らない約 20 人の天大生が集まった。このプロジェクトへの考えも想いも個々に違っていたが、私にはみんなが凄く魅力的な個性を持った人たちに見えていた。なぜならばまずはこのプロジェクトのメンバーに選ばれたからだ。すなわちみんなそれぞれ運がついている人間なのだ。私は謙虚という言葉が今まで人に合わせて、本当は何を考えているのか理解できないし苦手だった。だが、プロジェクトを参加してから私なりの謙虚という言葉の意味は人に感謝することで、きちんと人に対して愛をもって対応できることではないかと考えが変わっていった。参加したくてもできなかった学生もいたのだから参加できて当たり前と思ってはいけない。私はこの魅力的な人たちが約 20 人も集まってプロジェクトを成功することができたならば…と考えるだけでワクワクしていた。だからこの幸せなプラスのパワーを事前活動でもっともっと大きくしインドネシアへも、と日々前進し続けた。

ニアス島を含め、インドネシアでの生活は初めてのことばかりで、てんやわんやな毎日だった。痛いくらいの日差しがとても気持ちよくダイレクトに体に染み込んだ。その日差しを受けて育った子供たちの笑顔は今にもとろけだしそうだった。スケジュールは決まっていたもののすべてが行き当たりばったりで私たちは留まることしらず前進し続けた。日本では味わうことができないとインドネシアを五感で感じたときプロジェクトに参加させてくれた両親の顔が自然にでてきたことを覚えている。記憶というものは消えてしまわないが薄れてしまうものだ。だが、インドネシアでの生活は薄れることさえも許しがたい。こ

のニアス島でのホームステイ期間中、メンバー全員それぞれが笑顔にならなかった日はないと思う。その笑顔は決して作った笑顔ではなく本当の自然に出た笑顔であっただろう。これはきっとニアス島の子供たちが引き出してくれた最高のプレゼントだと私は気付いた。あれほど毎日ニアス島の人たちと向き合うことしかない生活がもうないと思えば寂しい気持ちになるが、それを超える何倍もの私たちを受け入れてくれた現地の人たちへの感謝という気持ちが自然にでてくるのではないかと思う。

上手く言葉が通じないときや慣れない生活が続き体調を崩してしまうメンバーもいた。私もそのうちの１人だった。体調不良の学生の周りにはいつも椋野先生と心配する仲間たちが付いていた。モアウォ小学校での地震の仕組みと避難方法の紙芝居は現地の大学生を通さないと子供たちに上手く伝わらない事が何回か続いた。インドネシアにはそれぞれの地域に母国語に近い言葉があり、小学生低学年ごろまでは現地でよく使われているニアス語しか理解できない状態だった。私たちはこのことを現地に行くまで知らなかった。これは私たちの勉強不足であり失敗であるのだろうか？確かにもっとニアス島について勉強していれば上手くニアス語で伝えることが出来たかもしれない。しかし、後の祭りであって私は失敗だと思わない。なぜなら私は今まで自分のしたいことを自分で選び進んできた。もちろん成功も失敗もあったが、どんなに悪い状況にあったとしても真正面から向き合って受け入れる。だから私は失敗や挫折だとは思わない。紙芝居では、地震の仕組みと避難方法を日本の小学生低学年に日本語で教える場合でも５割の子供たちが理解できているかどうかという状況だった。そのような状況で聞き慣れないインドネシア語での紙芝居はやはり現地の子供たちの理解を得ることがはじめはできなかった。そこで私たち紙芝居班はこの現状を受け入れ、現地の大学生からの援助や仕組みについての説の訂正を行うことにより子供たちの反応が理解できている方向へと変わっていった。これはきっとニアス島の子供たちと向き合うチャンスだったのであろう。チャンスをくれた子供たちにありがとうと伝えたい。

私が考える人が輝ける１番の方法とは“ありがとう”をたくさん発声することだと思う。ニアス島の人たちは私たち日本人を見かけると時と場合など関係なく「アリガトウ！」とに叫んでいた。“ありがとう”の意味を理解して口にしているのかは分からないが、この言葉を聞いて不愉快になる人はさぞかしいないであろう。そんな素敵な場面に毎日数え切れないほど出くわした。人は感謝した分だけ成長すると考えている。だから私は人の良いところを見つけたらすぐに伝える。“ありがとう”は人だけではなく感謝の気持ちがあればすぐに“ありがとう”を口にする。それを行っているとこんなに魅力的で素晴らしい人たちと引き付けられた。水泳と離れてからこのプロジェクトに出会うまで学生という名のフリーターで大学生活に誇りを持てないでいたが私は今、胸を張って大学生活が充実していると語ることができる。このプロジェクトで素晴らしい縁に巡り合いながら感謝するという気持ちを学んだ。いつの間にかネガティブな私の心は消え、元のポジティブな私に戻っていた。やっぱりみんなに、ありがとう。

「絵本・ハルばあちゃんの手」

教育者として

どのように読み聞かせするか

阪本　健太郎[34]

概要：ハルばあちゃんの手を通じて、生きてきた人生を伝える。そのあと、実際に祖父や祖母と話をするきっかけとする。体験談などを聞くことも子供たちの成長にもつながる。

[34] 文学部歴史文化学科歴史学専攻４年生

1、ハルばあちゃんの手のあらすじ

「海辺近くの小さな村に生まれたハル。みながその手を見て、すごくきれいな手でうらやましがった。すごく器用な手で、折り紙やあやとりなど手を使うことなら誰にもまけなかった。中でも村の祭りで踊ることが一番好きだった。それから、大人になり、結婚し、子供も生まれ、ケーキ屋も営んだ。その後、子供も大きくなり、おじいさんも病気で亡くなり、故郷の村に帰る。」このように、ハルが生まれてから年をとるまでの人生を描いた物語である。

2、絵本をどのように工夫したら上手く読み聞かせられるのか

この「ハルばあちゃんの手」という絵本は、小学校低学年を対象に読み聞かせを行った。前で述べたように、ハルばあちゃんの手をそのまま読んでしまうと、物語を読み聞かせているだけになる。これだけでは、小学校低学年にも難しい内容なので、上手く伝わらない。それでは、どのように工夫することが必要なのだろうか。ここでは、読み聞かせをする上で、工夫する点、実際に現地(インドネシア)で行った方法について、紹介したい。

まずは、声の強弱などはもちろん、会話の部分に関しては、特にそのときの物語の流れや状況を想像しながら感情を込めて読む。また、その物語の中で一番伝えたいことは何かということを理解する。そして、原稿を見すぎず暗記して、わかりにくい箇所を見ながら読む。子どもたちの目を見ながら心に訴えかけることで、文字の裏側に隠された筆者の伝えたい思いなどが伝わる。言葉をただ、読むだけでは、伝わらりにくいことも思いや感情を込めるだけで、伝わり方は変わってくると考えた。絵本の読み聞かせなので、絵を見ながら、指差しもする。そうすることで、物語の流れについていける。

現地活動初日は、ただ、絵本の読み聞かせをしていただけで、情操教育の一環としての読み聞かせではなかった。それは、日本語の絵本をインドネシア語に訳してもらい、その原稿をもとに、インドネシアの子どもたちの前で、読んでいただけだった。これでは、読み手が日本人なだけで、自分たちがわざわざ読むということが、本当に必要なのかと感じた。そのようなマイナスな考えが、子どもたちの反応にも出ていた。しかし、その日の活動が終わるごとに、ミーティングを行い、反省点を挙げ、改善点も一緒に考えた。そこで、「ハルばあちゃんの手」という絵本では、導入、展開、まとめ、という授業を行うような流れを作り、取り組むことにした。その結果、日を重ねるごとに子どもたちの反応も変化し、絵本を集中して聞くようになった。導入、展開、まとめのような授業のような流れが、子どもたちの今後に繋がる読み

聞かせへとなった。

3、おわりに

自分の全く知らない言語で、絵本の読み聞かせをすることがすごく困難なことだと感じた。他の言語で読み聞かせをする前に、日本語で、絵本の読み聞かせを上手くできるような努力が必要だと感じた。読み聞かせの練習にあてる時間が少なかったことが、今回の反省点である。

今回の活動を通して、絵本の読み聞かせは子どもたちの成長に欠かせない必要なことだと感じた。それは、ただの読み聞かせではなく、情操教育だからである。絵本の読み聞かせを通じて、子どもたちの心に何か残したい、また、その種にいつ芽がでるかが、わからないが、その種が子どもたちの将来に役立つだろうと感じた。教育というものは、人に、教えるだけでなく、自分にも言い聞かせることができる。他人だけでなく、自分も大きく成長できるものだと考えた。この活動で、初心に戻ることができ、自分をもう一度見つめ直すいい機会となった。ここで実践したことを今後に繋げていけるよう、しっかり心に留めたい。

絵本読み聞かせの工夫点

橋本郁弥[35]

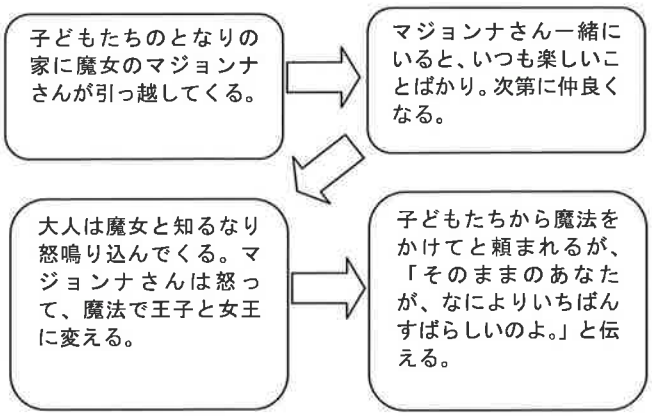
はじめに

第 11 回「国際参加プロジェクト」では絵本の読み聞かせをした。筆者は読み聞かせは「事前準備」が大変重要であると考える。本レポートでは絵本の読み聞かせの工夫点と気をつけるべきポイントをまとめた。

今回の活動目的は外国語教育・防災教育・情操教育の三点、その中の情操教育を目的とした絵本読み聞かせを私は担当した。

絵本の名前は「となりのまじょのマジョンナさん」図はこの本のあらすじである。

【図：絵本のあらすじ】



[35] 国際文化学部アジア学科中国語コース 4 年生

この本のメッセージとは最後の「そのままのあなたが、何より一番すばらしいのよ」という一言に込められている。ここには魔女とも知りながらも仲を深めてくれた子どもたちの心は大切である。そのまま純粋な心をもって成長して欲しいという意味を表したいと感じた。そこで私はこの文を伝えるために行った工夫点を中心にレポートを書いていく。

それでは初めに工夫点についてまとめる。

【読み聞かせの工夫点】

工夫点	目的・効果など
インドネシア語で覚える	・カタカナより正確な発音を覚える
抑揚をつける	・絵本の特徴、登場人物の特徴を出す
みんなでセリフを読む	・子ども達に絵本に参加してもらう
目くばせ	・本に集中しているかを確認
持ち方	・最後尾・右端・左端にも見やすく
導入で「魔女」についての質問	・興味を引く。絵本の内容についての予備知識を与える
指をさす	・絵本に注意を向ける
運動させる*	・同じ体勢で聞いている児童の休憩
聞く時は自分が一番真剣に聞く	・“絵本”を聞くという雰囲気を作る
学生は児童を囲むように座る	・担当絵本以外の時に行い児童観察
目線を合わせる	・絵本を聞いているとき、子どもたちに目線を合わせ、絵本が見やすいかどうかの確認

それでは上記の工夫点を３つのグループに分けてみる。グループ化してわかった事は現地に行ってから出来る事の方が圧倒的に多いということだ。かといって「事前準備」を怠っていたかというわけではない。ここからは「事前準備」の工夫点についてコメントをしていく。他のグループに比べて工夫点の数が少ない理由は費やす時間が非常に多いということである。インドネシア語を学習したことがなかったために山本春樹先生や留学生を交えての発音練習や、インドネシア人の絵本読み聞かせ音源のシャドーウィングに取り組んだ。結果的に現地活動から半年たった今でも思い起こせるほどにまで身についた。

【工夫点の分類】

事前準備	子どもの集中力向上	読み聞かせの環境づくり
・インドネシア語で覚える ・抑揚をつける	・指をさす ・運動させる ・みんなで呪文（セリフ）を読む ・目くばせ	・持ち方 ・導入で魔女についての質問 ・目線を合わせる ・聞く時は自分が一番真剣に聞く ・学生は児童を囲むように座る

「子どもの集中力向上」については読み聞かせをする度に思いついたものがほとんどであった。一番効果的であったのは「みんなで呪文を読む」という項目であり、アブラカタブラと唱えたのだが、インドネシアの子ども達にとっても馴染ある呪文だったため親近感があったのではないだろうか。「目くばせ」は自分に余裕がなくては難しい。ゆえに、初めから行おうとすると自身の呼んでいる場所が分からなくなるので逆効果だ。

最後に「読み聞かせの環境づくり」について述べていく。一番有効だと感じたのは「導入で魔女についての質問」だ。ここで子ども達との距離を縮めると、先に述べた呪文など一緒に唱えやすい

* 絵本は４冊１チームで行われた。運動は２冊目を読み終わった時に行った

環境で絵本を読み進めることができた。その他については正直、効果があったのか分かりにくかった。

こうして振り返ってみると、絵本の読み聞かせは奥が深いことが分かる。特に今回は外国語で行うということもあって一朝一夕で完成させられるものではない。ゆえに出発前の準備が重要になってくるのだが、私の考えが及ばず現地で気づかされることの方が多かった。これは反省点といえる。回避するためには日本で本番同様の読み聞かせ練習を重ねることが重要だと考える。

今後の「国際参加プロジェクト」で絵本読み聞かせ活動に取り組む学生がいたのならば、事前準備の努力次第で現地活動の成果が問われることを頭に入れて取り組んでほしい。

日本のこどもたちに伝えたいこと

原田　亜紗美[36]

概要　「国際参加プロジェクト」で学んだ「笑顔」と「ありがとう」の大切さを通して、日本の子どもたちの「生きる力」を育む。

私は、第１１回「国際参加プロジェクト」を通して、日本の子どもたちに伝えたいことがあります。それは、「笑顔」と「ありがとう」の大切さです。

このプロジェクトの参加動機は、教員を目指す中で何かステップアップしたい、という思いでした。事前研修を重ね、ひとつのことを体験したいと思うようになりました。それは、インドネシアの人々と笑顔で心をつなげることです。

３回生のとき、教職課程で自立支援センターへ実習に行きました。言葉を上手く話せない入所者の方々とのコミュニケーションに戸惑いを感じているとき、ある先生に、コミュニケーションは会話だけでなく、表情・アイコンタクト・ボディランゲージ・うなずきなど、たくさんあることを教えていただきました。その中で、もっとも大切だと感じたのが笑顔でした。何も話さなくても笑顔で隣にいるだけで関係を築くことができました。その笑顔はインドネシアでも心をつなげてくれるのか、ということに興味を抱き、活動を行いました。

活動中に心掛けたのは、笑顔でコミュニケーションをとることです。ホームステイの家族とはも

[36] 体育学部体育学科スポーツ学コース４年生

ちろん、道で出会うニアスの方々に笑顔で挨拶をすることや、紙芝居中に自分の台詞のときもそうでないときも、笑顔で子どもたちと目を合わせることです。そしてニアスの人々は、私があげた笑顔よりも何倍もの笑顔を返してくれました。そのときに私は心のつながりを感じました。世界共通語は英語ですが、私が経験した共通語は笑顔です。言葉だけで感じることのできないつながりを経験できたことを、日本の子どもたちにも感じてほしいです。

そして、もうひとつ伝えたいことは「ありがとう」の大切さです。文部科学省の学習指導要領に「生きる力」という言葉があります。それは、基礎的・基本的な知識・技能の習得であったり、思考力・判断力・表現力等の育成、学習意欲の向上を示します。私はそれに、感謝の気持ち付け加えたいです。活動中、私たちをいつも支えてくださった先生方、北スマトラ大学日本語学科の学生、最高の仲間たち、OB・OGの方々、モアウォ小学校の先生方、子どもたち、ホームステイを受け入れてくださった家族の皆さん、そして、日本で心配しながらも応援してくれた家族や友達。普段、当たり前の存在と感じていた人が支えてくれているからこそ、今の私があると実感でき、自然と感謝の気持ちが湧いてきました。周りの環境や人の大切さに気付き、感謝の気持ちを持つことが「生きる力」だと考えています。

また、普段の環境や人から離れることで、初めて日本の裕福さに気付くことができました。ニアスでは生水が飲めない、ごみの処理ができない、洗濯機やクーラーがない。日本の当たり前が通用しないことがたくさんありました。しかし日本のように、家に洗濯機やクーラー、パソコンがあるからといって幸せ、ということではありません。このプロジェクトをきっかけに、裕福≠幸せ、ということにも気付けたことが活動後の教育実習でありました。

現地活動を終え、9月に母校の中学へ教育実習に行きました。日本の子どもたちにも、インドネシアの子どもたちに負けないくらいの笑顔を見せてもらいました。しかし、授業や掃除が始まると「めんどくさい」「だるい」という言葉がいろんなところから聞こえ、表情も曇っていました。そのときに、日本は幸せだと感じていたけれど、それは貧富の面だけで判断していたことで、心の豊かさではニアスの人々の方が幸せだった、と感じました。

教育実習中、学校の先生方に「国際参加プロジェクト」の話をしたところ興味を持っていただき、100 人の中学生の前で話をしました。正直、中学生に今の環境のありがたさは、別の環境を経験しないと分からないと思います。だからといって、この活動を「インドネシアに行ってよかった」で終わるのではなく、伝えていかなければならないと思います。それが活動のホップ・ステップ・ジャンプにつながるのではないかと考えます。

「ありがとう」はインドネシア語で「Terima kasih」といいます。「Terima」が「受け取る」で「Kasih」が「愛」です。インドネシアの人々は愛を受け取った証拠を感謝の気持ちに表現しています。たくさんの愛に囲まれて人は成長していることに気付くことができた言葉です。日本人には少し照れくさい言葉ですが、愛をこめて「ありがとう」と素直に伝えることができる人こそ、幸せな人なのではないでしょうか。

私は4月から中学の教師になります。これから出会っていく子どもたちに心の豊かさの幸せを感じてほしいです。そのために、この「国際参加プロジェクト」で学んだ「笑顔」で「ありがとう」の大切さを伝え、感謝の気持ちがあふれる子どもたちを育てていきたいと考えています。

『変化』と『継続』の国際協力

渡部京介[37]

はじめに

私は以前から「国際協力」には興味があったの

[37] 国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科
英米語コース4年生

だが、それがどういうものなのかはよく分からずにいた。そんななかで、今回のプロジェクトに参加して感じた事がある。それは、国際協力における「継続」と「変化」の大切さである。

何もできない私にできること

私がこのプロジェクトへの参加を志望した理由は「国際協力を知りたい」というものだった。以前から「国際協力」には興味があり、何らかの形では関わってみたいと考えていたが、「国際協力」とは何なのかということについてもよく分かっていなかった。「誰かのために生きてみたい」「人の役に立ちたい」という志は持っていても、何ができるわけでもなかった。やるべき事や、やりたい事はいくらでもあるのに、できる事はといえば、無いに等しかった。科学技術もなく、医学や農学のような知識もない。いってしまえば、良心や善意といったものしかなくても、できることはあるのかと考えたとき、わずかの資金援助くらいだろうかとも考えられた。そんなときに「国際参加プロジェクト」の存在を知り、これによって

何かが分かるかもしれないと思い、飛びつくように参加を志望した。

『活動』か『資金援助』か

活動の内容としては、インドネシア語の紙芝居や絵本を使っての「防災教育」「外国語教育」「情操教育」だったのだが、活動前の私の中にはまだ「自分にできるのだろうか」という不安があった。私の話すカタコトのインドネシア語なんかより、現地の人の自然なインドネシア語で聞かせたほうがいいだろうとも思えて、「多額の活動資金を使って、自分たちが行くことが本当に効果的な国際協力なのだろうか」と考えた。今回の活動に際しては、参加者の自己負担金としての 10 万円に加えて、大学や後援会からの多大な支援があって成り立っている。それらの資金を援助として送ることと、そこまでしてでも自分たちが現地で活動をすること、どちらがいいのだろうかと考えていた。

そして活動を終えた私は、後者の「自分たちが現地で活動」してよかったと確信していた。活動を終えた後の充実感などがそう思わせたのかも

しれないが、今になって冷静に考えても、その確信は揺るがない。援助する側と援助される側で区切ることも、できればしたくはないが、資金援助よりも、実際に活動をするほうが、援助する側の満足感が得られるというだけではなく、援助される側にとっても、資金援助では得られない効果を現地での活動によって得られると感じた。たとえ、知識や技術もない私のような人間であったとしてもだ。

『満足感』が『継続』を生む

まず「援助する側の満足感」だが、これに関しては、資金援助よりも実際に活動するほうが満足感を得られるように思う。あくまで個人的な規模と感覚なので、どれほどの共感が得られるかはわからないが、少なくとも私はそう感じた。そしてこの「援助する側の満足感」は、決してエゴでもなく、独りよがりな自己満足と呼ばれるべきものではないと私は考える。国際協力という舞台においてこの「満足感」はとても大きな意味を持っていると思う。それは、「満足感」や「喜び」がなくては「継続」は生まれにくいからである。新しい試みは、時に単なるイベントに終わってしまうことがある。私たちの今回の活動も、ニアス島の方々からすると「日本人がきた」という珍しさや新鮮さゆえに、単なるイベントでしかなかったのかもしれない。しかしそれを、単なる思い出で終わらせるのではなく、知識として、更には習慣や文化として浸透させ根付かせることができるのは「継続」ではないだろうか。実際、このプロジェクトも今回だけのものではなく、いままでにも同様の活動を継続してきて、ようやく今回で締めくくったのだ。

『変化』による『問題解決』

では「資金援助では得られない効果を現地での活動によって得られる」とはどういうことか。その効果とは「変化」だと私は考える。かならずしも言いきることはできないが、資金援助だけでは、現状の維持はできても、問題の解決はできにくいのではないだろうか。それこそ、継続して資金援助を行えるのであればそれも一つの解決策なのかもしれないが、問題解決には何かしらの変化が必要だと私は考える。それはたとえば仕組みや制度であり、文化や生活習慣であるのかもしれない。そういった意味では、今回の活動を終えた後に、インドネシアを専門とされている引率の山本春樹先生が「ニアスには今まで読み聞かせという文化がなかったので、今回の活動によって、どう読み聞かせを行えばいいのか、子どもたちはどんなところに興味をもつのかが先生たちにもはじめて分かって、これからは自分たちでも絵本を読み聞かせるようになり、子どもたち自身も絵本を読むようになると思います」と言っていただいたのだが、まさに文化に変化を加えたと言えるのかもしれない。

『変化』と『継続』の国際協力

実際に参加してみなければ分からないとまでは言えないが、私の場合は、国際協力というものに実際に参加して初めて分かったことがいくつもあった。自分の中の疑問に対しても、いまの自分としての答えはもてたように思う。国際協力について自分はどう考えるのかということを、実際に参加した上での意見としてもてたというのは大きな財産である。国際協力は「継続」可能な活動である事が大切なのではないか、問題の解決には仕組みや習慣の「変化」が時として必要なのではないか、そして「変化」を加えるには人間の手が必要なのではないかということを、私は今回の活動に参加させて頂いて感じた。

第４部　プロジェクト関連資料

モアウォ小学校への贈呈品一覧

『天理時報』掲載記事

【モアウォ小学校への贈呈品一覧】

第 11 回「国際参加プロジェクト」で使用した紙芝居 2 つ、絵本 4 冊の他、以下の贈呈品を 8 月 10 日のお別れ会で贈呈した。

【絵本：読み聞かせ用 4 冊、その他 10 冊、合計 14 冊】

1　山中恒作、木下晋絵『ハルばあちゃんの手』福音館書店、2005 年。

2　ジーン・ジオン作、マーガレット・ブロイ・グレアム絵、わたなべしげお訳
『どろんこハリー』福音館書店、1967 年。

3　ノーマン・ブリッドウェル作、長野ヒデ子絵、ながつきるり訳
『となりのまじょのマジョンナさん』偕成社、2001 年。

4　エリック・カール作・絵、もりひさし訳『ちいさなくも』偕成社、1996 年。

5　エリナー・コア作、エド・ヤング絵、こだま ともこ訳
『つる―サダコの願い』日本図書センター、2005 年。

6　ジャン・ジオノ作、フレデリック・バック絵、寺岡襄訳
『木を植えた男』あすなろ書房、1989 年。

7　松居直作、赤羽末吉絵『ももたろう』福音館書店、1965 年。

8　エリザベス・ベレスフォード作、スーザン・フィールド絵、せなあいこ訳
『がんばれ、ちびくじら』評論社、2000 年。

9　バージニア・リー・バートン作、むらおかはなこ訳
『いたずらきかんしゃ　ちゅうちゅう』福音館書店、1961 年。

１０　谷川俊太郎作、 吉村和敏写真『あさの絵本』アリス館、2006 年。

１１　エリック・カール作、もりひさし訳『うたがみえる、きこえるよ』偕成社、1998 年。

１２　国崎信江作、目黒公郎監修、福田岩緒絵
『じしんのえほん―こんなとき　どうするの？』ポプラ社、2006 年。

１３　Koji Ichii 一井 康二編『What's Derolin ? --- A Story of Earthquake and Tsunami』

ウェイツ、 2005 年。

１４　Richard Platt and Stephen Biesty (1992),

'Stephen Biesty's Incredible Cross-Sections'　Alfred A. Knopf.

※　上記 1～12 番までの日本語の絵本は全て山本春樹先生がインドネシア語に翻訳した。インドネシア語の文書を学生が絵本に糊付けし、補強材でカバーして贈呈品にした。

【紙芝居：２つ】

１　『地震と津波とその避難方法』

２　『ブディ君の外国語の学びの旅』

※　紙芝居は台本と絵の作成を参加学生が行った。台本は山本春樹先生がインドネシア語に翻訳され、裏面に貼り付けた。強度を上げるためにラミネート加工を施してある。

【パソコン及びプリンター：各１台】

パソコンの贈呈に当たり、購入資金に苦慮していたところ、天理大学自治会より体育祭での募金を寄付していただいた。不足金額は参加学生及びスタッフが分担して負担した。大学自治会のご協力にこの場をかりて感謝の意を表します。寄贈したパソコンを使ってモアウォ小学校の先生方にパソコン教室を開きました。

大学自治会より体育祭での募金がモアウォ小学校での教育支援活動のために寄付された

贈呈したパソコンでモアウォ小学校の先生にパソコン教室を開いた

「他者への献身」実践10年

インドネシア・ニアス島訪問

天理大学地域文化研究センター（住原則也センター長）が主導する第11回「国際参加プロジェクト」は、2日から12日間の日程でインドネシア・ニアス島を中心に実施された。今年10周年を迎えた同プロジェクトは、今回の4回目の訪問をもって、同国における活動に区切りを付けることになった。過去最多となる学生19人（うち、ようぼく子弟16人）、教員6人の計25人が参加した〝仕切りのプロジェクト〟では、これまで支援を続けてきたモアウォ小学校を訪問。防災教育や外国語教育のほか、絵本の読み聞かせにも取り組んだ。

天理大 国際参加プロジェクト

このプロジェクトは、天理大が標榜する「他者への献身」を国際的スケールで実践する教育プログラム。これまでにインド、中国、フィリピンへ赴き、主に被災地の自立復興支援活動を展開してきた。

2004年以来、大規模な地震と津波に相次いで見舞われているニアス島。現地における継続的支援を目指す同プロジェクトでは、甚大な被害を受けたモアウォ小学校へ校舎を寄贈したほか、同校の児童らを対象とする防災教育などを継続実施。日本とインドネシアの国交50周年を迎えた08年には、日本政府の「日本インドネシア友好年事業」として同プロジェクトの活動が認定された。

今年、ニアス県教育局と交わした5年の交流期間が終了するのに伴い、同プロジェクトでは、ニアス島での活動に区切りを付けることになった。

継続した活動に反響

今回の主な活動は三つ。一つ目は、紙芝居を用いたインドネシア語による防災教育。二つ目は、同じく紙芝居による外国語（日本語・英語）教育。そして三つ目は、情操教育の一環として、インドネシア語に翻訳した絵本の読み聞かせをすること。

過去最多に上る29人の志願者の中から、面接で選考された学生19人は、5月から事前研修を重ね、紙芝居の脚本案を練ったり、留学生から発音指導を受けたりして、綿密な準備を整えてきた。

2日に日本を出発した一行は、北スマトラ州にある在メダン日本国総領事館への表敬訪問などを経て、4日にニアス島へ。

8日間の滞在中、モアウォ小学校における活動は5日間。学生たちは小グループに分かれ、授業の一環として、低学年には絵本の読み聞かせを、中・高学年には紙芝居を披露した。

学生たちは、紙芝居と絵本の読み聞かせを通して、現地の子供たちと交流した（9日、モウアォ小学校で）

なかでも、紙芝居を用いた防災教育は、教員たちから好評を得ている。ニアス島では、子供向けの防災教育を実施している教育機関がほとんどないなか、同校では、天理大の継続的な取り組みにより、いまでは定期的に防災訓練を実施するようになった。

今回も、教員からは「天理大学の学生たちは、防災知識を提供してくださるだけでなく、被災した子供たちの心を癒やしてくれる」といった感謝の声が寄せられた。

ギターで日本の歌の弾き語りをする学生も（5日、ホームステイ先で）

一方、本の読み聞かせについても、大きな反響があった。天理大教員からプロジェクトの活動内容を伝え聞いた、首都ジャカルタにある出版社「ディアン・ラヤット社」が、子供向けの書籍330冊を同校へ寄贈したのだ。

同社出版局長のクリスチャン・イスカンダルさん（35歳）は「被災した小学校を援助したいという、学生たちの誠実な思いに心を打たれた。こうした取り組みには、ぜひとも協力したいと思った」とコメントしている。

◇

活動中、学生たちはホームステイをしながら、現地の人々とも心の交流を図った。

参加者の一人、渡部京介さん（英米語コース4年・神昭分教会所属）は「真の意味での『他者への献身』を実践するには、現地の人たちの輪に積極的に入るとともに、自らが主体となって気持ちを分かち合うことが大切だと感じた」と感想を述べた。

住原センター長（53歳・菊水分教会教人）は「このプロジェクトを通して、多くの学生たちが〝国際支援の心〟を育み、実行に移してくれた。今回も、学生たちは言葉や価値観が異なる人々とふれ合う中で、さまざまな悩みに直面しながらも、人だすけのあり方を学んだのではないか」と話した。

なお、同センターでは、東南アジアにおける活動を視野に入れつつ、プロジェクトの新たな実施地域について検討を重ねている。

◇

『天理時報』立教173年（平成22年）8月29日

第 11 回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」報告書 2010
発行日：2011 年 3 月 26 日
発行：天理大学地域文化研究センター
〒632-8510　天理市杣之内町 1050
Tel/Fax：0743-63-9077
E-mail:icrs@sta.tenri-u.ac.jp
Website: http://www.tenri-u.ac.jp/icrs/index.html

印刷：株式会社 春日
〒630-8126　奈良県奈良市三条栄町 9-18

IPP 2010

ICRS Tenri Univ.